
東方 絡人繰形店 只今営業中

オルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方 絡人繰形店 只今営業中

【Nコード】

N1952V

【作者名】

オルト

【あらすじ】

ここは幻想郷。

外の世界とは結界によって隔てられている異世界。

そこには人間だけではなく幽霊や妖精、吸血鬼や妖怪、あげくのはてに宇宙人、死神、神様に閻魔様までいたりする。

そして、そんな幻想郷におかしな店主のいる店が一軒。

「絡人繰形店」と看板を掲げるこの店の店主は今日ものんびり？と

営業を開始していた。

絡人繰形店を訪れる、人及び妖怪及び妖精及び神及び幽霊及びetc…達との非常識な日常を描いた一話完結型の物語です。

東方紅魔郷以降に登場する全てのキャラクター達が絡人繰形店に来店します。

俺の嫁を早く出せ！！との要望がありましたら感想へどうぞ、無い頭を振り絞って執筆させていただきます。

絡人繰形店只今営業中…：10月10日現在、来店者「ユニーク」
：26676人、売上「PV」：175281円

絡人線形店――開店と鴉天狗

かつてこの世界には人外の存在がいた。

人間の恐怖を糧として生きる”妖怪”

人間の血液を吸い尽くす”吸血鬼”

人間の信仰心を力と変える”神”

その他にも多くの存在がいた。

妖力があり、霊力があり、神力があり、魔力があると疑われる事はなくそれ等を使い、様々な摩訶不思議現象を起こす。

そんな世界があつたのだ。

しかし、齒車が限界を迎えるようにこの世界にも限界があつた。

時が経ち文明が発達するのに反比例し、人間はそんな力を、存在を、想いを否定し始めたのだ。

気がつく、存在は消えてしまった。

なのに人間達は気づかない・・・否、気づけない。

自分達と共に時を歩んで来た者達を人間は否定してしまった。

時間は決して元には戻らない。

文明という大きな力を手に入れた代わりに、人間は大事な者を忘れてしまったのだから。

けれど、世界に一カ所だけ、一カ所だけそんな世界が残っていたとしたら？

事前に自分達へと迫る未来を予測し、そんな存在が”幻想”が暮ら

す事のできる居場所を作り上げた”賢者”がいたとしたら？

そこは忘れられた”幻想”の住まう場所。

妖力も霊力も神力も魔力もある世界。

人間と妖怪が共存する不思議なトコロ。

その名を「幻想郷」という。

チーチツチツチツ

幻想郷の朝は早い。

小鳥が鳴き始める頃には既に畑を耕す人々の姿が見えている辺りからして、朝の五時六時に起きるのは当たり前なのだろう。

今になっても第一次産業が中心であるこの場所では当たり前の話なのであるが。

もっとも全ての住人がそうかと言われるば、答えは否であり、この時間帯なら安眠を味わっている者も少なくはない。

人外の者達にとっては特に。

かくして人里と妖怪の山、その中間あたりの一本道に堂々と建つ和風の一軒家。

「絡人線形店」とやけに達筆な字の看板を掲げるこの店を根城とする人外も、その例に漏れず惰眠を貪っていた。

二階に設置された「そふぁー」と呼ばれる一種の寝具（以前代金として紅い洋館の主から受け取った物）にひっくり返っているこの男。どうやら昨晩は忙しかっただらしく、着替えもせずに床にいたらし

い。
黒髪黒目のそこそこな美形といっても良い顔立ち、全体的に黒を意識した着物は寝相のせいかな若干乱れている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

男は目覚めない、元より男の起床時間が開店時間であり、就寝時間が閉店時間であるこの店。
決まった開店時間がない絡人線形店ではいつもの事だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

男は目覚めない、ここを訪れる客は、どうせ朝早くに開く事など期待していない。

故に朝に客が来ない絡人線形店ではいつもの事だ。

ガツシャアア！！

窓ガラスが悲鳴をあげた、砕け散った破片と共に投げ込まれたのは、灰色の紙の束もとい新聞だ。

といっても、この幻想郷において二階の窓へと新聞を打ち込むような輩は多くない、というか一人しかいない。

そこの新聞をとっている絡人線形店ではいつもの事だ。

「いやまておかしい！！！」

謎の電波と窓ガラスが割れた音でようやく男が眼をさました、同時に男はとある術を発動させる。
店の周りに強力な結界を展開したのだ。

ドゴオツ、、、グシャー！！

何か結界に正面から突っ込んだ音、具体的に言うのであれば、黒髪ショートで頭には瞳と同じ赤色の山伏風帽を被った鴉天狗が激突した音である。

「あー今度という今度は許さねえぞあのアホ鴉、マジでぶちのめして、、、その前に直しとくのが先か」

男は無惨な姿となった窓ガラスへ意識を傾ける。

するとビデオを逆再生したかのように、破片が窓枠へと張り付いてゆき瞬く間に元の状態に戻ってしまった。

その様子を見届けた男は、一階に降りるため部屋からでようとドアに近づき。

反対側から炸裂したように吹き飛んだドアごと壁へと叩きつけられた。

「のわっ！！」

「店の周りにあんなバカみたいに強い結界を張るなんて、何考えてるのよ連れん！！」

そう声を荒げながら部屋にズカズカと入って来たのは、赤い天狗下駄を履きフリルのついた黒スカートと白い半袖シャツに身を包んだ鴉天狗、射命丸しゃめいまる文あやだ。

見るからに不機嫌そうな彼女、そんな彼女の手に握られているのは葉団扇、振るだけで風を起こす事のできる扇であり文のもつ「風を操る程度の能力」と同時に使われると店ごと廃棄物に変えられかね

ない。

「まあ落ち着け文」

そう判断した男もとい連は態度を一変、、、

「落ち着いて俺に一発殴られる!!」

させなかった、実際に手をあげる事はないが、かなり切れている事だけは確かなようだ。

「大体、お前の目はフジツボか!!一度でいいから店先の新聞受けに気づけ!!なぜ毎回窓を破壊したがるんだお前は、次やったら本気で契約切るぞ、後これ修理頼まれてたカメラな!!」

「え?あ、ああ、どうも、っじゃなくて!!」

イキナリ説教を始めた連に一瞬ポカンとしていた文。

普段の数倍は声を大きくした連の行動に、思わず取材対象に使っている敬語口調が出てしまう、それだけの気迫があった訳だ。

「とりあえず、あの忌々しい結界は今すぐ破棄する事、分かった?」

「それならお前は今後一切新聞は新聞受けに入れる事、これが条件だな」

「善処はするわ」

「お前の善処と不可能は同意語だろうが」

「早くしてほしいのよね、私の新聞を待ってくれてる沢山の購読者の方達がいるんだから」

「という妄想がお前の頭にある訳だ、ぶっちゃけ文々。ぶんぶんまるしんぶん新聞を定期購読してるは俺と香霖堂ぐらいだろっつがよ」

絡人繰形店――無縁塚とカセットテープ

絡人繰形店の店主、岬影^{みさかげ} 連^{れん}の仕事は壊れた物品を直す事だ。

随分と単純な仕事のように見えなくもないがその守備範囲は異常に広く、人間の道具ならいざ知らず、妖怪の道具だろうが、冥界の道具だろうが、魔法の道具だろうが、拳句のはてには使用法の分からない外の世界の道具すら岬影の手にかかればすぐさま修復されてしまう。

そんな岬影だが、一ヶ月に一度とある場所を訪れに行く習慣がある。普段は客の持ち込んだ道具を直すだけだが、たまには未知の道具を修復させたくなるのだ。

それに、そこへ行くのにはもう一つ理由がある。

「よう、今日はなんか掘出し物でも見つかったか？香霖堂」

そい言った彼の視線の先にいるのは、一人の青年だ。

幻想郷でも珍しい銀髪金目に、和風とも、中華風とも、取れるであろう服を着込んでいる。

といても彼は半人半妖なので見かけ通りの年では無いのだが、岬影自身人の事を言える立場ではない。

「やあ連、珍しいな君が月に二日もここに来るなんて、明日は槍でも降るのかい？」

「そーいう事は俺じゃなくて紅魔館とこの吸血鬼に聞くんだな、もつとも怒らせた日にはグングニルの雨が振りかねないが」

もりちか
りんのすけ
森近 霖之助

魔法の森付近にて営業している古道具屋「香霖堂」の店主であり、岬影の善き商売仲間でもある。

岬影の十分の一程の年月を生きておりながら、彼と同等の会話をする事が出来る数少ない存在なのだ。

無縁の者達が眠る、ここ”無縁塚”に彼等がやって来る理由は二つ。一つは無縁仏の火葬や埋葬といった弔いをする為。そしてもう一つが………

「掘出し物といえば掘出し物かもしれないが連、これはどんな道具だと思う？僕の能力だと使用方法までは分からないからね、因みに名称はカセットテープ、用途は音と映像の記録だ」

「ん、音と映像の記録か。つーことはこの黒い巻き取られている所が触媒になってるのか？香霖堂、俺が思うにこいつは中に蓄えた音や映像を外界へ送るための物とセットなんだ、よし見つけた所をもっと良く探そうぜ、もしかすると近くにあるかもしれないしな」

一気に喋り霖之助から場所を聞くなりすつ飛んで行く岬影、その後からヤレヤレといった表情の霖之助が歩いて追いかける。

まあ、これはいつもの事なので霖之助も特に気にしてはいない。

見ての通り、彼等が無縁塚に来る二つ目の理由は、ここに流れ着く道具を拾う為だ、決して盗んでいる訳ではない。ここ重要。

運悪く幻想郷に入り込んでしまい、妖怪の餌食となった外来人の遺

体が多く埋葬されている無縁塚は、幻想郷の外と中、更には墓地であるため冥界とも繋がりやすく実に多くの道具が落ちているのだ。

目ぼしい道具を見つけるとは、まず霖之助が自分の持つ「道具の名前と用途が判る程度の能力」で名前と用途を解析しそれを元に二人で道具の使用方法を考えるのだ。

こう言う時には霖之助の十倍も生きている岬影の知識が非常に冴える………といつても正解率は三割程度で大半はてんでの外れな答えに落ち着くのだが。

「ん？これがそうなんじゃねーのか？ちょっと見てくれや香霖堂」

そう言うって岬影が霖之助に渡したのは、薄い長方形に丸い円盤が二つついている物だ。

「どれどれ？これはテープレコーダー用途はカセットテープの再生か、流石連だなここまで早く見つけてしまつとはね」

「はっ！！なに言つてんだよお前がカセットテープを見つけたのが先だろうが」

そんな事を話しながらテープレコーダをいじり回す岬影、がふと動きが止まる。

もしかして壊れていたのだろうか？そんな事を考えながら霖之助が尋ねる。

「あー香霖堂、これを見てくれ」

「これは……酷いな」

テープレコーダーの裏側、そこについていた金属板が外されていた。本来ならばそこにテープレコーダーの本体ともいえるであろう物が詰まっていた筈。

しかし

「参ったなこりゃ中身が空なんじゃいくら俺でも直しようがねえぞ、俺の能力は対象の元の姿を認識する必要があるしな、そっちの方でなんとかできないか香霖堂」

「生憎となんの手がかりも無いんじゃ厳しいね、せめてこれに類似した物が有ればそこから糸口を見つけられるかもしれないが」

いかに幻想郷トップクラスの知識人と修理屋がいた所で、0から外の世界の道具を創り出すのは困難なのだ、散々探し回った結果がこれで少なからず気落ちする二人、とそこで岬影がこんな事を思い出した。

「そおいや、にとりの奴が似た物を持ってた気がするな、あっちのはこれよりも厚くて円盤もついてなかったが」

「にとり？もしかして河童の河城にとりのことかい？」

河童の河城にとりといえば、河童の中でも指折りのエンジニアだ、確かに彼女の所なら可能性もあると霖之助もとりに協力を仰ぐ事に同意する。

話し合った結果、妖怪の山に近い岬影がにとりの元を尋ねることになり、ことが済み次第また議論を交わす約束をする。

「じゃあな香霖堂、また今度会おうぜ」

「ああ、頼んだよ連、それと天狗の射命丸 文に会う機会があったら、新聞を窓ガラス越しに投げ込むのは止めるように言っておいてくれ」

「ははは、それについては諦めな、俺が何度言ってもあの野郎聞きやシネえんだ」

共通の悩みで苦笑いをしながら、二人は無縁塚を後にする。

(さてと、明日辺りにでもとりのところに行くとするか)

岬影の頭の中には既に完成したテープレコーダーが浮かんでいる訳なのだが、、、残念。

彼女が持っているのはビデオレコーダーでありどう頑張っても、カセットテープを再生する事などできないと知り大いに嘆くのは、明日の話である。

絡人繰形店――死神と舟

カランカラン、とカウベルの乾いた音が鳴り響いた。

総合修理屋「絡人繰形店」のカウンターで何やら作業をしていた岬影の注意が一瞬それる。

「ん？ああ、客が来た」

それだけ言うと再び作業に没頭する店主。

これで良くもまあ潰れないものだと思うが、需要があるのだから仕方がない。

「……………それが分かっているなら今すぐその妙な箱から手を放しな馬鹿店主。アタイが直々に幾つかトラウマを刻み付けてやるっじゃないか」

赤髪ツインテールの死神、小野塚おのづか 小町こまちはヤル気が微塵にも感じられない店主に対し、手に持った鎌の柄を肩に数回ぶつける。

「妙な箱とは言ってくれな、こいつは俺ととりが二人掛かりで使えるようにしたゲームボーイアドバンスGBAだぞ、俺達の一週間の努力の結晶さ」

「OK、とりあえず昨日一日中店先で待ってたのに、姿を見せなかった理由は分かったよ」

いつもの5割増しで不機嫌そうな彼女の様子に、岬影もGBAを置き意識をそちらへ集中させる。

(せっかく「岩男」の操作方法が解ってきた所だったんだがな)

「それで？元気が売りのお前がそんな不帳面引っ下げてどうしたんだ？」

「不帳面は余計だよ、ちよいとまずい事になってね、一緒に三途の川まで来てくれないかい？」

小町の言葉に、岬影は嫌そうな顔を隠そうともしない。

別に三途の川に行くのが嫌なわけではない、以前は無縁塚で拾った珍しい物を持って来る小町に、御礼と称して酒の差し入れをしにいった事もある。

がそれを小町の上司。

幻想郷を担当する閻魔様。

楽園の最高裁判長たる四季 映姫・ヤマザナドウ（しき えいき・やまざなどう）に発見されてしまったのが運の尽き、二人仲良く正座をさせられ丸半日ほど説教を受けたため、半端トラウマとなっているのだ。

けれども

「まあ、客のニーズに対応してからこそその絡人線形店だしな、いいて行つてやる」

「ははっ、悪いねえ連之字、また何か面白そうな物を拾ったら持つてこさせてもらおうよ」

「ああ、頼む」

古くからの顧客を蔑ろにするほどこの店の店主は腐っちゃいないのである。

ところ変わってここは三途の川。

絡人繰形店からそこそこ距離がある場所ではあるのだが、小町の「距離を操る程度の能力」の前ではそんなもの、あつて無きに等しい。

「あー、一つ聞いてもいいか？」

「なんだい連之字、因みに言わなくても分かると思うけど、これはアタイの船だよ」

「いや、言われても分からねえよ」

そんな二人の視線の先には木屑の山、ではなく船頭の死神に支給されるボロ船の残骸が。

どうしてこうなったのか？

聞くと、新参者妖怪を叩きのめした際に流れ弾が直撃したとの事。元がボロボロだった事も重なり、こんな姿となり果てたそう。

自称「三途のタイタニツク」も弾幕には耐えられなかったらしい。

はあー、といかにも面倒くさそうなため息を吐きながら木屑を漁り始める岬影。

「前にも言った気がするけどよおー、さっさと新しいのに変えた方が良いつて言ったじゃねえか」

「そいつはアタイの一存で決められることじゃないのさ、最近は地獄も財政難でね、死神の船の新調にまで金を回す余裕が無いらしい、それで？直りそうかい？」

小町の質問を受けた岬影は木片を漁りながら答える。

「舟自体を元に戻すのは簡単だ、俺の能力を使えば済む話だしな」

「おお！！それじゃー」

「ただし！！」

ビシィ！！と人差し指を真上に突き立てながら岬影は話を進めていく。

「この舟を三途の川に浮かべるための術までもなると難しいのさ、何か術式を支える物がある筈なんだがな、それが見当たんねえんだよ」

三途の川というのは特別な川、すなわち（浮かばずの川）である。そのため、船賃を渋るような魂は川に突き落とされ、泳ぎ疲れた所を外界で絶滅した大型魚や水竜に食われるのがオチだ。

この川を渡るには死神の舟は必要不可欠であり、その舟に付加されている術式もまた必要不可欠。

こういった類いの術式には大抵支えになる物があるはずなのだが・・・

「つまり、その何かが無きゃ舟は直らないって言うのかい？！」

「ま、そうなるわな」

そう告げられた小町の顔がどんどん青くなっっていく。

なんと言うか、そこら辺をつろついている霊と言い勝負だ。

「この事が映姫様にバレたら、、、、、」

「先に言つとくが俺は知らねえぞ、どうしてもっていうならそれが何なのか必至こいて考えるんだな、舟のパーツの一つの筈だぜ」

「そう言われてもね、、、ん？」

何か思い当たる節があったらしく、距離を操ったのだろう、一瞬で姿が消える小町。と思つた瞬間には岬影に向かつて何かを見せている小町の姿があつた。

「こいつは、、、オールか？」

「そうさ、あの中に無い舟の部品と言つたらこれぐらいしかなくてね、どうだい連之字」

そこまで説明され、受け取つたオールを手に持ち再び木屑の山と睨めっこ始める。

、、、、、、、、小町が待つこと数分。

「ビンゴだな、こいつが術式の中心だ間違ひねえ」

「いやあ良かった、これがハズレだったら万事休すだったよ」

「そいつはちげえねえな」

軽口を言い合う二人の前で木屑の山が独りでに蠢き形を作ってゆく。あらかじめこうなる事が決められているパズルのように。

一つ、また一つと木片がくっ付きあつてゆき。

のは、かなりシュールな光景である。

「とりあえず、小町。

帰ったら説教ですよ、これ以上霊達をここで立ち往生させる訳にも行きませんから。

それにその馬鹿店主もです。

後で必ずそちらに顔を出させて頂きますから、覚悟して待っていないさい」

事実上の死刑宣告がなされ、アイ、という気の抜けた返事を返す岬影。

だがそこでこんな言葉が耳に入ったのを岬影は聞き逃さなかった、後で死ぬほど後悔するのだが。

「それにしても、最初から私を頼ってくれば良いのに、」

「あれ？もしかして四季様、嫉妬していらっしやる？」

直後、世にも恐ろしい男の悲鳴が幻想郷中に響き渡った事は言うまでもあるまい。

れな予想をしながら彼女の様子を眺める岬影の表情は、店長と店員というより娘を見守る父親に似ていた。

彼女、連華は見ての通り、ここ絡人繰形店の店員である。
もちろんの事だが、人間ではない。

岬影としては、自分とは余りにも寿命に差のありすぎる人間を雇うつもりは微塵も無いのだ。

彼女の正体は道具が変化した付喪神。

一口に付喪神といっても、道具がそうなるには二つのパターンが存在する。

一つは人間に捨てられ粗末に使われた道具が、怨をはらすため妖怪化する者。

もう一つが逆に、人間に丁重に扱われ廃棄される前に供養された道具が、使用者に恩を返そうと付喪神になった者。

言うまでもなく連華は後者であり、元は岬影の愛用していた片眼鏡モノクルだ。

彼女が付喪神となったのは今から100年程昔の話、それ以来共にこの店を切り盛りしてきた仲である。

特に彼女はその容姿の美しさが人里に人気で、人里からの仕事の発注を一手に引き受けてくれるので、なるべくこの店を離れたくない（決して面倒くさい訳ではない、ないったらない）岬影とってはとても助けになる存在でもある。

しかし、、、

(どうしたらあの”癖”が直るんだかなあ)

癖というのら先ほどの”アレ”の事。

分かりやすく言うと、連華は岬影が側にいるともの凄くアホの子になっってしまうのだ。

物を落とすわ、何も無い所で転ぶわ、うっかり修理中の物を壊しそうになるわと数え上げればキリがない。

100年も一緒に暮らしているが未だに原因は不明。

この事を話すたびに幻想郷に住まう人及び人外に鈍感野郎と言われるのだが、岬影からして見れば全く持って意味がわからない。

「まあ、考えるよりも先にこの惨状をどうにかするかな、ったくあの野郎、一度香霖堂にキツク言っとくように頼んどくか」

言ったところで霖之助からは”僕はあの子の保護者じゃないよ”と言われるのは目に見えているが。

そんな訳で岬影は某白黒に破壊された店の修復に取り掛かるのであった。

「はあ、またやっちゃったなあ、何でしっかりやれないんだろう」

ため息を尽きながら、カチャカチャと手際良く時計を分解していく連華。

時計の時間がしょっちゅうズレるといふ事は、部品のいくつかが寿

命を迎えたからだ。

なので、こうして一度分解し新しい部品に交換して、再度組み立て直すという方法をとる。

気の遠くなるような作業ではあるものの、連華も店長である岬影にしるその気になれば幾らでも徹夜が出来るので、時間はさほど問題ではない。

むしろ連華にとっては、岬影の前でミスを連発する自分の上がり症の方が問題だ。

最早語るのも野暮だとは思うが、片眼鏡モノクルの付喪神である連華は岬影に惚れていた、否、愛していると言った方が的確だろうか。

使用者であつた岬影に恩を返す為に付喪神になつたから、という理由だけではない。

連華

自分の名前から一文字取り連、華やかであれ、という願いから華。合わせて連華。

彼から貰つた大事な名前。

その名に恥じぬ存在であろうと、絡人線形店の店員として働いているうちに、気がつくとその目は常に岬影を追っていた。

悪態を尽きながらも仕事をこなす岬影を、文とは仲が悪いように見えて文々。瓦版であつた頃からなんだかんだで購読を止めようとはしない岬影を、そして仕事が終わるたびに素っ気ない言葉をかけてくれる岬影を。

そんな日々がたまらなく幸せで、岬影は連華の全てとなっていた。

(初めて私に物を直して欲しいって言ってくれたお客さんの為にも、

キツチリ完璧に直さないと、そしたらきつと連様も、、、、、)

一人前に仕事をこなせるようになれば愛しの岬影に認められる筈。取らぬ狸の皮算用と言つべきか、連華の脳内には早くも桃色映像ピジョンが再生されていた。

何故か背景バックには夕陽が輝いており、そんな中二人の唇が……………

「連華入るぞー」

「キヤー!!」

突然後ろから声をかけられ、ピンツと背筋を伸ばし振り返る。

「れ、連様?! 入る時にはノックをして下さい、ビックリしたじゃないですかあ!!」

「アホ、ノックをしても返事がねーから入って来たんだろうが」

どうやら考え事(妄想)に気を取られていて気づけなかったらしい、つとそこまで遡り自分の妄想で顔を赤く染める連華がなんとか平静を取り戻す。

「あ、あの、何かごようですか?」

「いや、まああれだ、時計の修理が順調かどうか見に来ただけだ」

若干だが顔をそらし、ぶつきらぼつな口調で言う岬影の言葉に連華の顔がパア、と笑顔に染まってゆく。

「ハイ、どうやら長針と短針の動きを連結させる為の歯車が寿命だ

った様なので、その取り換えを後は脱進機エスケープメントのメンテナンスもした方が良さそうでしたので、明日の朝までには完了するかと思えます
「

「そおかよ、んじゃ最後の最後でミスらないようにするんだな」

どことなく満足げな顔の岬影。

片手を拳げながら部屋を後にしようとする彼に声がかけられた。

「あの！！連様！！」

「ん？何だ」

振り返ってくれた岬影に、真っ赤になりながら連華はこう言い放つ。

「心配して下さってありがとうございます、私、連様のお役に立てるよう頑張りますから！！」

「ッ馬鹿が！心配なんかするわけねえだろ！！お前がポ力をやらかすところの店の信用に関わるからな、それだけの事だ」

少し慌てた感じで部屋を出て行った岬影。

その後ろをととも幸せそうな顔の連華が見つめていた。

次の日、完全に直された時計を見た岬影が珍しく連華を褒め、その日の連華が使い物にならなくなったのはまた別の話である。

絡人線形店――破壊と再生

「ありとあらゆるものを再生する程度の能力」

岬影が有するこの能力は、数多くの能力が存在する幻想郷でもトツプクラスの凡庸性を誇る能力である。

物理的、精神的、はては概念的な物まで再生することが可能であり、世界一の修理屋を名乗る岬影に相応しい能力と言えよう。

再生という言葉は文字通り（再び生きる）という意味だ。

壊れた（死んだ）道具を再び活かす（生かす）という意味合いでもニュアンスは合っている。

唯一弱点と言えそうな弱点といえば、0からの再生は不可能であるという事ぐらいであろうか。

が逆を言えば、1さえあればそこから100だろうが100000だろうが再生する事が出来るという事。

タイタニックの金属板があればそこから再生させ本物と何ら変わらない複製品を生み出す事も出来る。

質量保存の法則？何それおいしいの？

もとより岬影の持つ霊力モドキ（純粋な霊力ではないので）を消費しているのだ、さらに岬影はその霊力モドキすら再生させてしまうので実質ノーコスト、まさに無限ループ。

そしてその反則的な便利さ（チート）を持つ絡人線形店、店長の岬影 連は今現在。

や1分も持たねえし)

なので真正面から迎え撃つような愚行はしない、角度をつける事であらぬ方向へ誘導していく。

やがてスペルカードが終わりを迎え、嵐のような弾幕が収まった。

「あれ？まだ生きてるの？早く壊れて素敵な悲鳴を聞かせてよ」

「残念ながら俺は不老不死の十倍は死ににくいぜ、フランドールの嬢ちゃん」

岬影に対峙しているのは金髪紅眼の少女。

捻じ曲がった時計の針の様な鏝を持ち、その目は狂気に犯されているらしく酷く不安定な光を湛えている。

フランドール・スカーレット

495年の年月を生きる吸血鬼はその紅い目で岬影に狙いを定めた。

「どつちにしろ不老不死なんだから変わりないでしょ？」

「比喻表現だよ」

何故こうなったのか？

それ知る為には一時間ほど時を遡る必要が「禁忌」レーヴァテイン
「！！！」

莫大な魔力が魔鏝に込められ、その先端からアホみたいにぶつと
レーザーが噴き出す。

「ちょ、おまつ、ちったあ空気読め！！輪廻「サクリファイスイス ケープ」！！」

刹那、岬影の体が爆ぜた。

体の破片が散らばるとかそんな次元の話ではなく、粉状になって霧散したのだ。

そして、数秒前まで岬影がいた地点を紅いビーム状の弾幕が通過した。

「あつぶねえ、あんなのガードしたら盾ごと消されちまうトコロだ」

「まだ生きてる、私のスペルを二つも食らったのに、オジサン本当は強いんじゃないの？」

「オジサン言うな、一応見た目は25歳に設定してあんだからよ」

いつのまにか、移動していた岬影。

そもそも、見た目基準で歳を判断するような奴は幻想郷では三日も持たない。

ここの住人達は皆、そう言う事には非常に敏感なのだ。

こうなった理由を知るには一時間ほど時を遡る必要がある。、、、
、、、、どうやら遡れそうだ。

「人形の修理？」

「ええ、そうです。
腕の良い修理屋がこの店にいる、と古道具屋の店主さんが仰っていましたから」

その古道具屋の店主というのは、十中八九香霖堂のことだろうな、
と思いつつ岬影は目の前の少女、幻想郷のパワーバランスの一角を
担う勢力である、紅魔館のメイド長、十六夜しゅうた 咲夜さくやを目視する。

白のエプロンに濃紺のエプロンドレス、それにレースのホワイトプ
リズムを頭に装着した完璧な侍女服、その身に秘めている濃厚な靈
力といい、伊達や粹狂で完全に瀟洒な従者を名乗っている訳ではな
いらしい。

「そいつは光栄だ、紅魔館直々のご指名とはな、まあとりあえず現
物を見せてくれないか？そうじゃねーとなんとも言いようが無いん
でね」

クスリ、と可笑しそうに微笑む咲夜。

「あら？あなたの持つその能力を使えば、どんな物でも直せるので
しょう？」

その言葉に岬影の視線が厳しくなる。

なぜなら、岬影の能力を知っているのは古くからの友人ぐらいで、
彼ら彼女らにはバラさないう様に頼んである筈だからだ。

物品の修理にも極力能力は使用せず、幻想郷縁起にも（妖怪ではな
いのに乗っている）それを書かないよう当時の稗田に頼んだほどで
ある。

「何が狙いだお前、いやレミリア・スカーレットは何を企んでいる

「？」

「お嬢様は全てを見透かしています、当然貴方が紅魔館に訪れるという事も、あたしは人形の修理を依頼するようにと命を受けただけですから」

「ーぬけぬけと言ってくれる、どうせ同意しなければ力ずくでも連れて行くくせに。」

口には出さず岬影はため息を尽きながら腰を上げる。

ここでやり合うのもバカバカしいし、流石に紅魔館を敵に回す訳にもいかない。

というか、願うことならこれを機にお得意様になって貰う気満々である。

もちろん、口には出さないが。

そして時は現在に戻る。

「ちくしょう！！あのメイド野郎後であつたら覚えとけよ、幾らなんでもこれは無理だアあ！！」

「アハハ！！オジサンオモシロイ！！」

再び全力疾走の岬影を追う四つの影。

禁忌「フォーオブアカインド」によって四人に増えたフランドールが洒落にならない密度の弾幕を放ちながら追いかけてくる。

目が、目がヤバイ。

既に言葉も片言になり、恐らく岬影を破壊することしか頭にないのだろう。

（このまま逃げちまうのもありだが、誰かが空間に細工しやがったな、これだけ進んで何も見えてこねえ）

因みにそれも咲夜の「時間を操る程度の能力」の仕業であったりする。

時間を操るといふことは、そのまま空間を操るといふ事に直結するからだ。

紅魔館にやって来て言われるがままに入った地下室。

そこで出会ったフランドールに弾幕ごっこをしよう、と言われ今に至る。

あくまでも推測の域を出ないが、紅魔館の主、レミリア・スカーレットは自分をフランドールに対する抑止力として使おうとしたのだろう。

なぜなら、岬影の持つ「ありとあらゆるものを再生する程度の能力」はフランドールの「ありとあらゆるものを破壊する程度の能力」の対極に位置する能力だからだ。

破壊と再生。

相対する二つの力は表裏一体。

両方あって始めて世界は成り立つ。

「まったく面倒くせえが仕方がねえな、出たところ勝負でやってみるか!」

別に無理する必要はない。

いかに空間を弄んだところで、岬影が本気で逃げようと思えば逃げる事も出来る、、、面倒だからやりたくないが。

けれど。

(あいつの、、フレンドールの心境も分からなくはねえんだよなあ)

能力故に疎まれる。

強大であればあるほどにだ。

きつとフレンドールは淋しいのだろう。

遊び相手が欲しいのだと思う。

けど、遊んでいたらみんな壊れてしまう。

なら

(はぁーこりゃまた四季様にどやされるな)

壊れない遊び相手が居ればなんの問題もない。

「「「「ココマデダヨ、オジサン」「「「「

「だからオジサンじゃねーよ」

逃げるのをやめた岬影を四人のフレンドールが囲む。

四本のレーヴァテインが向けられ、、、そして。

「再生「蘇りし魂の使役」」

瞬間、紅が白に塗り潰された。

四方向からの紅い奔流を遮る様に出現した白き輪。
それが凄まじい勢いで膨張し。

白い光がフランドールを優しく包み込んでいった。

「————ここは」

「よう、起きたかフランドールの嬢ちゃん」

目覚め、自分の様子を見ていたのだろう岬影の姿を確認するフラ
ンドール。

立ち上がって確認するが傷らしい傷は無かった。

「えっとオジサンは」

「何度も言うが俺はオジサンじゃねえ岬影 連だ、遊び相手の名前
ぐらいちゃんと覚えろよな」

「遊び、、、相手？」

岬影の言葉に、意味が分からないといった感じにキョトンとなるフ
ランドール。

対する岬影は苦笑して。

「そう遊び相手だ、遊び仲間でもいい、俺達は正々堂々弾幕ごっこをしたんだ、もう友達だろ？」

「友達、、、」

「そうさ友達だ、これからよろしくなフラン」

そう言って差し出された腕を戸惑った様子で見つめるフランドール。静寂が空間を支配した。

すると

「友達が、うん良い響き、こっちこそよろしくね連」

そして、互いに握手をしあう。

その後フランドールによって破壊された館及び大量の人形を直し、かくして岬影の紅魔館での初ビジネスは大成功を納めるのであった。まあ裏話をするのであれば、レミリア・スカーレットとの商談があつたりしたのだが、こんな時にそんな話をするのはK・Y以外の何者でもない。

そうこれが仮に姉バカ吸血鬼による、妹に友達を作ってあげたいが為の運命への介入だったとしてもだ。

絡人線形店――友人と宴会

宴会のお誘いが来た。

宴会といっても、博麗神社にて度々行われているあの宴会ではない。どうやら今夜もやるらしいが、もし仮にその宴会のお誘いなら、相手が喋り終わる前に断るところである。

以前一度だけ、連華の強い勧めもあり参加した事があるのだが、あれは酷かった。

岬影からして見れば、酒を湯水のように消費する愚行に参加するぐらいなら、店で道具を弄っている方がよっぽど有意義な時間過ごせるというものだ。

が今回岬影に誘いがかったのは博麗神社の宴会ではない。

「では、連様。

私は妖夢さんのお手伝いをするので、一足お先に行ってまいりますね」

「おう、ちゃんと幽々子に挨拶をするんだぞ、俺はこのパソコンの修理が終わったら行く」

「分かりました、そのようにお伝えします」

会話が終わると、大きめの荷物を背負った連華は空へと飛び立って行った。

行き先は冥界。

その管理者の住居である白玉楼だ。

今宵の宴会の会場でもある。

まあ宴会と言っても参加するのはたったの三人。それと従者が三人だけなのだが。

博麗神社での騒がしい宴会とは違い、彼女等と風情を楽しみながらの宴会であるならば、岬影としても断る理由がない。

「んじゃ、さっさパソコンの修理を済ませるとするか、あんま待たせると後が怖い」

誰が、、とは決して言わない。

そんな訳で岬影は、お得意様である永遠亭より依頼されたパソコンの修理にスパートをかけた。

因みにこのパソコン、正式名称はパーソナルコンピュータといい、香霖堂曰く外の世界の式神らしいのだが、、、、

(Windowsって、、何だ?)

残念な事にそれは、幻想郷に住む岬影には一生回答の得られない問題だ。

冥界。

そこは閻魔様の裁判を終え、成仏もしくは転生が決まった霊達がそれを待つ間過ごす世界。

そこには死者しか存在せず、常に静寂に包まれている。

なので。

妖夢「お腹が空いたわ〜、とか。

幽々子様！！宴会までもう少しですから、お願いですから我慢して下さい！！ああ連華、幽々様を止めてえ！！、とかは幻聴だ。幻聴と言ったら幻聴なのだ。

（相変わらず賑やかそうで何よりだ）

白玉楼へと続く長い階段を登りながら、岬影はそんな事を思っていた。

最近は顕界と冥界の境界が薄くなっており、人間や妖怪もポンポン入って来ているらしい。

岬影としては、古くからの友人を訪れる事が出来るのでありがたいのだが、同時に、それで良いのか幻想郷、と思う節もあつたりする。まあ問題ないのだろうが。

やがて階段の終わりが見えてきて、最後の一步を踏み終える。

そこで岬影を待っていたのは予想通りの人物？であった。

人の形をしていた訳ではない。

空間に不自然な黒い線が入っており、その両端に結ばれているのは紫色のリボン。

ゾン！！！！

という妙な威圧感と共に黒い線が擦れ、開いた。

「お久しぶりね岬影、相変わらずの不機嫌面で安心したわ」

「ええ、久しぶりですね紫さん、相変わらずの胡散臭さで安心しました」

「あら、ご挨拶ね、仮にも命の恩人なのに」

「それはソレ、これはコレです」

そこに在るのは”スキマ”

無数の目がギョロギョロと蠢く。

そこから上半身を乗り出しているのは妖艶な雰囲気を持つ女性。妖怪の賢者、幻想郷最強の妖怪の一人。

八雲やくも紫むかり

「境界を操る程度の能力」を使いこなす正真正銘の強者である。

数秒間の沈黙。

「それで？いつまでその気味の悪い笑顔を貼りつけてるつもりなのかしら？」

「わりいわりい、そっちが悪ノリしてきたんでつい、な」

「まあ、最初に振ったのはこっちなのだし、根に持つのは止めとくわね」

(やっぱ敵わねえなこの人には)

そんな事を思いつつも、スキマから出てきた紫と共に白玉楼へと歩みを進める。

「それにしても、博麗神社のほうに顔を出さなくても良いのか？今代の巫女には随分と御執心らしいじゃねえか」

「店に籠っている割には案外情報が速いのね、色々と説明しなくて済むのは助かるわ」

「自称、幻想郷最速の新聞と契約しているからな」

他にも、顕界と冥界の境界が薄くなっているのは紫の仕業だとか、驚きの新事実が発覚したのだが、そのところは省略しておくしよう。

今日は宴会に参加する為に来たのだから。

「幽々子〜来たわよ〜」

スパーン！！

という効果音をつけたくなる勢いで障子を開ける紫。

その勢いにお盆を運んでいた連華と半人半霊の辻斬り・・・ではなく庭師の魂魄こんぱく 妖夢も驚いた様子でこちらに視線を向け、慌てて頭を下げ挨拶をする。

「珍しく紫が直接乗り込んで来ないと思っていたら、連も一緒だったのね」

そんな状況でも瞬き一つせずに悠然と佇む女性。

「死を操る程度の能力」を有し、閻魔様より冥界の管理を一任されている亡霊の姫君。

西行寺 幽々子は空さいぎやうじになつた皿の山を周りに従え、つてちよつとまて。

「あー幽々子？確か俺は宴会に招待されたはずなんだが」

「ゴメンなさいね、ちよつとお腹が空いてしまつて」

「ーいや、ちよつとでこの量はねーよ
とは口に出さない。」

「ああ、岬影そのことに関しては心配しなくても大丈夫よ、もうそろそろ着く頃でしょうし」

「あら？そついえばもうこんな時間ね、早く来ないかしら」

まだ食べるんですか？！

という悲鳴が聞こえるが無視する。

それよりもっと大事な事が耳に入ったからだ。

「着くつて何がだよ？つーかお前らがそついう笑みを浮かべている時点でやな予感しかしないぞ！！」

「酷い言い様ね、こんな美少女二人を捕まえておいて」

「本当ね、紫はともかく私はそこまで胡散臭くないと思うのだけど」

（よく分からねえがここは三十六計逃げるに如かずだ！！）
そつ判断するしないや、障子の向こうへジャンプした岬影は。

目の前のスキマへと綺麗に突っ込んだ。

「お帰りなさい、随分早かったのね」

(どの口が言うか、どの口が!!)

再度脱走を試みた所でここから出られないと知った岬影は腹を括る。

そして”来た”

始めは夜空に見える一粒の点であった。

それはドンドンと大きくなってきて、くく、ゴウン!!!!!!!!!!という音と共に白玉楼へと到着した。

「おっしゃ!!私が一番乗りだぜ!!」

そんな事をほざいているのは、金髪に黒いトンガリ帽、いかにも魔女です、と全身で訴えているような少女。

普通の魔法使い、霧雨きりさめ 魔理沙まりさだ。

「ん?誰かと思ったら連じゃないか、珍しいな宴会に参加するなんて」

「あ、いや俺が招待されたのは白玉楼の宴会なんだが、」

岬影に気がついた魔理沙の言葉に嫌な予感が脳内で膨れ上がる。

まさか。

「何言っているんだ?」

まさか、まさか。

「ここは今日の宴会の二次会場だぜ？」

「そんな事だと思ってたぞ、畜生！！！！！！！！！！」

恨めしげな目で主犯であろう紫と幽々子を見つめるが、後の祭り。かくして、岬影のトラウマに今夜新たなページが刻まれる事となった。

絡人線形店——巫女とコップ

「おーっす！！邪魔するぜ連！！」

「入るわね、岬影、御茶請けは饅頭にしてくれる？」

「何の用だ、”変な魔法使い”に自称”楽園の素敵な巫女（笑）」

店のカウンターに腰掛けた岬影が、先週無縁塚で拾った本を読んでみると、ドカア！！というカウベルの鳴る音、ではなくドアの粉砕される音と共に客（泥棒）が襲来した。

取り合えず、この二人の積み上げたツケにドアの修理代を加えながら、接客をこなす。

絡人線形店の店長としてはあらゆる（邪魔な）客と語らう（戦う）事も重要なのだ、店の存続のためにも。

「私は”普通”だぜ」

「私は他称だしね」

ああ言えばこう言うフリーダムすぎる少女達に、思わず物理的に放り出したくなるがグツと堪える。

仮にも幻想郷で度々起きる異変を解決してくれる人間なのだ、邪険に扱おうとスキマに放り込まれかねない。

「それで、本当に何のようなんだ？冷やかしなら回れ右して帰れ、出来れば当分来ないでくれると俺の財布が喜ぶ」

「失礼ね、今日はちゃんと客として来たのよ、代金はツケだけど」

「結局ツケじゃねえかよ、払う気あるのか？」

「ないならこの店には来てないわね」

どうやらこの巫女は真面目に答える気が全く無いらしい。

まあそれでこそ、幻想郷を守護する大結界「博麗大結界」の管理者たる博麗^{はくれい} 霊夢^{れいむ}の在るべき姿なのだと思う、思うのだがこちらとしては迷惑この上ない。

「そんで？そつちの白黒は何を”盗み”に来たんだ？」

「おいおい、人聞きの悪い事を言わないでくれよ、私は借りてくだ
けだぜ、ちゃんと返す私が死んだらな」

「ああ連華、悪いんだが倉庫の片付けを切り上げてこつちに来てく
れ、お帰りのお客様を見送って欲しいんだ」

霊夢と同様にのらりくらりと言葉をかわす普通の魔法使い霧雨 魔
理沙。

そんな彼女の対応にカチンと来た岬影は通信用の護符で連華に連絡
する、霊夢も似た様なものだが魔理沙にはこの間（第四話）店を吹
き飛ばされた仮がある。

決して先日の宴会で、嫌と言うほど酒を飲まされた仕返しではない
のだ。

「連様？一体お客様ののお見送りって白黒！！」

・・・なるほど性懲りもなく商品の強奪に来たって訳ね！！いいわ
相手をしてあげる、表に出なさい弾幕ごっこで勝負よ！！」

「まったく今日は本当に客として来たんだけどな、売られた弾幕ごっこは買うに限るぜ!！」

魔理沙を撃退し岬影に褒めてもらいたい一心で戦いを挑んだ連華と、根本的に弾幕ごっこが好きな魔理沙は店の外へと出て行った。

その気になれば岬影一人でも魔理沙を退けるのはた易いのだが、なんだかんだで魔理沙に甘い霖之助に免じて手は出さない。

「どさくさに紛れて私に全部押し付けたわね魔理沙の奴」

「そういうお前もどさくさに紛れて俺の饅頭を食ってんじゃねえよ、っーかどうやって見つけたんだ?」

「勘よ」

流石はてけとーに進んで目の前の障害を撃破するだけで異変を解決する巫女だ。

スペックの高さは半端ではないらしい。

かといって、先日の詫び（彼女らの顔に反省の色は見られなかったが）として紫と幽々子から貰った饅頭を食べるのは止めて欲しいのだが。

「これを直して欲しいのよ、それこそ割れる前と見分けがつかない様に完璧にね」

そう言って霊夢が渡してきた品を岬影が受け取った。

「こいつは、コップか。」

しかも西洋風のアンティーク物だぞ、買おうとしたら5円は堅いな、なんでこんな高級品をお前みたいな貧乏巫女が持つてくるんだ？」

「そんな事はどうでもいいでしょ？私が聞きたいのは直せるか直せないか？よ」

なにやら裏が有りそうだな、とそこまで思考がたどり着いた時点で、岬影はある事に気づいた。

（ん？このコップ前にどっかで見た様な気が、しかもごく最近）

西洋風のアンティークコップ。

西洋風、、、

西洋、

「これ、紅魔館とこのコップじゃねえか、なんでまたこんな・・・
・ああ、そう言う事が、それでここにきたって訳だ、なるほど、なるほど、なるほどなあ」

ニヤニヤと笑みを浮かべる岬影の指摘に霊夢は答ええない。
しかし答ええないと言う事は、肯定しているも同然である。

恐らく霊夢と魔理沙は紅魔館を訪れており、その際になんらかの過程を経てコップを割ってしまったのだろう。

これは霖之助から聞いた話だが、以前レミリアが神社のコップを割った時に霊夢はかなり怒っていたそうだ。

そんなことをした手前、ばれない内に直してしまおうと思ったのだろう。

香霖堂は霖之助経由でバレる可能性が在るので却下、ならば残りはここ絡人繰形店しかないと言う訳だ。

誤算があったとするならば、岬影と紅魔館の間には作られたばかりのパイプがあったという事。

「まあ、コップを直すのは構わねえよ、、、その代わり」

”お客様”に対するサービス満載の笑顔を浮かべた岬影は言い放った。

「貸し、一つだな」

そんな、店の外では閃光が瞬き、轟音が巻き散らかされていた。

数日後――

絡人繰形店には再び博霊 霊夢の姿があった。

「いらっしやい、ん、霊夢か今日はどうしたんだ？」

前回の来店で貸しを作る事に成功した岬影の顔には余裕しか無い。流石の霊夢もこれではツケで依頼は出来まい、と高を括っているのが丸わかりだ。

しかし、気のせいか霊夢の表情にも余裕しか無い要に見える。

「ちよつとした新聞配達のお手伝い、って所かしらね」

新聞？と思いつつも岬影が受け取ったのは、岬影が購読している文
々。新聞だ。

――それなら昨日最新号を受け取ったばかりなんだが

などと考えながら、新聞の大見出を見た岬影は。

「な、な、な、何だこれはああアアアア！！！！！！」

と言う叫びと共に飲みかけの緑茶を噴き出した。

新聞の第一面の見出しはこうだ。

絡人繰形店、店長と店員の危険な恋？！

先日、本新聞の射命丸 文記者兼カメラマン兼編集者兼新聞配達員
が絡人繰形店を訪れた所、彼らが（中略）している決定的瞬間を捉
える事に成功した、以前より岬影店長は店員である付喪神連華とそ
れらしき関係を築いているとの噂があり今回ついに（中略）我々と
しては心からの祝杯を（以下略）

そんな感じの記事が長々と続いており、それを裏付ける様に、かな
り引き伸ばされた写真がデカデカと貼りつけてあった。

そこに写されていたのは、岬影と連華。

ちよつど尻餅をついた連華の上に、覆いかぶさる様な格好をしてい
る岬影は360度何所から見ても立派な変態である。

「これは、あの時の」

二日前の事。

いきなり絡人繰形店の周囲を極地的な振動が襲った。

その結果がこの写真であり、別にやましい事など何一つないのだ。

「霊夢、お前まさか」

「知り合いの不良天人に頼んでちょっとね、安心していいわよこの新聞、剃ってあるのはこの一部だけだし、ま、そういう事で」

物凄く良い笑顔でこちらを向く霊夢。

「貸し、一つね」

後日、妖怪の山にて天狗に宣戦布告をしようとする絡人繰形店の店長と、それを必至で止めようとする店員の姿があったとか、なかったとか。

絡人線形店――半獣と人里（前書き）

今回はちょっとシリアス入ります。

今後も四、五話に一話程度のペースでちょっとシリアスが入る事があります。あくまでも笑中心で行くので、温かい目で読んで下さると幸いです。

絡人繰形店――半獣と人里

絡人繰形店に人間の客が来た。

これはかなり珍しいことだ、魔理沙や霊夢も種族的には人間ではあるが、あの二人は色々な意味で規格外なのでカウントしない。

「いらっしやいませ、物品修理の依頼ですか？」

いつになく丁寧な口調の岬影、まあ誰だって。

「あのおゝ岬影様と言うのは貴方の事なのでありませんでしょうか？」

70は過ぎているであろう老婦人が来客すれば、似た様な対応をする筈だ。

「確かに岬影つてのは俺の名前だが、俺に何か用でも？」

客ではないと直感的に判断した岬影は営業口調をどこかへ捨てる。見た所、絡人繰形店ではなく岬影に用があるらしい。

「ああやはり貴方が、申し遅れましたな、私は千夜^{ちよ}人里の花屋です、と言っても現在は孫夫婦が店をやっていますが、覚えていらっしやるかは分かりませぬが……」

「ああ、あの時のチビスケだろ？一応俺が仕事で関わった奴の名前は全部覚えているんでな」

「覚えていて下さったのですか？」

なにやら感激した笑みを浮かべこちらに顔を向ける千夜、眩し過ぎて直視出来ないとばかりに視線を反らした岬影の顔にあるのは、形容し難い感情の渦。

彼の頭の中で再生されているのはある一夜の出来事。

今より、70年も過去の話しであった。

幻想郷には人里と呼ばれている一種の街がある。

もつとも、街というより村に近い気がするが、そんなことは些細な問題だ。

現代においても紅魔館のメイド長や、魔法の森の普通の魔法使い、それと博麗神社の巫女などごく一部の人間以外は皆この人里にて生活を営んでいる。

そんな場所に、しかも真夜中に岬影の姿があるのにはとある理由があった。

「本当に、本当にありがとうございます、何と御礼をすれば良いのか、私、私、もう二度とこの子を抱いてあげれないと思ってたのに、う、ひぐっ、」

「あー泣くな泣くな、近所の人間に見られると面倒だ、それにこいつは現世においちや禁忌中の禁忌、そいつにお前さんを巻き込んだじまった以上非難されても、感謝される筋合いはねえよ」

必死に頭を下げる17、8歳程度の少女とむっとりとした表情の岬影、彼女の腕には生後一週間と言ったあたりの赤ん坊が抱かれている。

少女の目からはこれでもかと言うほどの涙が零れ落ち、地面に黒い斑点を作って行く。

「じゃ俺はもう行くぜ、精々幸せに生きろよ、それとこの事は誰にも言わねえと約束してくれ、じゃねえと俺はここでそのチビスケを殺さなくちゃならねえんだ」

「誓います、誰に話したりなどしません、それにこの御恩は未代まで忘れません」

「助かる、それじゃな」

「あ、あの」

立ち去ろうとした岬影を少女が呼び止める。

「なんだ？」

「最後に一つだけ、お名前を教えるは下さりませんか？いつか必ず礼を言いに参りますから」

「別にそんなぐらいは教えてやるよ、岬影だ、どうせ」

忘れちまうんだがな、とまでは決して口に出さない。

そのまま、ふりかえる事なく岬影は人里の外れまで速足で歩く。適当な壁に背を預けた岬影は珍しく重々しい口調で口にした。

「悪いな、慧音、お前にまで迷惑をかけちゃって」

「構いはしないさ、元はと言えば私から頼んだ事なのだし、岬影にそこまで言われると不自然な気分になってしまう」

物陰から現れたのは一人の女性、頭には特徴的な立体型の帽子をかぶり、白と水色の二色の髪の毛は二の腕の辺りまで伸びている。

かみじゆきわ
上白沢 慧音

知識と歴史の獣、白沢ハクタクの半獣である少女だ。

岬影が行った禁忌の片棒を担ぐ人物でもある。

「では、始めようか」

「ああ、頼む」

慧音の有する能力は「歴史を食べる程度の能力」だ。今回慧音が食べる（隠す）のは一つの歴史。

「赤ん坊が死んでしまった歴史」

先ほど少女の腕に抱かれていた赤ん坊のことである。

死者蘇生。

これこそが現世における最大の禁忌。

岬影の「ありとあらゆるものを再生させる程度の能力」は魂のカケラさえ残っていれば死者の蘇生すらも可能にする。

死後半日という限定された期間、死者は蘇り再び生をつける。

その際に生じる矛盾を消すために慧音がいるのだ。

そもそも、岬影に赤ん坊の蘇生を依頼したのは他でもない慧音なのだ。

慧音の能力では実際に起こった事を隠すことは出来ても、無かった事にはならない。

岬影の能力では実際に起こったことを無かった事には出来ても、隠すことは出来ない。

だが、この二人が協力すれば、話は違う。

岬影が赤ん坊を蘇生し、慧音が赤ん坊が死んだという歴史を隠す。

そうする事で、赤ん坊が生きる事によって生まれる誤差を無くせるのだ。

「よし、これで大丈夫だろう」

「んじゃ俺は店に戻るぜ」

「まあ待て、久しぶりに会ったんだ、今夜は家で食べていくだろう？」

疑問形ではあるが、慧音の手は既に岬影の腕を掴んでいる、どうやらこのまま帰す気は無いらしい。

仕方がない、と諦め大人しく従うことにした岬影。

たまには友人の誘いに乗ってもバチは当たらない。

「岬影は良かったのか？」

食事が終わり、唐突に慧音は岬影に質問した。

何がだよ？とは聞かえさない、そんなものは尋ねなくとも分かっている。

「良かったも何もあんな顔したお前が店に来て、ほっとく訳にもいかねえだろ」

とても暗い顔をした慧音が絡人繰形店を訪れたのは、つい四時間前の話だ。

その訳を聞いた岬影はこう提案した。

「その歴史を無くしちまえばいい、と。」

岬影からして見れば赤の他人かもしれないが、慧音にとっては生まれた時から見てきた少女の子供なのだ。

その少女の気持ち痛いほど分かってしまったのだろう。

「すまないな、そんなつもりで来た訳では無かったんだ、ただ千夜の亡骸を抱く千鶴の顔を見るのが辛くて、気が付くと店の中にいた」

千夜と言うのはあの赤ん坊の名前のようだ。

申し訳なさそうな表情の慧音に対し。

そう言う意味じゃねえよ、と岬影はぶっきらぼうに語りかける。

「俺がここで上手く店をやってけるのもお前のおかげだ、恩人を蔑ろにする程俺は愚図じゃねえし、お前が困ってるのを無視するよくなバカでもねえ、俺が言いたいのはだ、お前は大丈夫なのか？ 人里を守る事が悪いとは言わないがな、そんなに苦しいんなら別の生

き方もあるんじゃないかねえのか？」

要約すると、岬影は慧音の心配をしている、と言う事だ。

岬影の言葉にほんのりと笑みを浮かべた慧音は、首を横に振りながら答える。

「千鶴は幼い頃から惚れていた奴がいてな、私は事あるごとに相談されたよ、恋愛経験など微塵も無かったがそれでも千鶴の力になってやろうと努力した、そしてやつとの思いで想いを伝え籍をいれ子供が出来た矢先に夫は事故死、だというのに最後の希望であった子供まで無くしてしまった千鶴を見て、私は運命というものを心底恨んださ、お前の言う通り、寿命に差がありすぎる彼等と共に生きる以上、辛い別れも、悲しい出来事も多々ある」

けどな、と慧音の言葉は続く。

「それでも私は人里で、人間と暮らす今の生活を愛しているんだよ、確かに不幸な事は起こる、だがそれと同じように幸福な事もある、お前が心配してくれるのは嬉しいがこれだけは譲れないんだ、だからお前に頼るのはこれが最初で最後、もう大丈夫だ」

話を聞き終わった岬影は一言だけ、ハッキリと宣言した。

「バーカ」

「バ、バカ?!」

面食らった様子の慧音を無視して岬影は畳み掛ける。

「まず最初に俺はお前の心配なんかしちやいなえし、人里の生活が

どうだとかは俺の知ったことじゃねえんだよ、それに、、、俺を頼らないなんて言うな」

「あ、岬影!!」

慧音の抑止を目にもくれず岬影は慧音宅を飛び出し、そのまま飛んでいってしまった。

その方向を見たまま慧音の口から思わず、と言った感じで言葉が漏れた。

「まったく、バカはどっちなんだ」

その言葉は暗闇に溶け誰にも届く事無く消える。

店を尋ねて来た老婦人、千夜の感謝の言葉などを一通り聞いた岬影。

「それで？誰からその事を聞いたんだ？お前の母親には口止めした筈なんだが」

岬影の質問に、千夜はすらすらと答える。

「慧音様ですよ、ここまで送ってくれたのもあの方です」

確かに、慧音にまで口止めをした憶えは無かったな、と岬影は納得する、、、訳がなかった。

これでは口止めをした意味がまるで無い。

後で、何か奢らせるか、と考える。

「仕方がねえついて来な、ついでだ人里まで送ってやるよ」

「ええ、慧音様もきつと貴方様が送ってくれるだろう、とおっしゃっていましたよ」

訂正、店の余り在庫を全部買い取らせよう。

そう覚悟を決めながら岬影は千夜を人里へと送るため、連華に店番を頼むのであった。

上白沢 慧音に説教する、というかなりレアな体験をした岬影は少し考え事をしていた。

死者を蘇生させると言う事は、本来閻魔様の下で裁かれる魂を現世に留める行為であり、そんな愚行をあゝ閻魔様が見過ごす筈が無い。

と言う事は、、、

(わざと気づかないフリを?)

自分で仮設を立てて起きながらナイナイ、と首を横に振る。

あの堅物閻魔に限ってそんなことは、、、

だが、それ意外に可能生がない。
信じられないがきつと正解なのだろう。

（今度、、何か差し入れでもするか）
そこには珍しく、本当に珍しく笑みを浮かべた岬影の姿があった。

数日後、是非曲省庁、四季 映姫・ヤマザナドゥ宛に届いた高級品の数々見て、割と本気で岬影の心配をした映姫がやってくるのだが、それはまた別の話だ。

絡人繰形店――病氣と薬師

「38度6分、夏風邪をこじらせたみたいね」

「うう、すみません連様、ご迷惑をかけてしまって」

「いいから黙って寝てろ、謝る暇があんならさっさと直せ」

ここは迷いの竹林、永遠亭の一室。

様々な道具や薬が置いてあるせいか、独特な匂いが充満している。

そんな中、体温計を片手にメモをとっている女性が1人。

赤と青を上下左右に分割した服を着ており、頭には看護婦の様な帽子。

月の頭脳、幻想郷に住む三人の蓬莱人が一人。

八意 永琳だ。
やじころ えいりん

この部屋は彼女の診療室。

ベットで横になっているのは絡人繰形店の店員である片眼鏡モノクルの喪神、連華である。

すぐ側には岬影の不帳面があるが、これは連華が仕事中に倒れ途中で止めざる終えなくなつたから、、、ではない。

「なんで直ぐに具合が悪いと言わなかつたんだ、昨日から具合が悪かつたんだろ？」

「申し訳ありません、連様が頑張っているのに自分だけ休む訳には
・・・」

「それで倒れたら本末転倒だろおがよ、ちったあ自分の体を大事にしやがれ」

岬影の言葉に、悔しいのと、嬉しいのと、恥ずかしいのと、で枕に顔を押し付ける連華、モノクルは外しているので顔に食い込むようなことにはならない。

そんな彼女の様子に、どんな心情から知らないが、長い編み込まれた銀髪を揺らす永琳から助け舟が出た。

「ま、彼女も反省はしているみたいだし、その辺にしてあげるのね、それにこの症状なら一晩寝れば熱は下がるわよ、今日はここに泊まってもらうことになるけど」

「ん、まあ分かったんなら良いんだ、またぶつ倒れたらたまったもんじゃねえからな、それと永琳悪いが部屋一つ借りるぞ、どうせ明日は姫さんからの依頼でここに来る予定だったからな、ついでなんぞ泊まってく」

「ええ、構わないわ、うどんげ」

永琳の呼びかけに隣の部屋から、薬の調合をしていたのだろうか、いつものウサミミブレザー姿にエプロンを装着した鈴仙・優曇華院・イナバ（れいせん・うどんげいん・いなば）が顔を出した。

「師匠ー、呼びましたか？」

「岬影が今日は泊まって行くそうだから、いつもの部屋まで案内してあげて」

「はい、では店長さん私について来て下さい」

「ああ、じゃ悪いが永琳、連華を頼む」

「ふふ、相変わらず家族思いなのね」

永琳の一言に無表情になる岬影。

どう見ても照れ隠しにしか見えないが、岬影だからしょうがない。そのまま部屋を出ていき、いつもの部屋まで岬影は速足で歩いて行く。

永遠亭に泊まるのはこれが最初ではない、ここの姫からの依頼はどれもこれも時間の掛かる物ばかりなので時々泊まりがけで仕事をするからだ。

置いてきぼりを食らった鈴仙は、ーえ？私が呼ばれた意味は？！となっているが、まあ、これは、お約束であろう。

岬影が出ていき、鈴仙も薬の調合に戻ったので、今診療室にいるのは連華と永琳の二人だけだ。

先ほどの永琳の発言で、顔がゆでダコ状態になっていた連華がようやく現世に戻って来た。

危うく、世界初の羞恥死を遂げかけた連華の第一声は、短い。

「私、連様に嫌われてしまったのでしょうか？」

確かに、今回の事については連華に落ち度がある。

具合が悪いのに無理をして仕事をするのは、体にも、仕事の効率にも悪い。

けれど、永琳はそれは無いと連華の言葉を否定した。

「もし、仮に彼が貴女を嫌いになったのなら、今日ここに泊まるなんて言い出さないわよ」

「で、でもそれは仕事があるからで私の為では・・・」

「ここだけの話それは嘘よ、輝夜は岬影に修理の依頼はしていないわ、大方貴女の心配をして泊まる為の口実と言った所かしらね」

再び、連華の顔が真っ赤に染まっていく、連華大好き症候群の症状は、流石の永琳も手の打ちようがないらしい。
そんな連華を見ていた永琳はある事を思い出していた。

これは大夫昔の話、鈴仙が永琳に弟子入りをし、まだ間も無い頃の話だ。

当時の鈴仙は今の連華と同じ状態にあった。

「早く立派な薬師になろうと頑張りすぎたのだろう。」

（「うどんげ、今度から体調が優れないなら直ぐに私に言うのよ」

「すみません師匠、私迷惑ばかりかけてしまって」

「それもあるけど、私が言いたいのは医者が倒れた時に誰が患者を診るのか？ってことよ、少しは自分の体も大事にしなさい」

「・・・師匠」

「早く直しなさいな、そしたら休んでた分まで山の様に仕事をあげるわ」

「師匠おおー！ー！！」

今となっては良い思い出（笑）である。
なので、岬影の気持ちも分からなくはない。

（と言っても岬影も素直になれないものね、その点に関してはお互い様なんでしょうけど）

要は似た者同士と言う訳だ。

理由は自分でも分からないが、どうもこの二人を見ていると放っておけないのだ。

「ああ、そう言えば、渡そつと思ってた物があるのよ、帰りに渡してあげるから後は自分で頑張りなさい」

キョトン、とした表情でこちらを見てきた連華に、もう寝た方が良いわ、とだけ告げ診療室を後にする。
向かうは自分の部屋だ。

（必要なのは、ペンと紙と、後は昔使っていた本と）
たまには、余計な世話をやくのも良いだろう。

翌日、連華の熱は無事に下がり、永琳に礼をした後二人は絡人繰形店に戻っていた。

カウンターで最新号の文々。新聞に目を通す岬影。

人里近くに命蓮寺とかいう新しいお寺ができた、という記事に目を通しつつ、久しぶりに自分で淹れた御茶を啜る。

連華はもう働けます！！、と言っていたが岬影はガンとして譲らなかった。

また倒れたら面倒だ、、、と言っるのは建前で、本音は、、、言う必要も無いだろう。

(さて、昼食に粥でも作ってやるか)

そんな事を考えながら岬影が腰を浮かすと、バンツ！！という音と共に客が来た。

「連華ちゃん(さん)が重度の感染症になって家から出られなくて今にも死にそうって本当(何ですか)?!」

「とりあえず、その大ボラ吹きやがったクソ野郎の名前から吐いてもらおうか?」

ええ!!ウソ?!などと驚く二人を無視して、なんとなく予想は出ているが一応尋ねておく、万が一別の奴を殺す訳にもいかない。すると白玉楼の庭師、魂魄 妖夢が直ぐに答えてくれる。

「永遠亭の因幡 てゐ(いなば てい)さんです」

「あの糞兎詐欺。

今頃ほくそ笑んでいるであろう、幻想郷最古参の妖怪に向かって呪詛を吐く。

「それじゃ、連華ちゃんは無事なの?」

心配そうな表情でこちらを見つめる赤と青のオッドアイ。
手に持つ茄子のような色の化け傘が印象的な少女、多々良たたら 小傘連こがさ。
華と同じ付喪神である。

しかし、彼女は連華とは違い、人間に粗末に扱われた怨を晴らすために妖怪化した付喪神だが。

何故か連華とは中が良い、本当に謎である。

「ああ、昨日までは熱があつたがもう大丈夫だ、今はまだ寝てるがな、だから静かにしろよ」

「うん!!」

「はい、大声を出したりしてすみませんでした」

とても安心した様子の二人、よほど心配したのだろう。

「まあなんだ、せっかく見舞いに来てくれたんだ、飯喰ってけ、幽々子には俺から言っとくからよ」

「いいんですか？」

「気にすんな、小傘も喰っていくだろう？」

「モチロン食べてくよ〜」

そんな訳で、新たに二人分の昼飯を作るため、岬影は台所へと足を運ぶ。

しかし、30分後。

突如現れた幽々子によって店の食糧が尽きるとは、神ならざる岬影には予測出来ないのであった。

絡人線形店ー二階、連華の部屋。

「そう言えば、この紙渡されたまま見るの忘れてたな、何が書いてるんだろっ?」

永遠亭を発つ前に永琳より渡された封筒。

その中には一枚の紙が入っていた。

「……これは!」

そこに書いてあったのは、とある料理のレシピ。
そして。

ー岬影の好物よ、体調が戻ったら作ってあげると良いわー永琳。

(ありがとうございます、永琳さん)

連華の顔にはそれはそれは安らかな笑顔が浮かんでいた。

絡人線形店――神社とGBA（前書き）

力才ス注意報

絡人繰形店――神社とGBA

「お客様は神様」と言う言葉がある。

店にとって買い物をしてくれるお客様は神様の様な存在、と言う意味だ。

まあ幻想郷においては、ろくに客の相手もせずに読書に没頭する様な古道具屋もいるので余り当てにはならない。

ここ絡人繰形店でも、相手によっては客扱いすらしない店長がいる訳なのだが。

「そのGBAゲームボーイアドバンスいくらで売る？」

(さてと、どうやって追い返すかな)

今現在、岬影の目の前には本物の神がいた。

洩矢もじや 諏訪子すわこ

遙か太古、神話の時代よりこの世に存在したとされる土着神の頂点である。

崇み神「ミシヤグジ様」を使役し、「坤を創造する程度の能力」を有し、かつては一国の王として君臨していた程だ。

坤とは八卦における「地」を意味し、地を司る力の持ち主でもある。

見た目は幼女だが。

どう頑張っ て見ても八歳以上に見えぬ容姿といい、頭に乗っ かって いるZUNぼ・・・奇妙な帽子といい、「ロリ」から始まって「コ ン」で終わるロリコン共が見れば思わず飛びかかるであろう程に幼 女だ。

無論、岬影にはそういった性癖は無い。

彼女と初めて会ってから500年程になるが、長寿の存在にはよく ある事で、これ以上外見が成長する事はないらしい。

「ったく久しぶりの再開だったのに、いきなりGBAを売れ、って のはあんまりじゃねえのか諏訪子様？」

「うちの神社が幻想入りしたのを、知ってて知らんぷりしたような 薄情者にとやかく言われる筋合いはないね」

ピリピリ、とした空気が店内に張り詰める。

この二人、実を言うと仲が悪い。

元はと言えば、500年前、岬影が幻想入りする以前に旅をしてい た頃の事件が原因なのだが、ここで語ると一日が終わりかねないの でまたの機会にするとしよう。

「とはいえ流石は土着神の頂点だな、お目が高い、こいつが何の道 具か分かっているのか？」

「ーま、どうせ面白い映像が映る箱程度にしか思って・・・」

後に岬影はこう語る。

——諏訪子様が名前を知っている時点で気付くべきだった、と。

「ゲームボーイアドバンスGBA、日本最大のゲームメーカー任天堂が開発し、2001年3月21日に発売された携帯ゲーム機だけど？たまには旧作で遊ぶのも良いかと思っただけどさ、こっちに来る前にGBAは売っっちゃったんだよね」

なん、、、、だと？！

と言いたげな表情で岬影の顔面が固定される。

よく考えれば分かった事なのだ、彼女等守矢神社の面々がこの地にやって来たのは極最近の事、つまり外の世界の事をよく知っているのは当たり前的事である。

「諏訪子様！！」

「え？どうしたのさいきなり！！そんな肩掴んで、は、離せ変態！！」

諏訪子の声に岬影は我に帰る。

なんか、連華が見れば三日三晩号泣しそうな状況が完成していた。

「ん、いやわりい、まあそんな事よりもだ！！守矢神社に行ってもいいか？断られても押しかけるが」

「どっちにしろ来るんじゃないか、別に言いけどね、神奈子も喜ぶだろうし」

「決まりだな」

そんな訳で守矢神社へ向かう二人。

岬影からして見れば、外の道具を仕入れる又とないチャンスでもあり、うまくいけば外の道具を買い取ってくれる良客なのだ、みすみす逃す気など毛頭ない。

お客様は神様？アーアーキコエナァイ。

「どうも毎度お馴染み清く正しく射命丸 文です！！本日は守矢神社にお招き頂き取材に詣りました！！」

「招いた憶えはないよ」

「半ば無理矢理について来たただけだろうが」

そんな二人のダブルパンチに、一ミリも笑みを崩さない辺りは流石と言っべきか。

守矢神社があるのは妖怪の山、山頂だ。

故に、そこまでの道のりで妖怪に会う事は寧ろ必然だと言えよう、本来ならば白狼天狗や鴉天狗が侵入者を撃退するのだが、そこは諏訪子が一緒なので顔パス。

しかし、そこで文に姿を見られたのがこの結果である。

パパラツ・・・新聞記者としての本能が疼いたのか、もっとも友人である岬影がいたからの話なのだが。

なんだかねで、守矢神社行き御一行の人数は増えていた。

突然の来客に少々驚いていた、少女。

身につけている服装は500年前と変わらないままだ。

「ええっと、初めまして。

守矢神社の風祝を勤めさせております東風谷 早苗です」

「ほう、お前が今代の風祝か、あのお転婆と比べると随分真面目そうだな、良い事だ。

俺は岬影 連、この山と人里の間にある絡人繰形店の店長をしている」

「あれは華弥が特別だったんだよ、あの子みたいな風祝は1500年に一人いるがいないかさ」

三人がそんな会話をしていると（文はカメラで神社を激写していた）神社の方から新たな人影、いや神影が現れた。

「懐かしい靈力を感じると思ったら、やっぱりお前か岬影、えらく遅い挨拶だねえ？」

守矢神社二神が一人、独立不撓の神様。

「乾を操る程度の能力」をもって天を司る風神。

八坂 神奈子である。

ガンキヤ（言わせねーよ！！）

「ご無沙汰しておりました、じゃ許してくれそうにもねえな」

「当たり前だろう？と言つても一番怒ってるのは諏訪子の方だが」

でもまあとりあえず、と言いながら神奈子は懐から何かを取り出す。

「流石は諏訪子様、ですが私も負ける訳には行きません現人神の奇跡（雷）！！！」

「ツク！！火痕かーとが小さくなっただと？！」

「なんで岬影だけ無事なのさあ！！！」

「ふっ、切り札つてのは最後まで隠しとくもんなんだよおおおお！！！！！！絶対防御素他愛発動！！！！！！！！」

「え、きゃ！！火痕が吹き飛ばされて」

カオス。

無秩序、混沌を意味する言葉だが。

この状況にこれ程しっくり来る言葉があるだろうか？いや無いだろう（反語）。

巨大な黒い塊てれびじょんについてなあーという文字が表示される。

「俺の勝ちだ！！！」

どうやら、岬影の勝利という形で決着がついた様である。

四人がやっていたのは「真理雄火痕まじあかーと」とか言う外界の遊びらしい。仕組みはよく分からないが、画面に映る火痕（火の痕を残しながら進むから）を操る遊び、手軽な式神を操る遊びのようだ。

（と、とりあえず終わったようですし、そろそろ取材の方も進めま

しょうか)

そんな事を考えながら、守矢神社の二神に近づく文の手をガシッと掴む手が。

岬影だ。

――目が血ばしってますけどおおおおおお！！！！！！！！！！

酒+ゲーム+マリオカートのテンション!!?

「お前もやるよなあ?文。

心配すんな改造されているおかげで、五人だろうが六人だろうが余裕で対戦出来るぞ!!!」

「ちよつと、連?!」

少しはこつちの話を聞い……………」

「おお!!いいねえあんたも参戦するのかい」

「次はあたしが勝たせてもらうよ!!!」

「いいえ!!私です」

「俺の連戦連勝をとめるつもりか愚か者が!!!」

――ダメだこいつら早くなんとかしないと。

次の日、帰ってこない岬影を心配した連華が守矢神社を訪れるのだが、その時に何があったのか、彼女は未だに語ろうとしない。

絡人線形店――神社とGBA（後書き）

すみませんやり過ぎました。

なら最初からやるなって？

ごもっともです。

絡人線形店――エンジンアと床暖（前書き）

久しぶりの更新のくせに短いです。

三話続きのー話目です。

絡人繰形店ーエンジンアと床暖

冬が迫り、そろそろ対寒気用最終兵器「KOTATU」を出す頃か、と岬影が考えていると、総合修理屋絡人繰形店に客がやって来た。

バン！！！！！

カランカラン！！！！

スタタ

ズダアー！！！！

擬音語だけだと意味不明かもしれないが、実際に音だけだったので仕方が無い。

どうやら床に置いてある、最近拾って来た燭台の足に引っかかったらしいのだが、何者の姿も見えない。

ーこの店の客はドアを静かに開けるつつう考えがねえのかよ。と言ってもドアを破壊する様な客（泥棒）もいるので、壊されないだけマシかもしれないが。

そんな事を思いつつ、絡人繰形店、店長、岬影 連は見えざる客に声をかける。

「よう、にとり。

急ぎの様なのは今の慌てっぷりから想像出来る、けどまずは光学迷彩を解け、じゃないと見えねえから」

「ん？ああ、ごめんごめん、そのまま来ちゃってたみたいだ」

すると空間の歪みと共に一人の少女が現れた。

薄水色のツーピースに、緑色の野球帽をかぶった水色ツインテール。

河城 にとり（かわしるにとり）

幻想郷屈指のエンジニア、自称人間の盟友（一方通行な交友とか言っっちゃ負け）、超妖怪弾頭。

「水を操る程度の能力」を持つ河童である。

河童という種族は総じて技術屋であり、にとりもその例に漏れず、今の様な光学迷彩スーツ、のびーるアーム、全自動パラッチ撃退機構、などの発明をしている。

加えて岬影や霖之助と同様、外界の道具に対する興味関心が大きく、最近は三人であれこれ議論を交わしたりしているのだ。

毎度毎度窓ガラスを粉碎する鴉天狗や、壁に大穴開ける魔法使いなどと、比べるまでもなく良客だ。

「聞いてくれよレン！！実はさあー・・・・・・・・・・・・・・・・」

そんな彼女はなにやら慌てた様子で語りだす。

「一度ならず二度もアンタが自分から尋ねて来るなんて、こりゃ明日は雨かもしれないね」

「その気になりゃ、自分で雨振らせられる神がなに言ってるんだよ」

「は、初めまして！！河城にとりと申す者です！！」

ここは妖怪の山、その山頂に位置する守矢神社だ。

どうやら今代の風祝と諏訪子様は人里への布教活動に出払っているらしく、ここにいるのは神奈子様のみ。

まあ神奈子様は守矢神社の責任者と言っても過言ではないので、岬影達としては特に問題は無い。

「つかにとり、わざわざ口調を変える必要はねえから、神奈子様はこの世で一番フランクな神様だからな」

「ん？そうなのかい？」

「こら岬影、何妙な事を教え込もうと……………」

「500年前の大宴会……………」

「あつはは、河童よ確かにとりと言ったな、そう硬くなる必要はない自然にしておけ」

「神様の弱みを握る修理屋店主か、文に教えたら面白い事になりそうだね」

頼むから止めてくれ、とにとりの口を封じる。

バラされる前に口封じをしまえ！！となった神奈子様と、こんな特ダネ放っておく訳にはいきません！！となった文の二人を同時に相手にするなど、想像だけでも疲労困憊になってしまう。

ーってかにとり、変り身が早過ぎた。

「で？今日は一体何の用なんだい？」

「一種の商談、といったところだな。」

詳しい話はにとりからして貰う、頼んだぜにとり」

「あいよ」

「床暖房しすてむ」

にとり曰く、冬でも床を暖かく保つ事が出来る画期的なしすてむ、らしい。

床下にパイプラインを敷き、その中に湯を通すことで温めるそうだがこれを幻想郷中に広め河童の技術力をアピールする。と言うのがにとり達の計画であり、そのための協力者を彼女は探していたのだ。

「それで最初に岬影の所に白羽の矢が立ったのか」

「まあ、大の冬嫌いな岬影なら乗ってくれと信じていたからね」

「ちつとも喜べないのは何故だ？」

気にしちゃ負けだよ！！、と全力の笑顔でスルーしたにとり。

言外にー黙って話を聞け、と言われたのは気のせいだと思いたい。

とは言え、イキナリ床暖房しすてむが普及する筈もない。

なので、この計画を円滑に進めるには、幻想郷の実力者達の住居にこのしすてむを採用してもらうのが手取早い方法なのだ。

そんな訳で、人里にも妖怪の山にも顔がきき、尚且つこう言った類

いの物に興味がある岬影に声がかかったのである。

「後は永遠亭に白玉楼、それと紅魔館辺りに行くつもりだ、てもまあ姫さんのところなら似たようなものが既に在るかもしれねえがな」

あの屋敷のオーバーテクノロジーは洒落にならない。

「私的には命蓮寺と地霊殿にも協力を取り付けたいんだよ、特に地霊殿には熱源の提供をしてもらおう訳だしね」

「なるほど熱源はあの灼熱地獄か、まあ私としては一向に構わない、諏訪子と早苗には私から話しておいてやるう」

「サンキュー神奈子様、助かるぜ」

「礼を言うぐらいならもう一度、諏訪子とゆっくり話をしてやるんだな、あいつも頭では理解している、後は時間さえかければ昔の様に戻るさ」

神奈子の言葉に岬影の顔に自虐的な笑みが浮かぶ。
どこか悲しげで、懐かしげなそんな笑み。

「俺に、その資格はねえよ」

「全く似た者同士にも程ある、二人共筋金入りの頑固なもんだから質が悪い」

余計なお世話だ、と言おうとした所で岬影の服の裾を小柄な手が掴んだ。

河城にとりである。

「ねー岬影」

「な、何だにとり？」

とても良い笑顔。

ただし、他人を安心さずにそのまま土下座させてしまうタイプの笑顔だ。

ココニキタノハナンノタメ？

「よし！！次行こう、つー訳で神奈子様また来るぜ！！」

「ああ、いつでも来るといいさ」

苦笑いしている八百万の神の一柱に見送られ、二人は次の目的地へと向かう。

今回の教訓。

友人を空気にはいけない。

絡人線形店――吸血鬼とデジャビュ

ドアを開けると腹に穴が空いた。というか上半身と下半身がサヨナラした。

1300年もの月日を生きて来た岬影もこんな体験は初めてである、出来ることなら一度も体験したくはないが。

「みつさっかげー！ー！ー！ー！！」

「せめて俺の体が繋がるまで待てないのか？フラン」

「だって岬影全然遊びに来てくれないんだもの」

ケロリとした顔で言っただけなのは、フランドール・スカーレット。ここ紅魔館の主、レミリア・スカーレットの妹で岬影の最近できた友人である。

495年間の地下生活のせいで力のコントロールが出来ない彼女は飛び付いただけ、のつもりであつたらしい。

それがこの結果な訳なのだが。

しかしまあ腹部が吹き飛んだ程度で死ぬ岬影ではない。

置き去りになっていた下半身の形が崩れると、上半身に吸い寄せられ元の姿へと復元されてゆく。

「今日は遊びに来てくれたんだよね！？」

フランのキラキラに輝く目に多少の罪悪感を抱きながら要件を話そうとする。

(ん？そーいやあなんで、、)

「おいフラン、なんでお前ー」

ー俺が来るって分かったんだ？

そう言おうとした岬影の感覚が、階段を降りてくる膨大な量の妖力を感知した。

「それで？お前はいつまでフランとくっついてるつもりなんだ？

ー私だってしたことないのに、」

「おいコラ、後半の言葉のせいで妹思いの姉から危ない姉にランクダウンしてるぞ」

「黙れよ人形風情が、姉が妹に近寄る男の選別をして何が悪い」

妙に苛立った顔をしながらこちらに向かってくる少女。

が、背中に生えた蝙蝠のような翼が、彼女が人外の実在であると証明している。

永遠に紅い幼き月、「運命を操る程度の能力」を有する吸血鬼。

レミリア・スカーレット

レミリアは見下した態度で岬影に向かって無い胸を張る。が彼女の身体的問題上、見上げる事しか出来ていない。

「種族差別は止めとけよメディーが知ったらブチ切れる、それより本音を言ったらどうなんだ？妹を取られて怒っているんだとな」

「そっそんな訳ある筈がないでしょー!!」

「つまり俺がフランと遊んでいても何の文句も無い訳だ」

「、、、ロリコン」

「なんか言ったかシスコン」

.....

同時に掴みかかろうとした所で丁度良く仲裁が入る。
やや過激な仲裁だが。

ボゴオオオオオオオオオオ!!

凄まじい音と共に、レミアと岬影の体が文字通り、木端微塵に吹き飛んだ。

「お姉さまばかり岬影とお話しているなんてズルい」

「今のお話に聞こえたんなら永遠亭で診てもらった方が良いぞフラン」

ありとあらゆるものを破壊する程度の能力

フランドール・スカーレットが永年地下で暮らす事となった原因の一つ。

万物に存在する破壊の目（全ての物質に存在しそこを攻撃すると対象を破壊できる）を自分の手の中に移動させ、握り潰すことで無条件で対象を破壊する。

自身の能力でさっさと元に戻った岬影。
吸血鬼という種族である以上、弱点を付かれない限り死ぬことのないレミリアも既に復活しつつある。

がそこで岬影は気付いてしまった。

確かに吸血鬼は基本的に不死身だ、だが着ている服はそうではない。つまり服ごと消し飛んだレミリアが元に戻ると、、、恐らくあのメイド長が地の果てまで追いかけてくること間違いなしな訳で、、、

「ご苦労様、咲夜」

「はい、お嬢様」

噂をすれば何とやら、音もなく現れ当たり前な顔でレミリアの後ろに佇む少女。

十六夜 咲夜

紅魔館全体の家事を受け持つ彼女にとっては、お嬢様の着替えも仕事の一環のようだ。

「時間を操る程度の能力」をもつ完全で瀟洒な従者の手にかかればまさに一瞬で済むのだから。
そんな彼女達を見て。

(ん？着替えさせたっつーことは、、、)

ふとそんな事を考え、音速で止めた岬影であった。

「床暖房しすてむ、か。
確かに興味を誘うものがあるけれど紅魔館には必要ないわ」

「何でだよ」

一通り説明を終えた岬影。

因みに、にとりとは別行動で彼女には人里の命蓮寺に行ってもらっている。決して空気になっていた訳ではない。

「この館の内部は常にパチエの魔法で快適な温度、湿度、空調を整えられているもの、勿論私好みだけど」

「パチエつーとあの七曜の魔女のことか」

それなら納得だと、岬影は素直にそう思った。

火+水+木+金+土+日+月の属性を使いこなすあの魔女であれば、その程度のこととは造作もあるまい。

「いやしかし残念だな」

「?」

岬影の呟きにレミアが反応したのは、その残念が床暖房しすてむを紅魔館で採用しなかったから、以外のニュアンスを含んでいたからだ。

「いやなに、冬になれば珍しい物見たさに霊夢辺りが見に来るんじゃないかと思ったただけだ、あいつの立場上博麗神社に手を出す訳にはいかないからな」

ピクツと蝙蝠のような羽が動いた。

「いやぁ本当に残念だ」

「おいまして」

「では、俺は予定が詰まってるからこの辺で」

「館の一部を魔法の範囲から外してそこだけに床暖房しすてむを使えば、」

「まあ、またいつか来た時には前向きに検討してくれ、じゃな!!」

ボンと岬影の体が粉状に変化し彼の霊力が薄まってゆく。

恐らく紅魔館から離れた所で体を再構築するつもりなのだろう。どこぞの鬼や妖精とやっていることは同じだ。

一方取り残されたレミリアといえば、

「こちらの話を聞けええええエエー!!!」

この際に込められていた妖力で、聞き耳を立てていた妖精メイドが数人ピチユったとか。

「後は、姫さんと幽々子と地霊殿だったか」

ちれいでん
地霊殿と言つのは旧地獄の中央に建つ建物で、覚妖怪の姉妹が住んで
いるらしい。らしいと言つのは、これらは全てにとりから聞いた
話で実際に行ったことがないからだ。
旧地獄には地上の妖怪は入れないため、必然的に岬影がいく事とな
った訳なのである。

にとりがパイプの強度に問題がー！！、と叫んでどこかに行つてし
まったので岬影は残りの全てを一人で回る羽目になってしまってい
た。

ー別に困ることもないしな
そんなことを考えながら足を踏み出す岬影。
季節は夏から秋に変わりつつある。

早くも紅葉が見られる木

黄金色に染まりつつある稲穂

足元に開いたスキマ・・・・・・・・・・なんかデジャビュ。

「またかああアアアー！！！」

つまるところ、幻想郷は今日も平和であったと言つことだ。

絡人線形店――幻想とキュウリ（前書き）

一ヶ月ぶりの更新となつてしまいました。
遅くなつて申し訳ないです。

これからはもっと早く更新します！！

絡人線形店――幻想とキユウリ

何処に存在するか全くの不明で誰も辿り着けない場所

幻想郷最古参である妖怪の賢者、八雲 紫の住居はそこにある。そもそもそんな場所なら見つけれないんだから住めないじゃん、というツツコミが全国から殺到しそうな気がするが、そんな事を言っただ奴らは今頃スキマ送りの刑に処されているので問題はない。

現に彼女の根城であるこの屋敷を訪れる方法は「境界を操る程度の能力」による空間移動、スキマのみであるのだから。

「で、一体何の用なんだ？わざわざここに呼び出す程の急用なんだろうな」

「もちろんよ、決まっているでしょう、些細な問題ならば貴方に来てもらう程この家の敷居は低くないわ」

――そんな事を言っている割にはよく下らない要件で呼び出された記憶があるんだが、とは口に出さず心に留めておく、紫の表情から見取れる物は何も無いが、いつもの胡散臭さは半減し少々威圧的な眼光が覗いているからだ。

そのせいか彼女の傍に立っている黄金色の髪と目、そして九本の尾を持つ八雲 紫の式、八雲やくも 藍らんの様子も普段以上に真面目な、悪く言うと固い雰囲気か漂っていた。

――おいおい、誰かが厄介な異変を起こそうとしているとか、そんなんじゃないやねえだろうな。

もしそうなら博麗神社に行くべきだ、間違っても修理屋の店主にす

る話ではない。

「床暖房システム…随分と面白い物を広めているようね」

「ん？」

拍子抜け、とはまさにこの事である。

何か無理難題を吹っかけられると思っていた岬影にとっては、のだが。

けれどほんの数秒ばかりの思考で岬影は紫の言葉を理解する。

その裏に込められた意味を。

「考え過ぎ、じゃねえのか？」

「私に言わせるならば、考えなさ過ぎと言った処かしら貴方らしくもない」

「友人の努力を無駄扱いなんぞするくらいなら、死んだ方がマシだな」

「本当に、甘いわ。

ほんの小さなヒビが全てを砕く可能性も存在する、私はそれを止めなくてはならない、分かってくれるわよね」

両者の間を隔てているのは空気では無く他の何か…岬影の沈黙は紫の言葉から来た物ではない。

「幻想郷はそこまでヤワじゃねえと思うがな、俺は」

「それでもダメよ」

「にとりの奴も尽力してたみてえだしよ」

「ダメよ」

「そこを何とか…」

「ダメ」

読んで字の如く一步も譲らない紫の態度に岬影は溜息を吐くばかりだ。

まあ事情を知る者から見れば当たり前の話ではあるのだが。

仮に人里にパイプがひかれ床暖房が普及したとしよう。

すると冬でも快適に過ごす事が可能になった人間は次に何を思うのだろうか？

もっと、もっと快適に。

その果てに在るのが外の世界、幻想が排除され人間が頂点に立つ世界だ。

この幻想郷において、誰か一人がその頂点に立つ事は許されない。故に幻想郷の賢者たる紫にはそれを未然に防ぐ責任がある。

岬影だってそんな事は分かっているのだ。

だが、理解するのと納得するのでは話は別。

「……なあ紫、お前がどんな想いでここを創ったのか大体は理解している、そりゃお前の言っている事は筋が通っているし正論だ」

「ーそれでもよ
幻想と現実の境界が入り混じる空間で岬影は語る。

「誰かが努力をしたっつー事実を、俺は何よりも尊重したいんだ。
その結果何か騒ぎが起こっつちまつたんなら周りが全力でフォローに
回る、それも幻想郷の在るべき姿なんじゃねえのか？」

「200年前まで外界を渡り歩いていた貴方からそんな言葉が出る
なんてね、文明が発達し追いやられる妖怪達を直に見て来た筈でし
よう？」

「見て来たからこそ対策も出来るってもんだろが」

数瞬の間を置き、やれやれと言った様子で首を振るう紫。
その様子にはいつも通りの胡散臭さが戻っていた。

「仕方がないわ、その熱意と河童の努力に免じて貴方達が尋ね回っ
ていた場所に限り、使用する事を認めましょう」

「ありがとな」

「そう素直に感謝されると気味が悪いわね」

「殴っていいか？」

「ー礼を言った俺がバカだったぜ。とばかりにこめかみに米印を浮
かべる岬影。

「遠慮しておくわ、それじゃ岬影また会いましょう」

ヒラヒラと振られる紫の手に呼応し、岬影の足元に開くスキマ。ここを訪れた時と同じように岬影は落ちていく。

「ーまたかアアああ!!」

何か叫んでいた気もするがきつと気のせいである。

デジャビュ？

「あ、レン!!お帰り」

スキマの先で岬影を待っていたのは湯気が出ており作りたてと見える夕食、それと今回の提案者である妖怪の山の河童、河城にとりであった。

どうやら紫は直接岬影を絡人繰形店へ転送したらしい、となると夕食の支度をしたのは連華であろう。

「にとり？お前何でここに……」

「さつき八雲 藍さんがここに来てね、事情を説明してくれたのさ」話を聞くと既に各要人からの許可は取っており、床暖房システムを投入する準備は万端とのこと。

紫がああ屋敷の時間軸の境界を操っていたらしく、かなりの時間が経過していたのだ。

「本当は、さ。」

これを気に盟友達と交流を深めるつもりだったんだけどね、だけど

もういいんだ我々河童の技術力の高さを人間が知ってくれば、そうすればいつかまた別の形で機会は訪れるんだ」

「ーこういうポジティブなところは見習うべきかもしれない、などと考えていた岬影の前に半開きの手が差し出される、にとりの手だ。

「ありがとう岬影、一人の技術者として心から感謝しているよ、だからこれからも一人の友人としてやっていこうじゃないか」

にとりとしても人里に導入出来なかったのは悔しかった筈だ、けれどにとりは岬影の行動に対し素直に感謝の念を抱いている。

「ーホント、妖怪らしくない妖怪だよな。

そんな事を言ったら、妖怪らしい妖怪の方が少ない気がするのは何故だ？

「ああ、これからも頼むぜさあ飯だ飯だ！！」

バシィ！！といい音を鳴らしながら握手を交わし、改めて夕食の見る。

キュウリだった。

キュウリのゴマあえ、キュウリの酢かけ、麻婆胡瓜、e t c …
正しくキュウリのオンパレードである。

「にとり」

「なに？」

「このキュウリはお前が？」

「そつだよ！！レン好きだろ？」

「いや確かに好きだがよお」

「ー多過ぎる。」

いくらなんでもこれは…と思うにとりの口から。

「いやあくレンカちゃんにキュウリはレンの大好物さ！！っていつたら張り切ってたよ」

「連華ああアアアあああ！！！」

取り合えずにとりの頭に拳骨を入れ、SEKKYOUをするために今頃厨房でニヤついているであろう付喪神の名を叫んだ岬影であった。

絡人線形店――幻想とキュウリ（後書き）

次回はオリキャラが出ます。

絡人線形店――果し状と婚姻届（前書き）

新オリキャラがでます。

絡人線形店――果し状と婚姻届

お昼時、そろそろ昼食を済ませるか立ち上がった岬影の元へカラ
ンカラン、という来客を告げるカウベルの音が届いた。

魔理沙、霊夢を筆頭にしたその他冷やかしの連中であつたならば即
座に追い返そうと思いつつ、文々。新聞を折り畳みドアの方へと視
線を傾ける。

絶世の美女

そう呼ぶに相応しいであろう女性がそこに立っていた。

もつともこの幻想郷においては美形率が異常に高い、美女、美少女、
美幼女まで何でもござれである。

そして言葉が表す通り目の前の女性も美女なのであつた。

そこそこの長身に整つた顔立ち、豊満な胸からくびれまでのライン
も美しく今にも流れ出しそうな白銀色の銀髪は腰まで伸びており、
頭には職人技というに遜色のない獣を象つた髪飾。

その身に纏う十字型の刺繍が入つた群青色の着物も、見る者が見れ
ば感嘆の声をあげる程の物だ。

丁度顔をあげた岬影と美女の着物と同じ群青色の瞳が交差する。
しっとりとした綺麗な形の唇が開かれ第一声。

「たのもー!!」

「帰れ」

岬影は迷わず即答した。
返答まで僅か0・1秒。
ここは道場ではないのだ。

そんな訳で総合修理屋「絡人線形店」にはいつも通り客以外の者が
押しかけていた。

灌透 キサラ（たきどお きさら）

それがこの美女の名だ。
本来の名前はキサラのみだったのだが、彼女が主殿と崇める”幻想
郷のパワーバランス”の一角を担う存在が苗字を授けたのだ…とい
う話は岬影の中ではどうでもよく、いかにして追いつ返すかと現在進
行系で思案中であった。

「せっかく来てやった客に対して”帰れ”とはなんだ!!」

「ん？客？悪いが俺の目には来る場所を間違えた道場破りしか映っ
てねえんだが」

そう言うと目の前のキサラは、無駄に張っている胸を更に張り得意
そうな笑みを浮かべる。

「ふふふ道場破りかある意味的を射ているな、つまり…」

「やっぱ帰れ」

「私はこれを渡しに来たのだ!!」

どうも幻想郷の住人には他人の話を聞くというスキルが著しく欠けているらしい。

「面倒くさい、という本音を飲み込み一応差し出された封筒を受け取る。」

不本意ではあるが仮にも恩人の弟子だ、無下に扱うのも忍びない。

「……何だこれは？」

「何って見れば分かるだろう、”果し状”だ」

果し状

果し合い、つまりは決闘を申し込む書状であり決闘状とも言つ。

いやまあ岬影とてそれぐらいは知っている、知ってはいるのだが…

…岬影が聞いたのはそこではない。

「…すまん今から永遠亭に行ってくる」

「どうしたのだ？」

「いや視力がガタ落ちしたらしくてな、果し状なのに中身が婚姻届そんなことある訳」

「間違っていないぞ、私との果し合いに敗れたならばその婚姻届にサインして貰う!!」

「アホかア!!」とは口に出さ……

「な、アホとはなんだ!!」

口に出ていたらしい。

そもそも。

「お前まだそんな事言ってたのか、何度も言うが俺にその気は全くねえ」

実を言うとこれが初めて…という訳ではなかったりする。

数年前、紅い霧が幻想郷を覆い、幻想郷の春度が奪われ、終わる事のない夜が終わった後の頃、彼女の主が起こした異変…通称「封力異変」が博麗の巫女によって終結を迎えた辺りまで遡る。

平たく簡潔に述べるのであれば…俗に言う”一眼惚れ”という奴だ。キサラ曰く以前にもあった事があるというのだが、一度見たらそう簡単には忘れられそうにもない彼女の顔を岬影は見た事がない。

以来あの手この手で求婚されてはいるものの、流石は鈍感店主たる岬影だ。

毎回の様にはぐらかし現在に至る。

「お前が何と言おうと、私がお前を愛しているという事実が変わりはない!!」

「もうすぐ冬だったのに暑いんだよ」

「ふん!!今日こそ決着をつけてやる」

今の今まで彼女の背中に隠れていた薙刀…これもかなりの業物であ

る。

それを勢い良く回し、構えるキサラ。
その眼は至って真剣だ。

ともかく棚から落とされた商品分の代金を計算しながら、キサラの眼を見つめる岬影。

「…そ、そう見つめられると照れる」

「面倒くせえ！！」

今度は口に出す事にしたらしい。

本当にこの女はやる気が有るのか無いのか。

「…まあ、取り合えず適当に相手をして追い返すか、と岬影が結論を出す、本日二度目の来客が現れたらしくカランカラン、とカウベルが声をあげた。

「みつさかげー遊びに来たよー」

やって来たのは紅色を基調とした服を着ている吸血鬼、フランドール・スカーレット。
それに。

「妹様、あんまり急ぐと日傘から出ちゃいますよ」

こちらは緑色が基調の帽子、中華風衣装を身にまとった紅魔館の門

番。
紅美^{ほん}………

「……みりん、だつたっけか？」

「美鈴めいりんですー!!!」

間違えた、紅ほん 美鈴めいりんである。

彼女の手には大きめの日傘が握られており、どうやら傘持ち役を任されたらしい。

そんな事を考えていた岬影の元へキサラの頭上を飛び越えたフランのボディーブローが決まった。

彼女は小柄だが、空中で加速したためかかなりの速度である。

「ねえねえ岬影、今日は何をして遊ぶの？」

「お前が俺の腹から退けば教えてやるよ」

途端に下腹部のかかっていた体重が消える。

そして一連様子を見ていたキサラがワナワナと肩を振るわせこんな一言を。

「ま、まさかお前ロリコン（幼女趣味）に目覚め……」

「んな訳あるか!！」

神速でツッコミを入れる。

「よし、フラン。

今日はこのお姉さんがお前の遊び相手をしてくれるらしい、いつも
の結界を張っとくから思う存分やっやれ」

「何を勝手に……」

「フランに勝てたら、婚姻届だろーが悪魔の契約文だろーが好きなものにサインしてやる」

「よし、かかってこい小娘！！この狼々刀の錆にしてくれるわ！！」

「うん！！ヨロシクね、おねーちゃん」

なんて扱いやすい奴なのだろう。

意気揚揚と店の外へと出て行く二人を見てつくづくそう思う岬影であった。

因みにフランはキサラより年上である。

「あの店主さん、大丈夫なんですか？」

「ん、問題ねえだろあいつ結構強いし」

心配そうに告げる美鈴に即答する岬影、その顔にあるのはある種の信頼。

なんだかんだで岬影はキサラの事を認めているのだ。

「さてと、これでやっと飯を食べるな。

美鈴、お前も何か食べてくか？」

「あ、それなら私の作った中華まんじゅうが幾つかありますよ」

「そいつはいいな、待っててくれ今お茶を入れっから」

「はい、こちら準備をしておきますね」

一時間後

ボロボロになって戻って来たキサラが岬影に掴みかかり、その現場を人里から帰った連華に目撃され一悶着するのだが、それまた別の話である。

……これは余談だが、満足げな笑顔を浮かべたフランと申し訳なさをうに苦笑する美鈴、その二人を見ているうちに自身の傷がいつの間にか癒えている事に気がついたキサラが、決意を新たにしていたか。

絡人線形店――果し状と婚姻届（後書き）

岬影はツンデレっていう話。

絡人繰形店――人形と革命（前書き）

三日連続更新！！

うう、結構疲れました主に頭が。

今回は作者一押しのおの子がです。

絡人線形店――人形と革命

サアーーーーー

穏やかに吹く風が白い花々を揺らし幻想的な風景を生み出す。

ここは無名の丘。

妖怪の山から人里を挟んで反対側にある鈴蘭の楽園、無尽蔵にばら撒かれる鈴蘭達の毒は一切の敵の侵入を許さず、何人たりとも花に危害を加える事など出来はしない。

一面を覆い尽くす鈴蘭達からは今にもチリンチリン、という鈴の音が聞こえて来そうな、そんな場所だ。

場所によつては毒の薄い箇所もあり、さして強力な妖怪がいる訳でも無いので鈴蘭摘みには最適である。もっとも、わざわざこんな所にまで鈴蘭を摘みに来る物好きがいるとは思えないが。

それに人間達がここを訪れないのにはもう一つ理由があるのだ……

「これより第27回”人形革命団”の定期会議を行うわ。
進行役はこの私人形革命団、団長のメディスン・メランコリーが勤めさせてもらいます」

ここは無名の丘、又の名を鈴蘭畑。

その中央に位置する空き地に堂々と居坐りツッコミどころがない発言をぶちかましたこの少女。

名はメディソン・メランコリー。
小さなスウィートポイズンの異名を持つ無名の丘の實質最高権力者である……こう言うとても偉く見えなくもないが、彼女の他に住人など存在していないのだから当たり前のことだ。

そんな彼女の両脇には

「――まずつたな」指導者が指導者であるための十の掟”なんて本、面白半分に貸すべきじゃなかったか。

などと後悔している無限人形、岬影 連と…

「――参ったわね”フランス革命に関する文献”なんか安易に見せるべきではなかったわ。

そんなことを今更ながら悔やむ、七色の魔法使いにして幻想機屈指の人形使いアリス・マーガトロイド（ありす まーがとろいど）の姿があった。

「おいメディー、なんか面倒なことになりそうなんで帰っていいか？」

「ちょっと連、一人だけ逃げるなんて許さないわ」

「ニゲラレルトオモウナヨ！！」

「二人共！！団長の私が喋ってる間は静かにしてよ…じゃなくて、しなさい！！！」

「ーやっぱ帰りてえ。」

そう思う岬影の両隣りには逃がさん、とばかりにランスを構えた上海人形とフランベルジェを持った蓬莱人形が陣取っている。

しかも注意して確かめると辺りの鈴蘭の影にはアリスのコレクションたる人形達がスタンバイしていた。

「人形を操る程度の能力」によつて彼女の思うがままに行動する人形達の包囲網、下手に突破を試みれば必ず痛い目に合う事は間違いない。

思わず睨みを訊かせた視線を送るが当の本人からは逆に睨み返された。

(なに一人だけ逃げようとしているのよこの薄情者)

(ならメディーの暴走を止めるよ)

(……それは貴方の仕事でしょうが)

(そんな設定知らねえーよ!!)

アイコンタクトです。

以心伝心って懂れますよね。

「とにかく!!自分勝手に卑劣な人間達の手から人形達を解放し人形達の地位向上を確立させる為には……」

「……あのーメディー?」

「メディソン団長」

「あのねメディソン一つ聞きた……」

「メディソン団長……!」

なにやら涙目のメディソンにアリスはしょうがないわねえ、とでも言いたげな表情で話を始める。

「メディソン団長、一つ聞きたい事があるのだけどいいかしら」

「なにかしら? 戦闘部門担当のアリス団員」

吹き出した岬影の脇腹に上海のランスが突き刺さるのを確認、質問を再開するアリス。

身を屈めてメディソンの鮮やかな水色の瞳と視線を合わせる。

「どうして急にこんな事を言い出したの?」

その事は岬影も聞きたかった事だ。

「……それは」

メディソン・メランコリー

彼女は元々この無名の丘に捨てられていた一体の人形であった。

一体どの様な経緯で彼女が捨てられたのかは検討もつかない、けれどメディソンからすればそれは人間を恨むのには十分すぎる理由である。

そして今の彼女には永年溜め込み、自身の原動力でもある鈴蘭の毒がある。

現に岬影が初めてメディソンとであった時もそうであった。

出合い頭に毒を食らわされ、自分も似た様な存在である事を教え五分で和解。

妖怪と言っても中身は純粋な子供の様な物、まあだからこそ人形の為に革命だ何だと言い出したのだろうが。

(四季様に説教を食らって、近頃は永琳の仲介で薬屋とも交流があるはずだ、なにより最近はずっと落ち着いていたしな)

うつむいていたメディスンの口から言葉が漏れ出す。

「……同じだったんだもん」

「…え？」

「アリスが見せてくれたのに書いてあった人間達と同じだったんだもん!!」

見た目通りの子供のような声でメディスンは語る。

王の庄政に苦しんでいたフランスの人民と、人形。

幼い彼女の眼には両者が置かれていた環境が同じ様に映ったのだろう。

「人間なんて皆そうなのよ!!飽きられて捨てられていく人形がどんな思いで……どうせ人形だから?喋らない道具だから?違う!!この子も!この子も!この子も!皆悲しんでるわ!!」

懐に持っていたのであろうポロポロのヨレヨレになった人形を取り出していくメディスン、薬屋からの帰りに見つけたのだろうが、どれも泥に汚れ布が裂け中身の綿が飛び出していた。

「……メデイー」

「何よ」

「いや、その悪かったな」

「……え？」

「ー何が、と問おうとしたメデイソンの頭に岬影の手が置かれる。

「俺はてつきりこの間貸した本に感化されて、こんな事をおっ始めたのかと思ってたんがよお」

話を聞いてみれば何だ。

「お前がここまで考えてたとは思ってなかった、これじゃ友人失格だなあおい」

「そんな事ないわよ！！岬影はいつもスーさんの面倒も見てくれるし、それに……」

「なんだかんだで連はメデイには優しいものね？」

「黙れよアリス・マーガゾイド」

「貴方それワザとでしょ」

「二人共ストオオーツップ！！」

メデイソソつちのけで火花を散らし始めた二人の間に割り込む小

さな影。

「団長であるこの私を差し置いて喧嘩を始めるなんて許さないわよ
!?!」

そこにいるのは嬉しそうな顔をした我らがメディスン・メランコリ
ー団長だ。

「悪い悪いメディスン団長」

「ま、今回は見逃してあげる。

その代わり回復部門担当の岬影団員、貴方に命令を言い渡すわ!!
この子達を直しなさい」

何やら吹っ切れた様子のメディスンを見て岬影は答える。

「了解したぜ、メディスン団長。」

「それにしても人間の…いや妖怪の成長ってのは早いもんだよな、
あいつはぜってえ将来大物になる」

「連の感は全く当てにならないけど、その意見にはつくづく賛同す
るわ」

所変わってここは魔法の森、マーガゾイ……マーガトロイド邸。

以前岬影の依頼していた連華の冬服が完成していたので受け取りに

絡人繰形店――人形と革命（後書き）

ゆっくり岬影にゆっくりしていったね!!
なんて言われたら速攻で逃げますね俺は。

無限ループってこええ。

ん?でも幻想郷全員分のゆっくりが出来たら終わるから……あれ?
無限ループじゃないような……まあ気にしたら負けですね!!

絡人線形店――青巫女と店員（前書き）

常識破りのお話……あれ？いつもそんな感じな気がするのはいか？

絡人繰形店――青巫女と店員

「幻想郷に一信仰！！守矢神社を宜しくお願いします！！その無信仰のあなた！！これを機に守矢信者モリシタンになつてみては如何でしょうか？！」

「すみません、私にも理解出来る言葉で話して頂けますか？」

絡人繰形店、店内にて太陽の様な明るさで洗脳……ではなくせつせと布教活動に励んでいるのは紅巫女と表現される霊夢に対し青巫女と評される現代っ子の現人神こと東風谷こちや早苗さなえだ。

そんな彼女にドライアイスのように冷たい言葉を叩きつけているのは、岬影から店番を頼まれた連華である。

岬影が半径50m以内に居るか居ないかでは性格が180度変化する彼女。

その温度差はマグマと液体窒素にも勝るとか、勝らないとか。

「今ならなんと八坂様の御加護が20%に一色添えて30%増量中です！！！」

「何処ぞの兎詐欺のような売り文句……貴女それでも巫女なのですか？同じ誰かに使える身としては信じられない事なのですが」

「……えーと連華さんの双子さんだったりしますか？それと私の役職は巫女ではなく風祝です」

「心の底からどうでもいいマメ知識ですなもう忘れたので良いですけど、それとこの主は連様ただ一人全ての決定権は連様の物、そ

うだというのに連様の居ないこの時を狙って来るなんて守矢神社も格が落ちたものですね」

「っな!!」

比較的温厚な性格の早苗だが、彼女が慕う二柱を侮辱された場合にはその限りでは無い。

いざ報復せん、と霊弾を打ち込もうとする……が。

「……………!! まあせつかく来て頂いたのですし、連様がお戻りになるまで待つてみてはどうでしょう? 私お茶を注いできますね、実は先日霧雨道具店の旦那様から新茶を頂いたんですよ」

いきなり、何の前触れもなく普段通りの彼女に戻ったせいで出だしを挫かれた早苗、集約していた霊力は立ちどころに霧散する。

「ーええ、分かっていますとも。

この幻想郷では常識に囚われてはいけないのですね!

こうして着実に幻想郷色に染まっていく早苗であった。

連華の豹変ぶりから予測できる事なのだが、あれから一分も経たずに岬影は戻って来た。

戻って来た…のだがなにやら機嫌が悪そうに見える。

「ーったく慧音のヤロオあんぐらいで怒るかよ普通。

どうやら人里へ行っていたらしい岬影の脳内にあるのはつい先ほどの出来事だ。

よってかかる子供達から受け取った遊具の類いを、機嫌がよかった事もあり片っ端から直してやったのだが、慧音曰く。

物を大事にしない子に育ってしまったらどうする!!

とのこと、確かに一理あるのだが岬影からしてみればちょっとしたサービスだったのであって通常であれば決してそんな事をしたりしない。

そんな訳で彼女と言い争いをしたまま分かれて来たのであった。

まあ岬影が幻想入りしてしばらくは、そんな事は日常茶飯事だったので双方そこまで気にしてはいないのだが……少なくとも岬影は。

――取り合えず、明日も顔を出しに行くか。

一応結論づけた岬影の意識が現実に戻ると、そこには見覚えのある風祝の姿が。

「今代の東風谷^{とうふうや}じゃねえか、どうしたんだ？」

「怒りますよ?というかワザとですよねそれ!!」

――おい東風谷^{とうふうや}!!

――誰がとうふやだこの阿呆人形!!封印されたいのか!!

500年前と同じやり取り、返ってくる答えは違えどもそれ程時の

流れを感じさせぬ心地良さがそこにはあった。
しかし、今の岬影にそれを譲受するつもりは全くなかったが。

「冗談だよ、そんでここに来たって事は修理の依頼か？」

「いえ、私がここに来たのはこの店に神の御加護を与えるためです
！！幻想郷に一信仰！！……………」

この曲がる事の無い布教魂は霊夢も見習うべきなのではないのか、
心底そう思った岬影はきつと正しい筈だ。

「ーにしても愛されてるよなああの二柱は、本当に。
ただこちらにも事情というものがある訳で。」

「わざわざ来てくれたつーのに悪いが、この店の方針は絶対中立。
全ての存在と同じ距離を保たなきゃならねえ、だからこの店で信仰
つてのは無理が……………」

「大丈夫です！！そんな方々の為に隠れ守矢信者かくれモリシタンの手引書もここに」

「そんなんで紫とダンナの目を誤魔化せるなら苦労しねえよ」

流石に紫の名を出すとこの件の重要さがわかって来たらしい。

「そ、それなら私の能力で……………」

訂正、全く分かっていなかった。

「常識に囚われない程度の能力……………だったか？」

「奇跡を起こす程度の能力です!!」

バン!!とカウンターに叩きつけられた早苗の手、気のせいから微弱的な風が吹き始め……

「貴方に神を信じる心があれば奇跡はそこに起こる!!」

「いや信じるも何も本物がいるのに疑う余地なんかねえだろ……つてか風の勢いが強くなってきてねえか?!」

しいていうなら、フワァーがブワァァー!!に変化していた。

「えーと、起きちゃいましたね奇跡」

「これじゃただの災害だろおおおおオオオ!!」

その言葉を最後に絡人繰形店は突如発生した竜巻により崩壊を迎えた。

とつさに連華のいる台所に結界を張ったのは、岬影のファインプレーである。

「……くそ、なんで幻想郷にはまともな巫女が一人も居ないんだ？」

全くもってその通りなのだが、そういった類いの文句は博麗神社の神に言うて欲しい。

その後、人里の人間から話を聞いて心配した慧音が駆けつけ、早苗の頭にエターナルフォースヘッドバットが決まることは言うまでもあるまい。

絡人線形店――青巫女と店員（後書き）

連華は別に猫をかぶっている訳ではないんですよ、岬影という時が素であれば所謂ダークモード的な？

絡人線形店――閻魔様と折檻（前書き）

前にチラッとだけでたあの人が出ます。

絡人繰形店――閻魔様と折檻

いつもの様に文々。新聞を広げながら中央カウンターの椅子に岬影が腰掛けているとキィイ、という僅かに木の擦れ合う、言い換えるならばドアの開く音が聞こえてきた。

本来ならカウベルが来客を知らせるのだが諸事情により店が全壊（16話参照）したばかりの絡人繰形店には新しいヤツがないのだ。

店自体は岬影が一瞬で修復したのだがどうやらカウベルは遠くまで飛ばされたらしく諦める他なかった、という訳である。

――明日にでも新しいのを作るか。

方針を定めると、来客を確かめる為に新聞をカウンターへ置きドアの方へと視線を向け……た瞬間、岬影は眼にも止まらぬ速度で席を立つと裏口に向かって全力ダッシュ、ドアノブに手が掛かった所で襟首を捕まれそのまま床へ叩きつけられた。

「一体、どこへ逃げるつもりだったのですか？全く毎回毎回私が尋ねるたびに逃げるとは余程の”説教され好き”ですね貴方は」

「それって暗に俺がDMだと言ってる様なもんですよねってイッテエエー！！」

岬影を遥かに凌駕する瞬発力を見せつけ、一瞬で取り押さえたのは幻想郷を担当する閻魔様。

「白黒はつきりつける程度の能力」をもって絶対なる善悪の基準点、

楽園の最高裁判長。

四季 映姫・ヤマザナドウ（しき えいき・やまざなどう）

是非曲直庁において上級職の者が着る制服を身に纏う映姫、その手に握られているのは板きれ……に見える悔悟棒である。

見た目は単なる棒だが驚く事なかれ、基本的に痛みを感じる事のない岬影に痛手を負わせる数少ない手段の一つなのだ。

「こんなものはまだまだ序の口です、私に断りも無く「再生の符」を使用した罪はこの程度ではまるで償えない（第5話参照）」

「いやいや、あーでもしねえとフランに俺の魂ごと消し飛ばされてたかもしれないし、流石にそこまでやられると現世に留まるのは不可能なんですって!!」

「安心してください、仮にそれが現実となった暁には是非曲直庁で私の補佐官として働いて貰いますから」

「安心出来る要素が何一つ無いんですがってやっぱイテエエツツ!!」

悔悟棒に記された罪状は秒読みで増えてゆき、数ヶ月ぶりに”痛み”というものを味わう岬影だったが生憎とDMではない為溜まったのは快感ではなく疲れだけであった。

「あ、頭がガンガンしてやがる。
ここまで具合が悪いのも久しぶりだ」

一通り叩き終わったのか岬影は映姫の前で正座中だ。

「自業自得です、能力は常に魂を依代として存在しているモノあの
スペルカードを使用した際に貴方は一瞬意識を失った」

「ーなぜ知っているか、と聞く必要はない。

映姫の手のひら、手鏡の様に見えるそれは浄玻璃の鏡映した者の過去の全てを一般公開するというプライバシーを欠片も尊重しない鏡である。

「確かに人形の体に人の魂を埋め込んだ貴方に寿命といった通常
の概念は適用されません、しかしそれ故に背負うリスクも在る。

「再生の符」を使用するというのは自分で自分の首を絞める様なもの、このまま使い続けられれば魂は朽ち果て貴方は……」

スッ、と悔悟棒を岬影へ向ける。

「不完全な今とは異なる、完全な形でそして最悪の形で輪廻転生の
輪から外れてしまう」

「つまりさっさとメンテナンスを受けて来いって事ですよねってイ
ッテエエエッッ!!」

「その!!その考えが!!直れば良いという貴方のその考え方が全
ての原因なのです!!」

向けられていた悔悟棒が躊躇なく振り下ろされメキィ!!という凄

まじい音と共に岬影の前頭部へとめりこんだ。

「今の貴方は多くの存在に囲まれ生きている、仮にこの世から消え去った時に残された者達が何を思うか少しは考えた事があるのですか？」

そう、貴方は少し自身の存在というものを軽く見すぎている」

これで少しは理解出来たかとばかりに締め括る映姫。
それを聞いて岬影は少々苦笑いをした。

「実際の所どうなんでしょうね、これでも自分なりにやれる事をやって来たつもりだが俺は、俺は必要とされているのかたまに分からなくなる事もあります、周りが思っているほどに俺は強くない」

「だから私は、岬影。

貴方を補佐官に、と思ったのですよ」

岬影の言葉にヤレヤレと言わんばかりにため息を吐いたのは、説教をしていた時に比べ幾分か優しくなった顔をした映姫である。

「浄玻璃の鏡が私に見せる真実を見れば見る程に、貴方の心配事は単なる杞憂だという事が分かります、なんなら自分の眼で確認してみますか？」

「遠慮しておきますよ、きつと胸焼けを起こしちまう」

映姫の問いかけにニヤリ、と岬影は笑みを返す。

「しかし話してばかりで少々小腹が空きましたね」

「叩いてばかりの間違えじゃ……何でもありません、なんなら昼食を食べていきます?」

「ええ、ですが貴方は店の番に専念しててください、調理場を貸して下されば私が作りますから……何ですかその目は」

信じられない物を見た様な顔をした岬影はついこんな言葉を零した。

「いや、その何というか……包丁で指を切らないように注意してつてイッテエエツツ!!」

次の瞬間、勢い良く突き出された悔悟棒が岬影の体を吹き飛ばした。

暫らく時間が経ち、台所から良い匂いが漂ってきた丁度その頃。

「おーい連之字、無縁塚で外界の酒を拾ったんだがね中々良い酒なんだよこれが、これから昼飯だろ?こいつで一杯やらないか?」

そんな事を言いながら大きな酒瓶を手に持ってやって来たのは、三途の川の船頭で映姫の部下でもある死神、小野塚 小町だ。

「ん?ああ小町か、悪い事は言わねえから今すぐ回れ右をして引き返した方が良くぞ、因みに酒を置いていってけると嬉しい」

「それは単にお前さんがこの酒を独占したいだけじゃないか、うー

んいい匂いだね今日は肉じゃがかい？」

いやあ久々に美味しい酒が飲めそうだよ、そう言いながら席につく彼女の背後では調理をし終えた閻魔様が悔悟の棒と使用済みフライパンをダブルで振りかぶっていた。

絡人線形店――閻魔様と折檻（後書き）

映姫様の手料理…だと？

取り合えず岬影そこを代われ！！

絡人線形店――鬼と獣道（前書き）

飲み過ぎ注意。

絡人繰形店――鬼と獣道

幻想郷最東端に位置し最重要建築物の一つであるとある建物。人里でその存在を知らぬ者はおらず、また訪れた事のある者もいない。

色々な意味で矛盾した神社、博麗神社はそんな神社だ。

神社の癖に神主は居ないわ妖怪が常時たむろしているわと駄目な噂が立っているうえにそれらが全て事実なのだから始末に終えない。ただでさえ少なかつた賽銭は近年になって更に減り、博麗神社の家計簿は今月も火の車が爆進中である。

そして博麗神社に続く一本の獣道、別に安全が保障されている訳でもなく野生の獣や野良妖怪が出没するので普通に危険……なのだが今日は珍しい事にその道を歩く人影があった。

ついでにその人影の後ろに付かず離れずの距離を保った別の影があったのだがそれは割とどうでもよかつたりする。

「本当に長えなこの道は」

ボヤきながらもかなりのペースで歩みを進めているのは、総合修理屋「絡人繰形店」店主の岬影 連である。

彼がわざわざ博麗神社を訪れようとしている理由だが…勿論賽銭を入れる為ではない。

あの場所は幻想郷において様々な意味を持つ場所であるが、岬影の用事はそれらとはあまり関係が無くあくまでも岬影個人のモノだ。

「もう暫くすれば人里での収穫祭があるってのにこの寂れっぷりは……ありなのか？」

「まあ別にいいんじゃないのかい？ 霊夢も気にしてないみたいだしさ」

独り言の様に呟いた筈だったが、真横から返答が来る。

視線を横に傾けた先にいるのは小柄な体にすぐわぬ歪んだ二本の角を持つ少女、疎雨の百鬼夜行こと伊吹いぶき 萃香すいかだ。

どこぞのスキマ妖怪と同レベルで神出鬼没な萃香だが岬影はさして驚く様子もない、もっとも萃香の存在に気づいた上で質問をしたのだから当然と言えば当然か。

「にしても神社への一本道に鬼が出るなんざ少し前まで考えられなかったっつーのにな、時代は変わるもんだぜ」

「私は楽しいからそれで良いんだけどね、それで博麗神社に何しに行くのさこの間のリベンジなら何時だろうと受けて立つよ!!」

グイッと手に持った瓢箪から酒を呷り岬影の太ももを小突く萃香。対する岬影は見るからにウンザリした表情で。

「何度も言うが俺は負けちゃいねえぞ、殴り合いで決着がつかねえから別の勝負をしようってのはまだ分かるがな、それが酒の飲み比

べって納得できるかそんなもん！！鬼を相手に勝てると思ってるのか？」

「一度受けた闘いに文句をつけるなんて、男が廃るよ岬影」

「俺は受けてなかったよな？！お前が勝手に始めただけだろ？」

「でも最終的には岬影も飲んでたじゃん」

萃香が言っているのは以前紫と幽々子に騙され無理矢理宴会に参加させられた時の事だ。

些細な事から言い争いとなった岬影と萃香は互いに手加減なしの殴り合いを始めた。始めたのだが、方や幻想郷最古参にて鬼の四天王たる伊吹童子、そしてもう片方も決して倒れる事の無い最強の人形である。

結果、萃香は岬影を殴り倒せず岬影は萃香にダメージを与えるだけの火力がなかった為延長戦にもつれ込んだ。

それが酒の飲み比べと言う訳なのだが……確かに岬影は酒を飲んだ……というか飲まされた。

具体的にいうと酒欲の境界を操られた、というのが事の真相。

犯人は誰だ、一人しか居ねえ。

「まあいい、その件については後で紫も交えてゆっくり話すべきだな、で俺が博麗神社に行く理由だったか？話すとき長くなるが……」

「おお！！霖之助がメチャクチャ美味しそうな酒を一人で飲もうとしている！！これは放ってはいけないねえ」

「おいこら自分から聞いたって何勝手に消えようとしてんだこの酔払い！！、つーか香霖堂がいつどこでどんな酒を呑もうとお前には関係ねえだろ」

「いいや、あんな良い酒を独りで呑んだらきつとバチが当たるよ、私はそれを助けに行くのさ！！」

「清々しいまでに酒本位だな！！」

現れた時と同じ様に突然萃香の姿が消える。

彼女の両腕と髪についていた三種の分銅、あれ等は其々「調和」「無」「不変」を司っており、自分自身そして彼女の有する「密と疎を操る程度の能力」を表していたのだ。

今頃は香霖堂に直接乗り込んでいる事だろう。

取り合えず霖之助に同情をしつつ、自分では止めようが無いので再び博麗神社への道を歩む岬影であった。

「霖之助ー助けに来たよ！！」

「悪いが異変の解決人なら間に合っているよ、因みに出口は君の真後ろにあるから遠慮なく出て行くといい」

魔法の森の入り口に建つ古道具屋、「香霖堂」

店主である森近 霖之助は突然の来客にぐいのみに向かって伸ばし

ていた手を止め、接客という名の立退きを命じた。

「そんな事をいうもんじゃないよ、いやあく良い酒の匂いだね」

無論萃香はそんな戯言には全く耳を傾けずに自前のぐいのみを取り出し酒を注ごうとする……手を霖之助が制した。

「おや霖之助、私の邪魔をするのかい？」

多少凄みの効いた声を出す萃香、しかし霖之助は首を振ると。

「いや、こうなった君を止める事が不可能なことぐらい良く分かっているよ、それより君にはこちらの酒の方があっているんじゃないのかな？」

そう言って取り出したのは一本の酒瓶、栓を抜くと芳醇な香りが狭い店内を満たす。

「へえ〜気がきくじゃないか、それでは遠慮なく飲ませて貰うよ！」

言い終わるなりラッパ飲みを開始する萃香は霖之助の顔に浮かんでいた意味ありげな笑みに最後まで気がつかなかった。

「助かったよ連、危うく霧雨の親父さんから貰った貴重な酒を一気飲みされる所だった」

思わず、といった風に溜息を吐く霖之助の横にあるのはイビキをか
く伊吹 萃香の姿である。

彼女が呑んだのは「神使鬼毒酒」、通常の者が飲む分には問題ない
が鬼が呑めばたちどころにその力を封じる特殊な酒。

数百年前：幻想郷に鬼退治という言葉が存在した時代に作られた物
であり、以前岬影と霖之助が無縁塚で拾った物だ。

「さてと、鬼のイビキを肴に酒を飲むのもまた一興と諦めるべきな
んだらうねこれは」

それだけ言うと、元から呑もうとしていた酒を波々とぐい呑みに注
ぎはじめると霖之助。

彼の懐に仕舞われた緊急用の連絡護符には「鬼 襲来」の二文字
が記されていた。

絡人線形店――鬼と獣道（後書き）

なんだかんだで、結局助ける岬影であった。っていうお話。

絡人線形店――博麗と友（前書き）

オリキャラはこの回の奴を含めて後二人です。
それ以上は出さないつもり。

絡人線形店――博麗と友

「さて、香霖堂の奴は上手いこと出し抜いたみたいだし俺の方もさつさと終わらせるか」

十年ぶり。

そう、十年ぶりである。

岬影がこの場所を、博麗神社を訪れるのは。

しかしまあ毎度十年越しに神社にやって来る岬影は今更感慨にふける事などない。

そういえば一ヶ月程前にこの神社の巫女が「神社が壊れたから今すぐ直して欲しいのよ…ツケで」などと商売というものを馬鹿にしているとしたかと思えない発言をしていたが一体あれは何だったのだろうか？

境内に入ると紅葉の木々達が目に入る、桜の名所として有名な博麗神社だがこの紅葉も中々美しく春の風景に見劣りしないだけの風情を感じられる。

「あの巫女さえやる気になりゃ賽銭なんぞ幾らでも集まるだろ、この風景なら」

――まあそんな奇跡が起こるわけねえか、なんせ……

「おい霊夢、邪魔するぞ」

「あれ？岬影？悪いけど今は相手してる暇がないから出直してちょ

「だ、因みに素敵なお賽銭箱はあちら」

「俺の目には暇を持て余している墮落巫女の姿しか映ってねえんだが」

「肝心の巫女がこれだもんな」

今代の博麗神社の巫女…通称「博麗の巫女」である博麗 霊夢の特徴を一つ上げるのであれば、巫女服を着ている以外に巫女らしい所がどこにも見当たらない、という一言に尽きる。一体どこで落としてきたのだろうか？

異変が起これば必ず解決するが自分に影響が及ぶか周囲の者に言われるまでは動こうともしない。

何故か力の強い妖怪に好かれやすい、というか最近妖怪が神社に現れらようになったのは間違いないこのせい。

鬼とか紅い館の吸血鬼とかスキマとか。

人里では神社が妖怪に乗っ取られたともっぱらの噂である。

「急に萃香が消えたと思ったら岬影のトコに行ってたのね」

後、勘がいい。

それも異常なまでにだ。

「ああまあ、今頃は香霖堂に居るだろうが」

「霖之助さんの所に？ま、どうせ美味しそうなお酒を見つけたとかそんな理由なんでしょうけど」

何故分かる。

「で？お賽銭を入れに来たんじゃないなら一体何の用なのよ？」

「あ？あーそういや初めてだったかお前が巫女になってからここに来るのは、お茶は勝手に注がせてもらうぞ代金はお前のツケから引いておく」

霊夢の質問を適当に流しながらお茶を淹れる為に岬影は台所へと向かう、妙に手馴れている雰囲気なのは幻想入りして最初の10年程はここで暮らしていたからであつたりするのだが今は関係の無い話であろう。

「俺は十年毎にこの神社を訪れるんだよ、博麗の巫女に頼みごとをする為にな」

「ふうん、それならここで会うのは始めてのはずだわ十年前なら私、まだこの神社にいなかったもの」

霊夢の言葉に少々奇妙な感覚を憶えた岬影はお茶を飲む手を止める。

「人間……なんだもんなお前”も”」

「はあ？当たり前でしょ、どこの世界に人間じゃない巫女が居るのよ」

「守矢の巫女は半分神だな」

「もう半分は人間よ」

そりゃそうだったな、と呟く岬影の脳裏に浮かぶのは訪れるたびに巫女が老いていきそして何十年か一度に巫女が変わる、そんな場面。

「俺が後何回来るまで生きられんのかねえーお前”は”」

「さあ、というかその言い方ちよつとイライラするわね、死んだら閻魔はつたおして戻って来ようかしら、岬影の驚く顔が見れそうだし」

「やめてくれよ、そんな理由で四季様に喧嘩売った事がばれたら説教されんのは俺なんだぞ？」

全くこの巫女が言うつと冗談に聞こえないから怖い。

「とりあえず、そろそろ本題に入ろうか」

「本題？ああお賽銭箱にいくら入れるかって話だっけ？」

面倒なので無視する岬影。

「紫をここに呼んで欲しい今すぐにな」

「紫を？何でまた冬眠する直前に呼び出すのよ」

幻想郷を覆いそして守護する巨大結界「博麗大結界」、博麗の巫女たる霊夢はその結界を意図的に緩める事ができ、そうするとどこからともなく紫が注意しにやって来るのだ。

しかし、今は収穫祭間際もう時期紫が冬眠に入る頃だ、本当に冬眠しているかどうかは別として。

「こつちも色々事情があるんだよ、深く詮索するのはお勧めしないぜ」

「そ、なら詮索はしないでおくわ元からする気もなかったし」

「おう、助かる」

「霊夢、こんな時期に呼び出すなんて何を考え……岬影？もう十年も経ってたかしら？」

「生憎と、な。」

悪いが付き合ってもらうぞ」

「分かっていますわ、一体何回こなした事だと思っているの？」

「違和感を憶えたのがここに来てからだからザッと20回か」

「どうでもいいけど行くなら早く行ってよ私忙しいんだから」

自分には関係ないと判断するないなやこれだ、しかも忙しいって何が忙しいのだ？きつと惰眠を貪るのに忙しいのだろう。

「分かった分かった、じあな霊夢金さえ払う気があるならいつでも来い」

「そうね、行く時はちゃんと払うわ、ツケで」

「やつぱ来るな」

「はいはい私だって眠たいのを我慢して来ているのよ、早く行きましょつ」

足元に開くスキマ、岬影と紫が落ちて行くその時まで博麗の巫女は呑気に茶を啜っていた。

「ああ？何で滝の外側なんだ直接行きやいいだろ」

「あの男やたら強力な結界を張っているみたいね、時間を掛ければ壊せない事もないけれど私達ならこの滝を通るのも容易いのだし」

「それもそうか」

二人がやって来たのは通称「滝の門」と呼ばれる妖怪の山と人里、そして絡人線形店の三カ所から等距離にある滝だ。

明らかに水源などない筈の岩壁から噴き出す大量の水が崖の窪みを覆い尽くしその奥にある洞窟の存在を隠している……隠しているのだが割と皆知っているので意味がなかったりする。

「んじゃ行くか、早いとこ済ましてさっさと帰るそれが一番だ」

「そうね早く帰って連華ちゃんを安心させてあげたいものね」

「…」

「あら拗ねないでよ」

「拗ねてねえ」

そこまで言うとは簡易的且つそれなりの霊力を込めた結界を張り滝に突入していく紫と岬影。

そのまま洞窟を進んで行くと無駄に頑丈そうな扉に打ち当たる。手を掛け力を込めるとギギギギ、と軋む音と共に内側へ開かれていく。

そこにあるのは巨大な空洞。

そしてその場所に堂々と居座る建造物。

複数の寄棟が集まり複雑な屋根の形をした寄棟造り。

名は「仁狼院」、紅魔館、白玉楼、永遠亭に並ぶ幻想郷パワーバラスの一角であり、岬影の尋ね人が住まう建物だ。

「さあーてそろそろ来る頃だな、紫悪りいが先に行って旦那を起こしておいてくれ」

「面倒なのよねえアイツを起こすのってまあ良いけれど、岬影も精々頑張りなさいな」

後ろに倒れこむ様にして紫がスキマに消えていくのを確認した岬影、すると仁狼院の方から飛び出して来る人影の姿が。

「待っていたぞ連！！いざ尋常に勝負、私が勝つたら勿論この婚約届にサインを……」

「するわけねえだろ馬鹿が、それと勝つのは俺だお前じゃねえ」

一瞬で岬影との距離を潰した少女、仁狼院の門番にして狼々刀の使い手、瀧透 キサラの言葉と重なる様にして岬影の拳が振るわれる。

……が。

「やはりそう来なくてはな、倒し甲斐が無い！！」

「今のうちに負けた時の言い訳を考えとけよ！！」

その拳は容易く避けられ勢いを保ったまま薙刀が振るわれ岬影の身体が丁度二分された。

「焰符「大爆焰輪」！！」

同時に、岬影のスペルカードが発動切断された下半身が爆発し巨大な焰輪が辺りに巻き散らかれる。

「見えているぞ！！斬符「一閃一刀」」

溜め斬りの要領で打ち出された斬撃波と焰輪がぶつかり合い互いに消滅し、再生した岬影とキサラは向かいあう。

ダン！！！！

地面を凹ませる勢いで突っ込む岬影の一撃をキサラは又もや躲す、続ける様に放たれた蹴りも手刀も通常弾幕すらも避けられる、まるで見えているかの様に。

「近未来を覗く程度の能力」それがキサラの持つ能力だ、0秒後から10秒後までの好きな時間軸に自身の視線を固定する能力。

故に岬影の攻撃は見切られ躲される。

恐らくどれだけ打ち込んだ所でキサラには一撃も与える事は出来ないだろう……が。

「とりまこれでいっちょ上がりだな、まだまだ甘い甘い」

「つ、次こそは……」

それだけを言い残しキサラの意識は暗転した。

何が起こったのかと言うと簡単な話で、岬影が何度か放った霊弾あれ自体は単なる霊力の塊だが規則的に撃ち込むことにより拘束用の術式を完成させていたのだ。

岬影とのインファイト（張り付き）によって近距離での高速戦をしていたキサラの視線の時間軸は必然的に1秒未満に固定される、なので術式の発動に気付いたとしても手遅れだったと言うわけだ。

「さてとお次は彼奴か……はあ行くの面倒くせえな」

「行く必要は無いよ何故ならボクの方から来てあげたからね、久しぶりだねえれれれん酷いじゃないかボクがここから動きにくい事

を知ってて放置するなんて、それでも親友なの？」

「うぜえ」

何時の間に現れたのか、岬影の背中にベツタリと張り付く少女。

深緑色の髪に黒曜石の様な真つ黒い瞳、別にそれはどうでもいいのだが問題はこの少女の身体から滲み出ている馬鹿みたいな量の霊力だ。

姿形は変わっていてもその力は出会った時と何一つ衰えていない、相変わらずの化け物である。

「まあ何だ、久しぶりだな晴明」

「晴連だよせ・い・れ・ん・ん、せつかく君の名前から字をもらってま
で改名したんだからちゃんと言前読んでよね」

少女の名は安倍あへ 晴連せいれん、かつてその名を都に轟かせた平安時代の陰
陽師安倍晴明……その成れの果て。

絡人線形店――博麗と友（後書き）

なんかツツコミどころ満載な終わり方ですけど次回で説明が入るんで！！

絡人線形店――人間とメンテナンス（前書き）

難産でした……ガク

絡人繰形店――人間とメンテナンス

あへの
安倍 晴明

平安時代中期に現れた陰陽師にしてその名は幻想郷の外、即ち外界でも伝え続けられている程に高名な人物である。

彼の出生は謎に包まれており父親は安倍益材又は安倍保名、母親は信田の森の白狐であるとの説が有力ではあるが何れも確証は無い。

時の陰陽師賀茂忠行・保憲父子から陰陽道を学び、保憲から天文道の奥義を授かったとされ天元2年熊野那智大社において、かの大天狗那智山 四郎坊を封印するなど数々の伝説を残し彼の子孫は土御門家と呼ばれ長らく栄えたという。

そんな大偉業成し遂げた人類史上最強の陰陽師：安倍晴明。
確かにこれだけの事をやってのけた彼は凄い奴なのだと思っし認めてもいる。

しかし……

「いやあ十年ぶりに連の背中を堪能させてもらったよ、相変わらずの暖かくて気持ちよかったなあ」

「黙れ変態、俺の半径5m以内に近づくなというか寧ろ死ね」

「はっはぁーん分かってるよ照れてるだけだもん、このツンデレさんめ……!」

「ー息の根を止めてやりてえんだが
きつと世界中から賛成の声が上がる筈だ。

もう一度言う、彼女の名は安倍 晴連。

人類史上最強の陰陽師、安倍晴明の生まれ変わりにして最悪の変態である。

「それでねえ連、毎回毎回同じチェックじゃボクも連も退屈でしょ？そーいう事で今回は別の趣旨でチェックをしたいと思うんだけど」

「どうでも良いから早く済ませられる奴で頼む」

隣合わせで歩く二人距離は半径5m以内、というか晴連が岬影の腕をがっちり掴んで離そうとしない。

エメラルドの様な所謂エメラルドグリーンのショートカット、外見は16・7歳程度で顔立ちを整っており彼女の前世が男だとは夢にも思いたくない程に美しい。

しかし忘れてはいけないのが彼女が変態であるという事。

「男としてはもう十分に生きたから次は女の子として生きてみたいんだよねー!!」

「一応言っておくが彼の遺言だ。」

岬影は冗談だと思っていた、正直今でも冗談であつて欲しかったと思つている

彼奴は変態なのだ、具体的に言うとな自分の裁判を担当したあの当時の閻魔に「自分が勝つたら記憶をそのままに女として転生させる」と喧嘩を売つて勝利をもぎ取つて来る程に変態である、馬鹿かこいつは。

どう見ても人間とは思えんまあ今となつては本当に人間を辞めてしまったわけだが、彼：否彼女がここから余り離れようとなしないのはそれが理由であつたりする。

「外の世界では日常的にやっている事らしいんだけど、ポツキーゲームって言うのをやって見たいんだよねえ」

「ぽつきーげーむ？なんだそれ」

「えつとねえ…棒状の食べ物両端を二人で同時に食べ始めて、食べ終わった所で接吻を……キヤ！」

「却下」

「なんでさあー良いじゃん別に」

「何が悲しくて元男と接吻なんぞしなけりゃなんねえんだよ」

「一応男時代の20倍は女の子をやつてるんだけどね」

岬影としては仮に100倍だろうが1000倍だろうがお断りである。

「まあくだらねえ御託はもついらねえ、始めるぞ」

「それじゃ先手は貰うね！！」

「は！好きにしな！！」

「赤の式”陽”」「ヒートプロミネンス」！！」

思いつきり横文字なのは陰陽師としてはアリなのだろうか？
そんな思考を遮るように赤色の奔流が岬影に迫る。

「無限「不可視の城壁」」

ドゴツ！！嫌な感じのする衝撃が壁越しに岬影へと伝わり、壁が吹き飛んだ。

多少勢いの落ちた一撃を岬影は空中へ逃げる事により回避する。

「やっぱり今のじゃ仕留められないかあ、そんな訳で次行くよ金生水「プラチナフォール」！！」

打ち出されたのは滝の様に降り注ぐ黒色のレーザー、そしてランダムにばら撒かれた白色の大玉、どうやらレーザーで行動を制限し大玉で撃墜するつもりらしい。

「その程度で俺が止まるとでも思ってたのかよ」

岬影は迷わず突き進む、至近距離から威力重視のスペルを撃ち込めばそれで終わりだ。

が…

「え？いやいや思ってる訳ないじゃんと言う訳でもう一発追加ね、これ凌ぎ切ったらチエツクは終了だから頑張つて、陰陽道「気まぐれ森羅万象」！！」

は？と岬影が口に出す前に…森羅万象の五行を象徴する五色の光線が岬影の視界を埋め尽くした。

「ったくいつまでたっても化け物だよお前は」

「えへへ、ありがとう」

「間違つても褒めちゃいねえからな」

二人が目指しているのは仁狼院の奥の奥、この院の主殿がある本堂だ。

すると残り数百m地点に差し掛かった所で別の人影が割り込んできた。

「そこまでだ！！」

女である。

群青色の着物に同色の瞳、これだけだと外見はキサラと一致する…が残りの特徴白銀の髪は黒く染まり、黒い毛皮で作ったコートを着ている…否体と同化しているつまりあれはキサラの体の一部と言う訳だ。

「ありやりや？わざわざ」「満月の間」まで行ってきたのかい？キサラちゃん」

「黙れ晴連！！貴様抜け駆けは許さんぞ！！」

「何言つてんだお前は、俺は旦那に会いに来ただけだっつー…」

「旦那になりに来たのだろうか？」

「どんな聞き間違えだ！！」

人狼

それがキサラの正体であり本性でもある、かといって全身から毛が生える訳でもなく顔もそのまま、変化はちょっとオプションが付いたぐらいのものだ。

耳とか尻尾とか。

妖力も幾分か増加しているが岬影から見れば文字通り毛が生えた程度のものでしかない。

「まあまあキサラちゃんも連も落ち着いて、三人で行けば問題ないでしょ？分かったら耳も尻尾も引っ込める」

「し、仕方あるまい」

「つーかお前ら両方付いて来なけりゃいいんじゃないのかよ」

「そんな冷たい事言わないでよねえ本当に嬉しかったんだからさ、久しぶりに会えて」

巫山戯た調子の晴連、けれどその笑みには微かな哀愁が感じられた。確かに晴連は筋金入りのバカでアホでお調子者の変態だ。

だが…

「しょうがねえな、ほら早く行こうぜ”親友”」

それでもやっぱり彼女は岬影の大事な親友なのだ。

扉を開けるとそこは戦場であった。

比喻表現でもなんでもないガチな戦場である。

「せつかく起こしてあげたのにそのお礼がこれなのかしら？」

「ああ、脇腹に膝蹴りが入らなければ礼を言っている所だったのですが」

至る所にスキマが開かれ弾幕が撃ちだされる、が次の瞬間には…

「美しくも儂き弾幕、その存在を…否定する!!」

弾幕が消滅した。

存在を否定されて。

賢者…八雲紫と対等に戦闘を行っているのは一人の少年。

この「仁狼院」と同じ漆黒の髪を持ちどう見てもジャージにしか見えない格好をしている。

彼の名は黒峯くろほう

幻想郷最強の一角にして仁狼院の主。

「否定と肯定を操る程度の能力」を行使する正真正銘の”人間”だ。自身の死を”否定”する事で生き延びており、強靱な肉体を”肯定”し紫の動きについて行く。放って置くと何日でも続けそうな勢いである。

「という訳でキサラ頼んだ」

「任せろ！！震符「マグニチュード10」！！」

再び人狼モードに入ったキサラが発動したスペルカード。

生み出された振動波が空間を歪ませる。

「振動を操る程度の能力」人狼モードのキサラの能力なのだが、この能力が引き金となり起きたのが「封力異変」と呼ばれる異変だ。

「あら、思ったより早かったわね岬影ももう少しかかると思っていたわ」

「ああ、岬影お久しぶりです」

「黒峯の旦那も元気そうで何よりだ、それで早速始めてもらいたいんだが構わねえよな？」

岬影の質問に無言の了承を出す紫と黒峯。

「ああ、キサラ・晴連下がってくださいこの作業は私達とて綿密に行う必要があるますから」

「御意」

「了解」

部屋に残ったのは岬影、紫、黒峯の三人。
紫が口を開く。

「それでは始めましょうか」

「ああ、岬影は部屋の中央へ」

「分かってるっての」

これから始まるうとしているのは所謂メンテナンスと言っべきものだ。

岬影 連という存在は人形に魂を埋め込んだもの。

口で言うのは簡単だが、実際に行く事は困難を極める。

それを実際にやっつてのけたのがこの二人な訳だが。

故に紫と黒峯にしか岬影のメンテナンスは出来ない。

「いくわよ黒峯、準備は万端かしら寝起きで鈍っていたりしなわよね」

「ああ、そちらこそ最中に寝ない様に精々気を確かに持って下さい」

口を開くと相手の悪口しか出て来ないのだろうかこの二人は。

紫が存在の境界を操り、黒峯が魂と人形の間にあるラインを肯定する。

一瞬岬影の体が淡く光り…そして。

「やっぱこれが終わった後は体が軽いぜ、サンキューお二人さんつて居ねえし!!寝てるし!!」

メンテナンスが終了し岬影が目覚めると紫の姿は既になく、黒峯に至っては早くも布団の中に潜り込んでいた。ダメだこの二ト早くなんとかしないと。

――帰るか

即決である。

ベタベタとくつついて来る二名を適当にあしらった岬影は愛しの我が家たる絡人線形店の目の前に立っていた。

「彼奴らのせいですっかり遅くなっちゃった、連華の奴はもう寝てるんだろおな」

そう言いつつ扉を開ける…すると。

「お、お帰りなさいませ連様!!あ、あの結果の方は大丈夫だった

「んですか?!」

嬉しそうな、それでいて心配そうな顔をした連華の姿がそこにあった。

「いつも通り問題ねえよ…それと連華」

「は、はい!!」

「これからもよろしく頼むぜ、期待してる」

ここまで自分の心配をしてくれる”家族”に向かって微笑を浮かべる岬影であった。

因みに連に微笑まれた(連華フィルターごしでは超絶イケメンがそこにいたとかいないかったとか)連華が気絶して、珍しく動揺した連が永遠亭へと向かうのはまた別の話だ。

絡人線形店――人間とメンテナンス（後書き）

――通りオリキャラが出揃ったんでオリキャラ紹介を後で投稿します。

絡人線形店ーオリキャラと紹介（前書き）

今までのオリキャラを纏めてみました。

キャラが濃いな……

評価ポイントが800ポイントを超えました！！こんな幸せがあった良いのでしょうか？

評価を下さった皆様、並びにお気に入り登録を下さった皆様、そしてこの小説を読んで下さっている全ての読者様にこの場を借りてお礼をしたいと思います。

本当にありがとうございます！！

今後とも絡人線形店をよろしく願います。

絡人繰形店――オリキャラと紹介

永遠の人形

岬影・連 : Ren Misakage

種族/人形・但し中身は人間である

能力/ありとあらゆるものを再生する程度の能力

危険度/中(1)

人間友好度/高

主な活動場所/絡人繰形店

人里と妖怪の山の間地点に位置する総合修理屋「絡人繰形店」の店主。

長い年月を生きている割には感情的になりやすく友人達にからかわれるのは毎度の事。

誰かに従う又は誰かを従えろといった主従関係にはまるで興味が無く自身も滅多な事では戦おうとしない。

有する能力故に苦悩した過去があるらしく知人の前でしか能力を使わない、また人里からの依頼も出来る限り能力の使用は控えているようだ。

目撃報告例

・道に迷っていたら人里まで送ってくれたんだ、怖そうだけど優しかった。

（人里の少年）

本人はいずれ店の利益になるから、などと言っているが単なる照れ隠しである。もっと褒めてやれ。

・店を利用しているのに何で機嫌悪そうな顔をしてるのかしらね。

（博麗 霊夢）

代金をツケで済ませているからだ。

・何故か外界の道具について良く閃いているよ。

（古道具屋の店主）

ナ、ナンデダロウネー！

対策

特に何かをする必要はない。

店に行っても普通にしていれば大丈夫。

仮に店を店の外で出会ったとしても何もされたりしない、寧ろ壊れたものを渡せば高確率で直してくれる。（2）

1 店に危害を加えようとする者には容赦なく潰しにかかる。自分が死ぬまで戦う…けど死なないのでいつまでも戦う。

2 ものには限度と言うものがあるので程々にしておくべきだ。

慕いし付喪神

連華：Renka

種族／付喪神（片眼鏡）

能力／不明

危険度／極底

人間友好度／極高

主な活動場所／絡人繰形店

岬影を心から敬愛する片眼鏡の付喪神。

右眼に装着された片眼鏡は岬影からのプレゼント、戦闘力は映してくれないので注意。

基本的に明るく素直を性格をしているが岬影がそばにいない期間が10時間を超えるとダークモードに移行する。

店員としては非常に優秀、けれど岬影の前では緊張してしまい失敗を繰り返す。

目撃報告例

・いつも人里に故障品の回収に来てくれて助かってるよ、早く想いが届くと良いねえ。（八百屋の女将さん）

果たしてその日が来るのだろうか？

・この店には欠かせない大事な店員だ、後はあのあがり症さえどうにかなればなあ。（修理屋の店主）

原因について二人でよく話し合う事をお勧めする。

・この間店に行くと連華ちゃんソックリの毒舌少女がいた、あれは誰だったのだろうか？（人里の住民A）

ダークモードの彼女とはまともな会話を期待しない方がよい。

対策

店主と同じく特に何かをする必要はない。

というか店主以上に人が良いので人里ではとても可愛いがわれている。

しかしダークモードには要注意、ヘタすると一生もののトラウマが
できかねない。

震えし人狼

瀧透・キサラ：K i s a r a T a k i d o o

種族／人狼

能力 / 近未来を覗く程度の能力 (人間時) ・ 振動を操る程度の能力
(人狼時)

危険度 / 中

人間友好度 / 底

主な活動場所 / 仁狼院

仁狼院で門番をしている人狼。

どこその中国と違ってあまりサボらない。が有給を貰っては岬影へ求婚する程の熱愛者。

容姿は非常に美しく稀に人里を訪れると一部の女性がパルパルパルパルパルパルと呟く姿が目撃されている。

目撃報告例

・ 店に来るが依頼はしねえし訳わかんねえ事ばかり言いやがる、本当に困った奴だ。(修理屋の店主)

いいかげん腹を括ってはどうかだろう。

・ 薙刀で滝を割っていたんだ!! 超すげえ!!

(人里の若者)

薙刀の腕はかなりのものらしい。

・ 連様は絶対に渡しません!!

(修理屋の店員)

ご武運を祈ります。

対策

基本的に仁狼院又は絡人繰形店でしか目撃されていない。

なので会う事自体が稀、運良く目にする事ができたならば良い目の保養になるだろう（ 1 ）

何処となく人間を避けている節がある。

1 くれぐれも凝視しすぎない様に明日からの女性の目が厳しくなる。

生きた伝説の生まれ変わり

安倍・晴連：S e i r e n A b e n o

種族 / 元人間（ 1 ）

能力 / 陰陽道を使う程度の能力（ 2 ）

危険度 / 高

人間友好度 / 底

主な活動場所 / 仁狼院

平安時代の天才陰陽師、安倍 晴明の生まれ変わり。

生まれ変わってもやっぱり天才は天才であるらしくその実力は底知れない。
特徴を上げるとすれば極度の可愛い物好き、好きあらばキサラをモフモフしようとする…が岬影がいる時に限り標的が変更される。
岬影とは晴明の時から友人、現在はアピール中の様に見えるが本人はあくまで友人として岬影の事が好きらしいとの事。

目撃報告例

- ・よく抱きつかれる斬り捨てたい所だが全て躲されてしまう。
(人狼の門番)

彼女と対等に渡り合うには異変首謀者レベルの実力が必要である。

- ・すぐ調子に乗るアホだが大切な友人の一人だ。
(修理屋の店主)

だからツンデレとか言われ(r y

- ・人間としては最上級の力の持ち主ね、上には上が居るけれど。
(スキマ妖怪)

確かに彼女の主の方が化け物である。

対策

無し。

何故なら決して会う事がないからだ。

彼女は諸事情により仁狼院を出る事はない、なので対策もへつたくれも無いのである。

1 禁術によりほぼ不老不死、けれど余り仁狼院を離れられない。

2 それって能力なの？と言いたいであろうが幻想郷の魔女達と似たようなのしかもこちらは、陰陽道に属するものであれば秘術だろうが一子相伝だろうがお構いなしにパク…learningsする事が出来る。

人間の頂天

黒峯：Kokuhou

種族/人間

能力/否定と肯定を操る程度の能力

危険度/中

人間友好度/底

主な活動場所/仁狼院

幻想郷パワーバランスの一角である仁狼院の主。

真正正銘の人間でありながら幻想郷最強クラスの力を持つ化け物。

(1)

軽く数千年は生きているらしく今の名前は2つ目との事。

冬眠ならぬ春夏秋眠をする、寝過ぎだ。なので岬影のメンテナンスは秋の冬の境界で行うしかない。

因みに冬の間は八雲 藍と共に博麗大結界の綻びを直している。

八雲 紫とは色々要因があるようで顔を合わせれば三秒も待たずに皮肉の応酬が始まる始末。

岬影からの呼び名はもっぱら「黒峯の旦那」

目撃報告例

・命の恩人なんだが何処となく掴みどころが無い、それとたまに申し訳なさそうな顔で俺を見ている時がある。気のせいか？（修理屋の店主）

いずれ分かる日が来るはずだ。

・尊敬するに値する人だよ、出来ればもっと早く起きて欲しいかな。
（天才陰陽師）

起きると言われて起きるニートはニートでは無い。

・本当、何度殺してしまおうと思ったか。
（スキマ妖怪）

幻想郷が滅びかねないから辞めてくれ。

対策

唯でさえ冬にしか行動しない上に博麗大結界のチェックに追われて

いるので

まず持って人目に触れる事はない。

仮にあったとしても変わった子供がいるなあで済んでしまう。

1 混じりっ気無しの純粋な人間。

絡人線形店ーオリキャラと紹介(後書き)

オリキャラの強さの比較。

連華<キサラ<岬影<晴連<黒峯

東方風に比較？

連華 〓 3面ボス

キサラ 〓 5面ボス

岬影 〓 5〜6面ボス

晴連 〓 6面ボス

黒峯 〓 Phantasmボス

絡人線形店――収穫祭とフラワーマスター（前書き）

いざ収穫祭！！

絡人線形店――収穫祭とフラワーマスター

紅葉がピークに達し黄金の絨毯と呼ぶに相応しい見事な稲穂が田を彩るそんな時期。

収穫祭の時がやって来た。

今頃人里の人間達は出し物や料理の準備に追われている頃だろう。人里を挙げての大規模なこの祭には人妖問わず多くの者達が集まり、飲めや歌えやの大騒ぎとなる。

まあ最後まで飲み続けているのは決まって妖怪連中なのだが。幻想郷内でもかなり大掛かりなイベントだ。

そんな収穫祭の用意が着々と進む中岬影は何をしているかと言えば…

「どうせ今日はもう客も来ねえだろうし店仕舞いにするか」

文々。新聞を片手にいつもと何一つ変わらない一日を送ろうとしていた。

どうやらこの男の辞書には協調性という言葉が欠けているらしい、仮にも人里に顧客を抱える店の店主がこれで良いのだろうか？

「後は連華をどう言い包めるかだな」

こんな事を言っておきながらも、結局は捨てられた子犬の様な連華の目に流されて行く事になる岬影である。

別に岬影は収穫祭自体の存在を否定している訳ではない。

寧ろ幻想郷の豊穰神に信仰が集まる重要な行事だと認識している程だ。

では何故？と問われれば答えは単純で人混みが面倒だからの一言に尽きる。引きこもりかお前は。

そう言う訳で岬影が憂鬱に駆られていると、人里へ故障品の回収に行っていた噂の付喪神が大きめの籠を背負って帰って来た。

「連様、ただいま戻りました」

「ん？ああお疲れさん、どうだったんだ人里の方は？」

「今年も例年通り豊作だそうですよ、皆さんもお忙しそうに準備を進めていましたし今晚が楽しみですよ」

「…そりゃ良かったな」

他人事の様に呟く岬影。

今の連華を見て収穫祭に参加しないと云える奴は恐らく勇者か？だ。残念なことに岬影はそのどちらでもない。

「あの連様…その件で少しご相談があるのですが」

「相談？収穫祭の事ですか？」

「はい、お願いになるのですが今夜もう一人だけ一緒に行つてはくれませんか？」

意外な相談…もといお願いである。

今までのこんな事は一度もなく二人で行くのが常であったのだが。

もう一人……と言うとやはり親友の多々良 小傘か、又は魂魄 妖

夢であろうか？大穴で最近交友を深めている十六夜 咲夜かもしれないが…あのパーフェクトメイドが主人の元を離れたりするとは到底思えん。

仮にその面々が来るのなら自分がない方が良いのでは？と尋ねてみるもの。

「いえ、連様もいなきゃダメなんです」

岬影の考えはハズレであつたらしく、ますます誰が来るのか予想がつかなくなってきた。

「で？結局誰と一緒に行きゃいいんだ？」

岬影の質問に連華が何やら嬉しそうな笑みを浮かべ言い放った答えは……

「風見 幽香さんです！！太陽の畑の！！」

予想の遙か上を突き抜け地平線にまで届きかねない様なものであつた。

太陽の畑

妖怪の山の反対方向の奥地に在る、一面を覆い尽くす向日葵が太陽の如く映える場所で”とある妖怪”がよく現れる場所としても有名

だ。

そんな太陽の畑へと降り立つ岬影。
ちよいと用が出来た、とだけ言い残し全速力でここまで飛んで来たのだ。

暫く進むと、簡素ながらも丈夫な作りになっている事が伺える一軒の小屋に辿り着く。
ノックはしない。

「入るぞ幽香」

「マナーがなっていないわね、ノックの一つや二つは欲しいのだけどもう頭にボケが回って来たのかしら？」

「どうせこの向日葵畑に入った時点で気がついていたんだらうがよ。」

岬影の訪問に眉一つ微動だにせず白々しい態度を取る女性。

赤い格子柄のベストとスカートに白いシャツを着込み、淹れたてらしい紅茶を啜っている。

肩口ほどの濃緑色の髪、血の様に赤い目、綺麗に整った顔立ちは見ると魅了するのだろうか…体から滲み出ている威圧感がその全てを埋れさせていた。

四季のフラワーマスター・風見かざみ 幽香ゆうか

彼女のトレードマークである日傘は室内であるため傍にかけているが、その姿は幻想郷中に知れ渡っている。

幻想郷縁起では「絶大な力」「純粹に高い妖力・身体能力」「同じ

強大な妖怪相手にしか本気を出さない」「人間には退治はまず無理」
などと言われ放題…書かれ放題な彼女だが…：概ね合っている。

「御託はいらねえ、一体どんな心境の変化だ？お前があいつを…連
華を収穫祭に誘うとはな」

「別に私は変わってなんかいないわ、寧ろ変わったのはあの子の方」

「…何が言いたい」

「私は花の妖怪、可愛い華を愛でる事の何が悪いのかしら？」

どうやら真面目に答えてくれそうにもない。

まあいつもの事なのだ。

「悪いとは言ってねえよ…唯あいつを傷つける様な真似はするなど
伝えなかっただけだ」

「確かにアレは私の思慮が足りていなかった、一応あの子には詫び
をいれたわ」

「お前が？」

「何でそんなに驚くのよ、この目が嘘をついている様に見えるとい
うの？」

「人を見下している様に見えるな」

瞬間、いつ手に取ったのかも分からない日傘が真横に振るわれ、岬
影の首が飛んだ。

首が再生するまでの間に幽香は岬影の側へと寄り、元通りに鳴った首元で囁く。

「いつからそんな事を言う様になったのかしらね、あ・な・た」

ビクッ！！と岬影の肩が震え上がった。

「際限無く紛らわしい言い方をすんじゃねえ！！！！」

「だって連華は私と貴方の共同作業で生まれた子だもの、こういう言い方も間違っではないでしょう？」

「あれって単に金を払う気の無かったお前が無縁塚で拾った片眼鏡を俺に渡したただけだろ！！そりあ今では感謝してるが」

「だから今夜は親子水入らずって事ね」

「お前ゼってえーワザとだろおおおおオオオ！！」

収穫祭に行く前から疲れ切った岬影の運命やいかに。……続く。

絡人線形店ーー収穫祭とフラワーマスター（後書き）

幽香さん人気投票1位目指して突き進んでくれー

絡人線形店――花と華（前書き）

収穫祭、本番です！！

絡人線形店――花と華

戌の刻――

収穫祭が最高に盛り上がるこの時間帯。

道の両脇にズラリと並ぶ出店やあちらこちらに止まっている屋台はその盛況さを物語っており、祭独自の食欲を掻き立てる濃厚な匂いが充満しどの出店も屋台も客で賑わっている。

そんな中、一際道ゆく人々の好奇の…身も蓋もなく言ってしまうば珍妙なモノを見る視線を集めている三人組の姿が…

「わあ今年も活気に溢れてますね、連様・幽香さん何か食べたい物ありますか？私買って来ますよ〜」

その三人というのはニコニコ顔の付喪神・連華であり。

「貴方に任せるわ特にこれといった好みも無いし」

同じくニコニコ顔…というか他人を不安にさせる笑みを浮かべた四季のフラワーマスターこと風見 幽香であり。

「オイ連華、こいつの分は全部ゲテ物で構わねえってアホかお前ガキが見てる所で何やってんだよ!!!」

あの後抵抗も虚しく幽香に連行された岬影であったりした。脇腹に突き刺さった日傘は、ご愛嬌である。

通告も無く突き立てられた日傘に一瞬周囲がザワめく…がそこは幻想郷の住民達のこと別段騒ぎたてる必要は無いと見るや妙な三人組の様子を窺うのに戻る。

「ーやっばし変に見えるよなこりゃ

連華の事は人里で知らぬ者などいないし時々連華と共に人里へやって来る岬影もある程度は顔が知れている、この二人が一緒に居た所で誰も不思議には思わない…というか去年まではそうだった。

だが今年はまだ一人、大妖怪として名の知れている風見 幽香がいるのだ。どうしたものかと疑われない方がオカシイ。

「さてと、連華も買いに行っちゃったし俺は少しあそこら辺を見て来るとするか、お前は どうする？」

幸い人里には待ち合い場として最適な所がある、多少バラバラになったとしてもそこ落ち会えるので便利だ。

「そうね、なら私も向こうの方を見てこようかしら。

一刻後、最初に話した通り龍神像の前で落ち合いましょう。」

そう言っつて幽香が指差したのは岬影が行こうとしたのとは別の道。てっきりついて来るのだと思っつていた岬影としては少々予想外である。

「あら？もしかして一緒に行きたかったのかしら？」

「それはねえから安心しろ」

そんな視線を察した幽香の言葉に間髪入れず答えた岬影であった。

「幽香の奴は、一体何を考えてんだかな」

ふと独り言でそんな事を呟いてしまう岬影。

彼女と連華の間に起きた出来事が出来事だけに下手に手を出すのを控えていたら、これだ。

全く持つて意味が解らない。

なので深く考え込んでいた岬影が前方不注意だったのは当然の事だと言えよう。

「いや、言ってる意味が分からない上にこれはどう見てもそっちが悪いわ」

「悪い穠子様、小さくて見えなかった」

岬影の前でしかめ面をした風変わりな帽子を被った少女の足元に落ちていたのは、最近人気の出ている食べ物で「ぱふえ」とか言うらしい。

どうやら前をよく…否全く見ていなかった見ていなかった岬影が避けようとした少女に正面から突っ込んでしまった様だ。

「来年からはアンタの店の畑には何も実らなくなるけど？」

「分かったよ買い直して来るからそれで勘弁してくれ」

そう言うと目の前の少女、「豊穰を司る程度の能力」を持つ八百万の柱：秋あき 穰子みのりこの気が変わらない内に代わりのばふえを買うべく店に並ぶがそこに在るのは人人人の大行列。

――面倒くせえ

自業自得である。

「で、収穫祭の主役がこんなところで呑気にはふえを突ついてていいのか？」

「いいのよ別に今夜は私が主役なんだもん、まあ一通りやる事を終わらせて暇してたんだけどね」

秋 穰子という神様はその能力が示す通り幻想郷の豊穰を司る神：所謂、豊穰神である。

毎年収穫祭になると呼ばれるのだが、実のところ収穫前に呼ばなければ意味はないので呼んだ所で利益は無い。

まあ本人曰く。

「人里の人間達と楽しくやっていければそれで良いじゃない」との事なので双方特に気にしてはないのだろう。

「そう言う岬影こそ連華ちゃんと別行動なんて珍しいわね、ついに見捨てられちゃったとか？そりゃこれだけ鈍ければねえ」

「何を言いてえのかは知らねえがあいつなら食い物を買に行ってる、後で龍神像のトコで会う予定なんだがな」

そっか、と返答する豊穰神の顔は何故か呆れ顔であり、気がつけば長蛇の列も何時の間にか残り僅かとなっていた。

「山の喜びつくさいずばふえを一つー!」

「何だその明らかに値のはりそうな名前は?!」

順番が回って来るなり直ぐさま断言する穰子。

すかさずお品書きを確かめると案の定彼女が選んだのは一番高いばふえ、並のばふえならば三つは買える額だ。

「それじゃご馳走さま岬影、来年もちゃんと畑に豊穰を与えてあげるから安心して頂戴」

言うなり軽くステップを踏みながら去っていく穰子の姿を見て思わず。

「ーま、あれだけ嬉しそうな顔をしてくれるなら金を出すだけの価値はあったか。」

冬の彼女を知る者はその考えに大いに賛同してくれるに違いない。そして時間を確かめる為に備え付けの時計を見る。

……見る。

……よく見る。

……とてもよく見る。

現在の時刻、戌の二刻。
既に待ち合わせの時間を半刻も過ぎている。
時間でも巻き戻さない限り間に合わないだろう。

「……最悪だ」

とりあえず腹を括るしかあるまい。

岬影は急いだ、これでもかと言う程に急いだのだ。

途中で酒瓶の山に埋れていた萃香と同じく空の皿に埋れた幽々子の姿を見かけるもスルーし、永琳と共に鈴蘭の加工品を一生懸命に露店で売り捌くメディスンに声もかけず、珍しく顔を出し魔理沙に連れ回されていた霖之助を、見ない振りしてまで急いだのだ。

故に。

「この扱いは絶対におかしい」

「おかしいのは貴方の顔でしょう？随分と大胆な面構えになったわね」

「お前のせいだな！！」

何と言うか…非常に不細工な顔の男がそこにいた。岬影である。
鼻を思い切り捻じりながら引っぱられたようでかなり不気味な顔と

化しており…その証拠にただでさえ離れていた人垣が更に離れて行く。

「これで客足が遠退いたらお前のせいだからな」

この状態は”壊れた”と定義する事が出来ないので岬影の能力も無意味…なので一旦顔を抉り取りその上で再生させる、無論顔を隠しながらだ。

「何を言い出すかと思えば、直接店を訪ねて来る人間なんて元々居ないじゃないの」

確かに人里の客は連華に故障品を預け、直された品を受け取り代金を払うといった形で店を利用するので滅多に出来ない。

しかしこれでは店主としての面目が保てないではないか。

「その話はもう良い、それより連華の奴はどこで油を売っているんだ？」

いくら三人分の夕食を買いにしてもここまで時間がかかるとは考えにくい、すると幽香も似た様な事を思っていたらしく。

「仕方がないわね、確か…この道だったわ様子を見に行くわよ」

「ん？別に待ってても構わねえぞ俺が一人で行って来てやる」

寧ろその方が注目されずに済むので岬影としてはありがたいのだが…

「いいから、行きましょ？」

バレバレの思惑は見抜かれており形式上は尋ねているものの幽香の腕は既に岬影を捉えていた。

結論から言つと、連華は搜索開始から10分も掛からずに見つかった。

見た所、人里の若者に囲まれて戻るに戻れなかったらしい。

――何てありがちな状況だ。

岬影の思つた通りありがちな光景ではある、異なる点を二つ程上げるならばそこにいる5人の若者が束になった所で連華の足元にすら及ばない事、もう一つは…

「私の連れに何か用かしら？」

とても良い笑顔を湛えた風見 幽香がそこにいた事。

途端、正に雲の子を散らし去って行く若者達。ご愁傷様だ。

「あのう幽香さん、あの人達も変な下心があつた訳じゃないと思うんですけど…」

「つーか彼奴ら全員妻子持ちだろおが」

大方日頃のお礼に、とでも言つて純粹に感謝の気持ちを示そうとしたのを連華が渋つたのだらう。

「いつものお礼と言って下さったのですが既に三人分の買物も終わっていましたし」

「何か俺達の方が悪くねえか？」

「…何？」

視線に気がついた幽香に向かって、

「いや、お前でも早とちりする事があるんだなあ?!」

余計な言葉を零した岬影の腹に本日二度目の日傘が突き刺さったのは言うまでもあるまい。

その後…特筆する事もなしに時間は経過し、収穫祭は終わりを迎えようとしていた。

強いて言うのであれば、100%からかい目的で現れた紫と幽香の間に火花が散つたり、サボっているのを閻魔様に見つかりフルボッコにされ引きずられていく死神の姿があっただぐらいだがいつもの事なので岬影は見向きもしなかった。

「あ、あの幽香さん!」

「何かしら?」

少しばかり頬を上気させた連華の声は夜風に流され幽香の元へと届く。

「今日は、その…お誘いしてくれてありがとうございます、私とても楽しかったです、幽香さんと一緒に来れて」

いつもよりほんの少しだけ幽香の目が見開き、そして。

「そうね、私も楽しめたわ。」

少なくともあの日の自分を叱咤したいぐらいにはね」

「おい幽香おま…」

岬影の言葉を片手で制し幽香は続ける。

「貴女は連華、一輪の花なのよ。」

あの時はまだ蕾だった貴女が…まさかここまでの花を咲かせるとは思ってもいなかったわ、だからこれを…連華がより美しく咲くことの出来るように」

幽香が差し出したのは一輪の花。

それは「花を操る程度の能力」を有する彼女ならば造作もないこと、肝心なのは込められた言葉^{メッセージ}

華やかな黄色に彩られたその花の名は、百合水仙^{ゆりすいせん}又の名をアルストロメリア。

「いいんですか？私に…こんな」

「ふふ、貴女にだからこそよ、今まで以上に美しくそして強くなり

なさい、まあその前に…」

視線を岬影に傾ける。

「早いとこ自分の収まる花瓶を手に入れるのね」

「な、なあ…！」

たちまち真っ赤に染まる連華の顔。

最後の言葉は意味不明だが…これだけは言える。

――連華が満足してんなら特に言うことはねえか

そう思い、この現状に関して一言…

「あまりからかってやるなよこのサディストオオ!?」

酷すぎる発言に本日三度目の日傘が突き刺さり、完璧なフォームから打ち出された連華のアップパーが岬影の顎を粉碎した。

後日、嬉しそうに百合水仙の世話する連華と何故あの時連華まで怒ってたんだと、未だに悩む鈍感店主の姿があった。

百合水仙：花言葉は、『華やかであれ』

絡人線形店――花と華（後書き）

この日を境に連華のアプローチが激しくなったとか、ならなかったとか？

絡人繰形店――姫様と氷囊（前書き）

永遠てゐ、じゃなかつた永遠亭です。

絡人線形店――姫様と氷囊

その日は冬が近づいている事もあり一段と冷え込んでいた為かわざわざ中途半端な土地に位置する絡人線形店を訪れる物好きはいなかった。

自覚が在ると言うのにこの場所へ拘るのは岬影なりのポリシーなのだろう。

しかし客が来なければ岬影は必然的に暇となる。

こんな日に限って依頼は一件も来ておらず連華は風見 幽香宅にてガーデニングの勉強中だ。

あの日を境に連華は週に2・3日程の割合で彼女の小屋に通うようになった、どうやら店の周りに花壇を作る計画のようで仕事の合間を使つての設計図作りに余念が無い。

――こりゃ本格的にやる事がねえぞ。

するとそんな岬影の気持ちを読み取ったかの様にカウベルが鳴り、絡人線形店に客がやって来た……のだが。

「異変だな」

「迷いもなく断言しないで頂戴、貴方は私を一体何だと思っているの？」

ドアが開き目が合った途端そんな事を言い出す岬影に、芸術品の如き美しさを醸し出す少女。

永遠のお姫様にして永遠亭の主。

蓬萊山 輝夜ほつらいさんはうんざりした様子で言葉を返す。
かぐや

「ーいつまで経っても根は変わらないのねこの男は、”今”も”昔”も。」

などとちよっぴり感傷に浸る彼女に岬影は容赦なく追撃を仕掛ける。

「ありえねえだろ、具体的に言うと黒峯の旦那が冬以外にも活動するぐらいにありえねえ」

「やけにピンポイントな例えね、それと幾らなんでもあの男と私を同じ物差しで測るのはやめなさい」

永遠亭の外へ顔を出す事の少ない輝夜だが、流石に一年の四分の三を寝て過ごす黒峯と比べられるのは心外である。

それに今はダラダラと時間を消費している場合ではない。

「永遠亭で問題が起きたのよ、永琳とイナバ達は対応に追われているからしょうがなく私がここまで来たと言う訳、納得できたかしら？」

「それで俺を永遠亭まで連れて行くっことか」

まあ、岬影としても丁度退屈していた所だ、少々面倒事の臭いがするのも今回は見逃すとする。

「分かった支度するからちよいと待っていてくれ」

永遠亭で面倒事と言えば機械関係の事に決まっている、なので用意するのは工具類一式に後はその手の書物を数冊程度で良いだろう。

……待つこと数分。

工具箱と本の入った大きめのザックを背負い、油汚れが伴う機械いじりに備え「作業着」なる物に着替えた岬影。

外界から流れ着いた物を複製したのだがこれが中々使い勝手が良い。――物は試しとアリスに頼んだ甲斐があったぜ。

油汚れだけでなく防水や防寒にも優れており、そして何より頑丈だ。

「準備は終わったようね…それでは」

片腕を差し出した輝夜はその黒真珠の瞳で掴まるように促し、どことなく芝居掛かった仕草で。

「永遠と須臾の旅路へ案内して差し上げましょう」

人を夢へと誘う妖艶な声が響き、次の瞬間岬影の視界は暗転した。

「おいおい、また随分と面倒くせえ事態に陥ってんな」

「そうなのよ、熱いには慣れてるけれどもこっちは暑いと嫌になるわ」次に岬影の視界が安定すると同時に目の前の建物、永遠亭から吹く季節にそぐわぬ嫌な熱風が頬を撫で付け輝夜は不快そうに目を細める。

外に居てもこれだ、中がどうなっているかなど考えたくもない。

「この熱風、空調設備がイカレちまったのか？そう簡単に壊れる柔な作りじゃねえだろうによ」

なんせ、河童と岬影の共同開発だ。

床暖房システムを普及させられなかった鬱憤：もとい無念を晴らさんとばかりに河童達がこれでもかと死力を尽くした結果、仮に大地震が起こり永遠亭が崩れようと設備だけは無傷で残る程の強度はかねそなえていたはずなのだが……

因みにそれって意味が無いんじゃない？とかは聞こえない、聞こえないといったら聞こえない。

「それを調べさせる為に呼んだんじゃない、私は永琳の診療室で避暑しているから原因を突き止めて解決したら来て頂戴」

「ん？あーそーいやあの部屋だけは別のパイプラインだったな、それよか姫さん俺に丸投げでいいのか？多少の故障なら永琳でも十分直せるんだぞ？」

商売人としてはあり得ない発言だが、永遠亭は大のお得意様たまには相手の出費を減らす配慮も必要だろう、と思つての発言である。

「何よ不服な点でもあつたかしら？」

「いや別にそんなんじゃないが……」

「なら良いじゃない、ほら早く迅速に完璧に直してきて、そうでないといと暑くて死にそうよ」

いやあんた不老不死だろ、というツツコミはしない。
要は死ぬほど暑いという意味だ、死なないが。

――まあこの方が姫さんらしいか。

そう自己完結し空調設備の修繕をすべく岬影は永遠亭へと足を踏み入れた。

ここ永遠亭の空調設備は地熱の熱気と氷嚢の冷気で空気の温度を調節し、それをパイプで運ぶ…というシステムを導入している。

故にこの異常な熱気の原因として考えられるのはパイプの破損、地熱の上昇、氷嚢の異変のどれかだ。

「パイプの破損だと楽で助かるんだがなあ」

他の二つは解決するのに時間が掛かる可能性が高い。
特に地熱の上昇となると岬影一人の手には負えなくなる。

――それも視野に入れとくべきか？
そう思いつつ、永遠亭の敷居を跨ぐ。

「ま、とりあえず調べられるトコから終わらせるとするか」

そして岬影の体が霧散した。

自身の体を天文学的数字にまで分解し永遠亭の隅々まで行き渡らせ

ていく。

パイプライン…確認中。

パイプNo. 1～5オールクリア。

同じくNo. 6～10異常無し。

最終ポイント…問題無し。

どうやらパイプの故障ではない。

「先に氷嚢の確認か、もし外れなら黒峯の旦那に頼むしかねえ」

紫とかでも地熱の操作は出来るだろうが何を要求されるか分かったもんじゃないので却下。

体を再結合させ迷いの竹林の地下深く。

輝夜の有する「永遠と須臾を操る程度の能力」によって一年中溶ける事の無い氷が詰まった氷嚢へと急ぐ。

「どうなってるんだこれ？」

思わず、といった調子で言葉を漏らした岬影の前にあるのは大地にパツクリとできた裂け目。

本来ならば古井戸を降りて行き途中の横穴が氷嚢の入り口となって

いるのだが。

「ーけどこれだけじゃねえな、この裂け目自体はパイプの冷却には何の悪影響もねえはずだ。」

つまり別の原因がこの下にあるという事。

十分に注意しながら下へ、下へと降りてゆく。

やがて一番底、氷囊のあるべき地点まで降りるとそこには何もなかった。ただ広いだけの空間となっていた。

氷が消えている。

いや、片隅にほんの小さな塊が残っているがこの程度の量では何の役にもたたない……通常であれば。」

「氷は俺が元に戻すとして後は溶け出した原因か」

そう、幾ら小さくなくても完全に溶けなければ岬影の能力でどうとでもなる。

今は氷の溶けた原因説明が先だ。

かなりの広さがある氷囊全体を探るため再度体を分解する岬影。

そして……

「ーっな!!」

そこで発見したモノに岬影は驚きを現にせざる負えなかった。

永遠亭――八意 永琳の診療室。

唯一強烈な熱気の被害を免れていたこの部屋には現在二人の人影があった。

辺りに置かれたベットには脱水症状を起こし倒れた数匹の妖怪鬼が寝ている。

「うどんげとてゐに薬の材料を買わせに行かせたのは良いけれど、ここから動けないのは問題ね」

眉間に軽くシワを寄せて呟いたのは従者、八意 永琳であり。

「ま、気長に待ちましょう、直に岬影が全て元に直してくれるわ」

呑気に言葉を返したのが主、蓬莱山 輝夜である。

二人が避暑地で片や薬の調合に片や暇を弄ぶのに没頭していると、先ほどの会話で出てきた噂の修理屋がドアを勢いよく開いて現れた。

「永琳いるか?!」

「いるには居るけれど病人が寝てるの音量は控えて」

「悪いがこつちも病人だ、一先ず寝かせてやりたいんだがベットは空いて居るよな？」

忙しく喋り続ける岬影の背中には幼い少女の姿が、服は青くシヨートボブの髪と目は赤い。

なんともチグハグな格好だが問題は唇が真っ青に染まっていること。

「極度の空腹、それと冷え症ね。」

岬影、貴方の能力でどこまで回復させられるかしら」

途方もない年月を生きてきた永琳の確かな観察眼は少女の症状を即座に見抜く。

「残念だがこれは壊れたつつー扱いには出来ねえから俺の能力は圏外だ」

「そう、けれど時間さえあれば命に関わる程の状態ではないわ、輝夜悪いけど……」

「栄養食のB-5番でしょ？」

永琳が頼もうとする前に輝夜は手に持ったチューブを渡す。

呆気にとられた永琳と岬影に輝夜はしてやったりと笑みを浮かべ。

「一体何年永琳の働く姿を見てきたと思っているのよ」

「「異変だ（わ）」「」

「好い加減異変から離れなさい！！」

そう絶叫した。

さて、岬影が氷嚢で発見した少女。
彼女は火前坊かぜんぼう、自らを火で焼いた僧が妖怪となった者だ。
なぜ憎なのに女？とか聞いてはいけない。

どうもあの裂け目に落ちた彼女はまだ飛ぶ事が出来ないほどに幼く、
寒さから身を守る為に氷嚢の氷を片っ端から溶かした。

その結果、パイプからは暖かい地熱の空気のみが伝わって今回の事
件が起こったのだ。

永琳と岬影、それとほんの少し手伝った輝夜の手厚い看護のお陰で
彼女は全快し、今まさに岬影が探したした母親と互いの体を抱擁し
あっている。

「なにはともあれこれで一件落着つてとこか？」

「そうね、氷嚢は元に戻ったしあの子も母親と再開したわ」

二人の姿を見つめる岬影と永琳。

共に親という存在には縁が無く、岬影に至っては記憶の片隅にすら
無い。

――これはこれで楽しい人生なんだが。

因みに彼女らの周りには炎が渦巻いており、常人ならば焼け死ぬ程
の熱波が押し寄せていたが、不思議な事にまるで気にならなかった。

絡人線形店――姫様と氷囊（後書き）

すみませんオリキャラ出さないとか言っときながら出しちゃいました。

セリフ無いしギリギリセーフかな？

絡人線形店――新聞と温もり（前書き）

岬影は結構お人好し……今更ですけどね――

絡人線形店――新聞と温もり

鬱蒼と樹々達が生い茂る森。

こう表現すると化けキノコの群生地帯である魔法の森のように聞こえなくもないがこの森には化けキノコなどいない……代わりに妖怪は出るが。

「……たく何で毎度毎度俺が呼ばれんだよ、他にも適任が居るっつーの……お前とか」

「私じゃどーにもならないからアンタを呼んだんでしょーが」

そんな人里付近の森の上空を愚痴りながら飛んでいるのは絡人線形店、店主岬影であり、その後ろを紫を基調した服を身に纏うツインテールの少女、新聞「かしねんぽう花果子念報」の発行者である鴉天狗のひめかいどう姫海棠はたて が追いかける。

しばらく進み目的の場所を発見した二人は地面へと降り立った。

「私はもう帰るわあいつのあんな姿を見たくないし、だからさっさと元に戻してこれじゃーモチベーションが下がりっぱなしよ」

「分かったやりや良いんだろやりや、本当に仕方ねえな」

言うだけ言っつて颯爽と姿を消したはたて。

その事に関して岬影は何も思わない。

彼女からして見れば原動力の半分を削り取られた様なモノだ、協力

を得られるとは到底思えん。

「さてと、始めるか。」

軽く気を引き締め、視線の先……リアカーに焼き鳥屋の設備を乗つけた「八目鰻屋台」の暖簾を潜り、

「何やってんだよ、このアホ鴉」

文字通り酒に呑まれた友人の頭上へ鉄拳を振り落とした。

天狗という種族は新聞が好きだ。

鴉天狗、木の葉天狗、白狼天狗に大天狗。

厳密に分けると凄まじい事になるので割合するがいずれも新聞好きである事に変わりはない。

報道職を担う鴉天狗は言わずもがな本来、哨戒職、管理職であるはずの白狼天狗や大天狗も新聞を嗜み中には自身の新聞を発行する者までいるのだから凄い話だ。

そして多くの新聞が発行されるとなれば優劣を付けたがるのが天狗の性。

妖怪の山にて毎年行われる新聞大会の歴史は、瓦版大会であった頃から数えると2000年を優に超える。

「うう……どうせ私の新聞なんか……」

「あのなあ文、たかが新聞の大会だろ？そんなんで最下位を取ったぐらいで情けねえぞ」

「連に何が分かるのよ……このバカ人形」

「分からねえし分かりたくもねえな」

……であるからにして、今年度の新聞大会にて堂々の最下位に鈍く輝いた「文々。新聞」の発行者、射命丸 文の心は失意のマリアナ海溝へと沈んでいた。

今まで安心と信頼の低空飛行を続けて来ただけあって相当シヨックを受けたらしい、どれくらいかと言うと普段なら文の新聞に勝つたと喜ぶ筈のはたてが思わず身の心配をする程だ。

「いらつしゃーい岬影ー、でもお酒は射命丸が全部飲んじゃったからもう無いのー、八目の蒲焼きだけでも食べてくかしら？射命丸の頼んだのが余ってるのー」

天狗は総じて酒豪でありそう簡単には酔わない筈なのだが……屋台の酒を全部呑んだのなら納得がいく。

「悪いなミスティア、今日の所はこのアホ鴉を引き取りに来ただけだし又今度出直す、お代はこれで足りるか？」

八目鰻屋台を営む雀妖怪ミスティア・ローレライの申し出を断り、巾着袋から数枚の小銭を取り出しカウンターへと置く。

ミスティアはその額を確かめると。

「足りる足りてるー明日の分の支払いの半分を含めて良いぐらいよー」

歌うように告げる。

何時の間にか明日来る事が決定されていたが、特に問題は無い。誘う当てはいくらでも在る。

「さて、先ずはこいつを持ってくか、おい文早く立てここで寝るな」

「……うるさい」

ー駄々っ子がこいつは。

仕方が無いので背中におぶって連れて行く事にした岬影。

ミスティアに手伝って貰い文の体を持ち上げる。

力の入らない体を動かした為所々服が肌け、やたらと扇情的な瞳と目が合うが同性及び岬影が見てもイラッとするだけである。

因みにその時、岬影の背中にはスレンダーな割に幻想郷の平均胸囲を軽く上回る胸が押し付けられていたのだが今更気にする岬影ではなかった。

翌日、二日酔いという言葉に縁の無い文がスッキリ目を覚ますと、

ここが自宅で無い事に気がつく。

「……ここは絡人繰形店？」

昨夜の朧げな記憶と照らし合わせ状況を把握した文は。

「はあやっちゃったわね、久しぶりに」

後悔の念を含んだ溜息を吐く。

昔、岬影が一度幻想郷を出て旅に行ってしまう前。

あの頃は上手くない事ばかりでその度に岬影へ愚痴を言っていたのだが。

「……が、……は……かな？」

すると聞き覚えのある声が下の階から聞こえてきた。

自分の聞き間違えでなければ……

嫌な予感がし、そつと一階への階段を降り声がハッキリ聞こえる場所まで止まる。

「……なぜ大天狗様がこの店へ？」

そこにいたのは、いつにも増して不機嫌面をした岬影と先ほどの声の主、赤い顔に高い鼻、大柄な体格に巨大な羽団扇。

文の上司の一人である大天狗だ。

「最初に言っておくが俺の答えは変わらねえぞ、何度来ようが文々。新聞以外の新聞を購読する気はねえ」

「そう言わないで下され店主殿、あの様な最弱新聞などと契約している事が知ればこの店の品位と言うモノも落ちてしまう、私としてもこの店とのパイプは喉から手が出るほど価値のあるモノ、考え直して……」

「口説い」

ゾワリ、と嫌な感じのする霊力が場を支配する。
大天狗の表情が固まり。

「し、知りませぬぞ、あの程度の新聞が貴方の価値を下げているのですからな!!」

「それが何の関係があんだよ、俺はあいつが心から新聞を書く限り購読する、一生な」

慌てた様子で捨て台詞を吐き逃げ出した大天狗。
独り言の様に呟く岬影。

けれどその言葉は文の元へとすっかり届いていた。

――自分は何の為に新聞を書いている？

ランキング？順位？それがどうした!!

自分の新聞を楽しみにしてくれている人が居る。

それだけで十分ではないか!!

「……連」

「ん？起きたのか？って文？！」

「まだちょっと二日酔いなよ、だから動かないで」

倒れこむように、座っている岬影の膝へ頭を乗せ腕を腰に回す。

「ー暖かい。」

本当に暖かい温もりが伝わってくる。

なのに何で……

「何で…連は人形なのよ」

「はあ？何だよ急に」

「別に、何でもないわ。」

それより二日酔いの薬は無いの？今日から又取材よ取材！！休んでいる暇なんてどこにもない！！」

「本当に何なんだ！！まあ頑張るってんなら応援ぐらいはしてやるがよ」

なぜか完全復活を遂げた文の様子に困惑する岬影。

その表情に安堵の色が含まれていたのは気のせいではない。

射命丸 文。

幻想郷最速を名乗るこの少女は今日も新聞のネタを求めて大空を飛び回る。

絡人線形店――新聞と温もり（後書き）

自分は素で話す文の方が好きなんですが、皆さんはどちら派ですか？

絡人線形店――寺小屋と相棒（前書き）

前話の明後日の話です。

絡人線形店――寺小屋と相棒

その日の岬影はいつも通りの不機嫌面……の上に貼り付けた様な微笑を浮かべていた。

「本日慧音が…慧音先生の都合の問題で一日だけ教師の役を任された岬影 連だ、呼び方は自由だが（先生）を最後につける事を忘れないように、何か質問は……」

「……はい店長さん！！」「……」

「いや…だから最後に先生をつけ……」

「……はい店長先生！！」「……」

「なぜ店長を付けたが……まあそれでいい」

ここは人間の里、通称……というか略して人里と呼ばれている場所だ。

幻想郷に住まう人間は一部例外を除いてここで暮らしており妖怪の賢者によって安全な生活を約束されている。

もともと、大きな問題があったのは最初の頃だけであって現在は人と妖怪と一緒に居酒屋で騒いだりしているのだが。

因みにその一部例外と言うのは、博麗の巫女であったり普通の魔法使いであったり紅魔館のメイドであったりする。

――やっぱ断つとくべきだったか？

今更ながらに後悔する岬影が視線を窓際に向けると特徴的な帽子と紅白のリボンが目に入る、どうやら逃がしてくれそうにもない。

「ま、今日一日だけだと割り切るしかねえなこりゃ

目の前には期待に目を輝かせている子供達。

窓の外には友人が二人。

前門の虎、後門の狼……と言うには些か迫力に欠けるが岬影を逃がさないのには十分過ぎた。

さて、こうなった経緯を語るには少々時間を戻らなければなるまい。

幻想郷最速の鴉天狗、射命丸 文が名誉挽回汚名返上の為にあちらこちらを飛び回っていた丁度その頃。

昨晚の約束通りミステリア・ローレライが営む「八目鰻屋台」を訪れた岬影の隣には二人分の人影があった。

「……やはり私は教師に向いていないのだろうか」

そんな台詞を何やら深刻そうな表情で漏らしたのは、人里で幻想郷の歴史の編纂作業を行う傍ら寺小屋にて教鞭を執る少女。上白沢慧音である。

席に着くなりそう切り出した彼女の言葉に岬影は。

「妹紅、翻訳を頼む」

「そこで私に振るのかよ、別に良いけどさ」

慧音を挟んで左側に座る白いワイシャツと赤のモンペをサスペンダーで吊った長髪白髪の少女。

蓬萊の人の形、「老いる事も死ぬ事も無い程度の能力」によって永遠を生きる者。

ふじわらの 藤原 妹紅もこうに説明を求める。

因みに彼女：藤原妹紅は、絡人繰形店のお得意様である蓬萊山 輝夜とともに仲が悪い、メツチャ悪い、日常的に殺し合う程に悪い）まあ互いに不老不死なので死にはしないが）。

しかし岬影と仲が悪いかと聞かれれば、決してそうではなく寧ろ友人として認めている。

補足すると幻想郷内で、紫、黒峯、幽々子、文について付き合いが長いのが妹紅だ……この話をする^と決まって輝夜の機嫌が悪くなるのだが……なぜだ？

「うーんそうだな、掻い摘んで説明するなら自信損失ってやつ？」

「掻い摘み過ぎだ、何でまた今更こんな事を言い出してんだよって聞いたんだが」

「今更って何気に酷いな、確かに的を得ているけど」

「い、今更?!つまり最初から私は教師になるべきではなかったと

？」

二人の会話に挟まれていた慧音は無視できない言葉にショックを受けた様に顔を起こす。

すると

「別にそこまでは言わねえがな、お前の授業が子供受けするかと聞かれりゃ満場一致で首が横に振られるぞ」

「子供相手に教えるには頭の硬い授業の組み立てだよな」

「何となくだけどー二人の言ってる事は分かるわー」

岬影と妹紅はおるか場外よりミスティアからもダメ出しを食らいガツクリ、と頂垂れる。

「そうだな、これならいつそのこと今後も妹紅に先生をやってもらった方が子供達も喜ぶかもしれん」

「何でそこで妹紅が出てく……ん？あぁそう言う事か」

納得したように岬影は頷く。

妹紅が否定しない所を見ると、推測は事実らしい。

「今の反応で分かったと思うけど一応説明しとくか、これは一昨日の話なんだけど……」

一昨日の朝の事だ。

一晩中輝夜と弾幕ごっこと言う名の殺し合いをしていた妹紅は自宅にて惰眠を貪っていた。

するとそこに顔色の悪い慧音が訪ねて来て…曰く風邪をひいたとかあらゆる病を退ける白澤の力を持つ筈の彼女に一体何が起こったのだろうか？

そして慧音が妹紅にした頼み事とは寺子屋での代行教師。

本当は寝ていたかったのだが、妹紅は友人の頼みを断る薄情な女ではない。

快く引き受けその日の授業を行った……ここまでは良い。

問題は次の日、つまり昨日の話になる。

復調した慧音が寺子屋に向かい教室に入ると。

「妹紅先生じゃないのー？」

「妹紅先生は来ないんですか？」

「俺妹紅先生の授業が受けない！！」

「またお前か、早くもこたんを出せ！！」

文字通りふるもっこにされた。

念の為書き記すが最後の一人は数日間頭痛に悩まされた後正気に戻ったらしい。

「……で今に至ると」

「そーゆうこと、私は気にしなくてもいいって言ったんだけどな」

この店には落ち込んだ人…もとい人妖を誘い出す程度の能力でも宿っているのだろうか？

「それで岬影に提案なんだけど、頼んで良いか？」

「お手柔らかに頼むぜ”相棒”」

岬影の言葉に懐かしそうな笑みを浮かべる妹紅。

「何年前の呼び名だよそれ」

「俺が幻想郷を出て暫く立ってからだから…ざっと700年ぐらいか？」

「あの頃は妖怪がそこら中にいたからなあ」

そこからは岬影と妹紅、二人で妖怪退治をしながら旅をしていた頃の話が続く。

そして二人が昔話に花を咲かせているその時。

「ううもう飲めん」

一人で酒を飲みほした慧音は早々とダウンしていた。

「……ここまでが慧音先生から頼まれていた範囲だ、もし聞きたい事があれば後日慧音先生に聞くといい」

慧音に渡されていた資料分の授業を、要点を纏めることで通常の半分程度で済ませた岬影は教壇に手を着き生徒達を眺める。

「ここからは少しこの場所、皆の通う寺子屋について話したいと思う」

生徒達の視線を集めた岬影は妹紅と打ち合わせた通りに言葉を紡ぎ。

「皆は……慧音先生の事が好きか？」

そう、尋ねた。

窓の向こうが若干騒がしくなったが妹紅が何とかするだろうから無視。

「うん!!」

すぐさま帰って来る生徒全員分の返事。

岬影は満足そうに頷くと。

「そいつは良い事だ、誰だって嫌いな奴の授業を受けたいとは思わないしな、じゃ質問を変えるぞ、皆：慧音の授業は好きか？」

今度は答えが返ってこない。

まあそれを見越した上で質問した訳なのだが。

「実を言つとな、俺も慧音先生の授業が良い授業だとは思っていない……宿題の範囲も少しおかしし」

しかし、だ。

岬影は気まずそうな子供達に向かって教えていく。

「お前達はもっとこうして欲しい、とか言ってみた事はあるか？こ
うだったら楽しいとか、言ってみたか？」

横に振られる生徒分の首。

「ま、無くて当然先生に向かってそんな事は言い難いだろう、けどな、
別に遠慮する必要は無い。

誰だって得意な事もあれば苦手な事もある、慧音先生の事が好きなら一緒に寺子屋をもっと楽しい場所に変えられる、そうだろう？」

今度はちゃんと返事が返って来た。

とても大きな、純粹に透き通った声で、だ。

実際の所、昨日の話を子供達がきちんと理解していたかは正直言っ
て怪しい。

と言っても伝えたかった事は恐らく分かってくれた筈だ、子供達も
…そして慧音も。

――まあ後は慧音が自分で何とかするだろう。

そう思い文々。新聞を手にした岬影はいつも通り、絡人繰形店を開店させるのであった。

数時間後普段の五倍増して嬉しそうな顔をした慧音が岬影を昼食誘うのだが、それは又別の話だ。

絡人線形店――寺小屋と相棒（後書き）

頑張れ慧音先生！！シリーズ第一話（嘘）でした。

絡人繰形店――杯と姐さん（前書き）

姐さんと言えば？

絡人繰形店――杯と姐さん

「これは…参ったね、一体全体どうしようか」

そんな言葉を零したのは大柄な体格に見事な一本角を生やした鬼。語られる怪力乱神、山の四天王が一人。星熊ほしくま 勇儀ゆうぎだ。

「アツハツハー、いやあゴメンゴメンにしても見事に割れたねえ」

「ア・ン・タのせいだろ!!!」

ゴン!!と良い音をたてて握り拳が落とされた。

「怪力乱神を持つ程度の能力」によって只でさえ常識外れな腕力が強化され拳骨を入れられた伊吹いぶき 萃香すいかは頭を抑えて悶絶している。

「どうしてくれるんだい私の杯、そう簡単に直せる安物とは訳が違
うってのこれ」

はあ、と溜息を吐く彼女の手にあるのはかなり大きめの杯……の残骸である。

中心からやや左にズレた位置に空いた穴。

そこから全体にヒビが入っており酷い有様だ。

彼女が腕試しをする際に酒を入れる杯なのだが、長年使っていれば当然愛着も湧く。

そのせいか豪放磊落な性格の勇儀も些か不機嫌な顔をしていた。

すると何時の間に復活した萃香は酒臭い息を吐き。

「まあそのくらいならすぐ直せるから大丈夫だって」

「壊した張本人が何を又ケ又ケと……」

とはいえ、直せるという言葉は聞き逃せない。

その事を尋ねると、地上の店に腕の良い修理屋がいるとか。

「その店は地上にあるからね、念の為私もついてくよ」

「それは良いけど本当に直るんだろうね」

問題な——い——い——などと声を上げる萃香を見て、彼女がそこまで信頼する修理屋に俄然興味を持つ勇儀であった。

「だあ——からあ——何で元に戻してくんないのよ——!」

「お前みたいなガキの遊びに付き合ってる暇はねえんだよ、大体なんだ割れた氷漬け蛙を元に戻せって、修理屋に頼む事じゃねえだろが」

萃香の案内で絡人繰形店にやって来た勇儀が見たのは、黒い箱を前に真剣な表情で座る一人の男と真っ二つに割れた氷漬け蛙を持つ氷精の姿。

どうやら氷精が一方的に突っかかっているのを男が流しているらし

い。

すると青と白のワンピースを着た青髪の氷精・チルノは痺れを切らしたようだ。

「それなら弾幕ごっこであたいが勝つたらこの蛙を治すつて事でどう?。」

だが断る……衝動的にそう答えようとした黒髪の男……もとい岬影だが少し考えると。

「そんな時間はねえ、それで提案なんだがお前が霧の湖でもう一匹蛙を捕まえて来たらその蛙を元に戻してやるう、どうだ?。」

「ふんその程度あたいの手に掛ければアツと言う間よ!! あたいつたら最強ね!。」

言い終るなり店を飛び出していくチルノ。

——これで片付いたな。

彼女は単に遊び道具の蛙が欲しかったただけであり、自分でもう一匹捕まえればここに来る事もあるまい。

「さてと、厄介払いも済んだしこの”てれび”とやらを使えるようにするか」

前に一度守矢神社で見たてれびに比べると厚みもあるが、霖之助の能力はこれを”てれび”用途は画像を映す、と判断したのだから間違いない。

「先ずは一度分解して…にとりの奴に複製を依頼し…ん？萃香？
いつ入って来たんだお前、隣のは地底の鬼仲間か？」

「あの氷精を上手い事出し抜いた辺りかな、岬影はその黒い箱に夢
中で眼中に入ってたなかったようだけど」

「……そりゃ悪かったな」

呆れ顔の萃香に一応詫びを入れる岬影。

すると彼女の隣に立ってた勇儀は試すように名乗る。

「あんたが萃香の言ってた修理屋かい？私は星熊 勇儀、山の四天王の一人と言えば分かるだろう？」

そこら辺の妖怪であれば、思わず逃げ出すレベルの威圧感を言葉に乗せる。

「…私の杯を直す奴が根性無しじゃ、つまらないしね。」

これで怯えるような小物なら諦めて新しい杯を手に入れよう、そう
思ってたの言葉だったのだが。

対する岬影は逆に値踏みする様な顔で言葉を返す。

「なるほど、お前が星熊童子と言う訳か」

俺はここ総合修理屋「絡人線形店」の店主、岬影 連だ修理の依頼
か？」

一ミリも表情を崩さぬ岬影の態度に勇儀は嬉しそうな声で。

「へえアンタ強いんだね、いいよ気に入った”コイツ”さえ壊れてなきや今すぐ腕試しをしたいとこだ」

言いながら手にした杯をカウンターの上へと置く。

「これは……御神木で作った杯か？この上なく罰当たりだなおい」

「誤解しないで欲しいなそいつぁ正当な手段で手に入れたものさ、いやあの神は強かった」

「――余計に罰当たるおが。」

本音を呑み込み手に取った杯を詳しく見る。

本来御神木と言うものは神の依り代として扱われ自然を象徴するものとしても信仰を集めていた物だ。

故に樹齡が三桁後半に届くような御神木には少なからず神力が宿る。

つまり、何が言いたいのかと言うと。

「そう簡単に壊れるような物じゃねえだろう」

「その通りさ、萃香があんな事をしなけりゃね」

二人分の視線に萃香は苦笑を浮かべる。

「あの時は酔っぱらってて照準がズレたんだよ、私も勇儀の杯の真上に現れるつもりなんてなかったし」

「お前の場合は常に酔っぱらってんだろおが」

「本当だよ全くそれで岬影だったね。直せそうかい？」

流石にここまでボロボロだと無理かねえ、そう思い尋ねる勇儀。最初から直せないと諦めてた物だし、無理な物は無理だと割り切るのが鬼だ。

「ん？ああいや杯ならもう直ってるぞ、ほら」

「え？」

さも当たり前な顔をした岬影が持っているのは、見間違え様のない自分の杯である。

勇儀が目を離れたのはほんの数秒だった筈のだが……いや今はそんな事はどうでもいい。

「こりや大したもんだ、本当に気に入ったよ！！代金の事なんだが
良い酒が入っててね今から一緒に飲もうじゃないか」

「あ？いや俺は別に……」

「遠慮しなくて良いよ、ほら行こう！！」

強引と言う言葉を通り越して岬影を抱え上げる勇儀。

「――攫われる？！」

すかさず体をバラして脱出しようとする岬影……だが。

「ツツ！！萃香てめえ！！」

「逃がさないよ岬影、たまには付き合っつて貰わなきゃ」

彼女の能力によって強制的に萃められ逃げられない。

そんな訳で本日の絡人線形店は店主不在により早めの閉店を余儀なくされた。

絡人繰形店――杯と姐さん（後書き）

鬼に気に入られるとこつこついう事になります。
皆さんも注意して下さい。

絡人線形店――誕生祭と守る力（前書き）

何と言うか……衝動的に書き上げた話です。
反省も後悔もしていません。
いや、にしてもあの動画は神だった。

絡人繰形店――誕生祭と守る力

その日、絡人繰形店の周りに張られた結界の中には派手に弾幕を撒き散らす二つの影があった。

……正確に言うとな片方が撒き散らし、もう片方がひたすらそれを避け、反らし、相殺させているのだが。

「次いつくよー禁弾」スターボウブレイク」！！」

薄い金色の髪をサイドテールでまとめ、真紅を基調とした半袖とミニスカートに身を包んだ紅眼の少女、フランドール・スカーレットがその手に持った魔杖を振るう。

すると延長線上に閃光が走り、その軌跡から七色の虹弾が現れ標的に向かって飛来した。

「壊さないイメージはできてるか？絡繰「儀右衛門の底力」！！」

岬影のスペルカードの宣言と共に黒色の大玉が打ち出され。

「操弾の幕」

言葉と同時に岬影は指を怪奇な且つ複雑に動かす。

そして動きに連動した大玉と虹弾がぶつかり合い、衝撃を散らして消えたていった。

それを見たフランドールは楽しそうに。

「うわぁ岬影すっごいね、それじゃーこれならどつ？！秘弾」そして誰もいなくなるか？」

刹那、フランドールの姿が消えた。

否、魔力で体を覆い瞑ませているだけだ。

「ってもこれじゃ消えたのと変わらねえなつと！！」

青白い弾幕が岬影を追いかけその道筋から新たな弾幕が生まれる。広範囲に散らばってしまう前に岬影は親玉を壊そうとするが。

「ツツツうお！！！マジか」

周りを囲む様に創り出されたのは弾幕の檻。形を崩しながらも絡めとるかの如く岬影に迫りくる。

「これならいけるか？鐘符「トライデントリバー」！！！」

ズツドドドツツ！！

響き渡る炸裂音、巨大な三又の鉾が休む間もなく射出され片っ端から青の、黄色の、緑の、そして赤の弾幕と相殺しあい……

「隙あり！！これで終わりよ岬影！！！」

ーツツ！！何時の間に？！しかもありや不味い！！

弾幕の影から飛び出したフランドール、手にした”二本の魔杖”の照準が岬影を捉えた。

「双魔「世界を終わらせる杖」！！！」

ゴオオツツッ！！、と吹き荒れる熱風を生み出したのは二本の紅い極太レーザー。
寸分たがわずに突き進む一撃に岬影も最後のスペルカードを宣言する。

「絡人繰形「操られし者の奮起」！！」

フランドールのスペカをレーザーとするならこちらはボール、但し途方もなく巨大で暗く黒く近付く全てを押し潰すボールだ。

紅き奔流と黒き重圧。

純粹な力のぶつかり合いが起こり……直後、形容し難いまでの莫大な光が結界内を埋め尽くした。

そして……戦場に最後まで立っていた者の眼は………紅い。

「不合格だな」

「えー！！なんでなの？私が勝つたのに」

不満げな顔をしたフランドールに岬影は断固とした様子で告げる。

「勝ち負けの問題じゃねえって最初に言っただろ？まだまだ力の制御

が甘いし無駄も多い、そして何より……」

仁王立ちの岬影はビツ！と効果音が付けたくなる勢いでフランドールの魔杖を指差すと。

「新しいスペルカードを考える暇があったら少しは自主練をしようとか思わないのか?!」

「だって一本を二本にしたらもつと強くなると思ったんだもん」

「これ以上火力を上げてどうすんだ!!こんなんじゃいつまで経ってもレミリアに認めて貰えねえぞ?」

一方的に捲し立てた岬影。

その頃フランドールは最後の言葉が効いたのかシユンとしている。

「ー言い過ぎたか?」

そう思う岬影だがフランドールのためにもここは心を鬼にする必要があった。

二人が弾幕ごっこをしていた理由。

その発端は数日前に遡る。

「誕生祭?」

「ええ、我々紅魔館の面々を初めとし永遠亭や白玉楼の方々も参加の承諾を既に得ていますわ、その他は都合が合わなかった様ですが」
店にやって来た完全で瀟洒な従者、十六夜 咲夜は開口一番にそう切り出した。

何でも紅魔館の主である吸血鬼、レミリア・スカーレットの誕生祭を博麗神社にて行うらしい。
誕生パーティーと呼ばれるのは子供っぽいからか？

「にしても博麗神社……か、よく霊夢が首を縦に振ったな」

「あら？あの巫女は割と直ぐに買しゅ……許可を出しましたわ」

「――あの堕巫女は何をやってたんだ？」

にわかに幻想郷の行く末を心配してしまう岬影。

まあ何はともあれ誕生祭だ。

せっかく新しい顧客からの招待なのだし断る理由も特に無い。

「分かったこの店の店主としてありがたく参加させて貰おう。

先に言うておくがパーティーの間中フランのお守りは勘弁だぜ？」

フラン……という言葉に珍しく咲夜は口籠り。

「その妹様の件について私から個人的に依頼したいことがあるので
す」

それは紅魔館のメイド……ではなく十六夜 咲夜という一人の人間としての願いであった。

まあ身も蓋も無く言ってしまえば、その依頼というのがフランドールの力の制御であり、翌日咲夜と共にやって来たフランドールと早速弾幕ごっこをしていた……という訳だ。

”紅魔館の主”としてレミリアはフランドールに、それを達成出来なければ連れて行くことはないと言ったらしい。

「ねえ岬影？」

「ん？何だ？」

しよぼくれていたフランドールが岬影に問う。

「何で…何で皆壊れちゃうんだろうね、ずっと壊れないで…そこにいれば良いのにさ」

ありとあらゆるものを破壊する程度の能力。

フランドールの幼く力を込めただけで折れてしまいそんな細い腕は、どんな兵器よりも恐ろしく禍々しい。

「そうだな、皆ずっとそこに居られりゃ最高かもしれねえ」

そんな岬影の脳裏に焼き付いているのは遙か昔に聞いた言葉。

『どうして死という物があるの？そんな物さえ無ければ私は人で居られた、ずっと……ずっと貴方と一緒に居られたのに！！』

「けどよ、誰もいなくならねえそんな世界があつたとしても、その世界は凍ってる停まっちゃうって動かねえツマらねえよな？そんなの」

「でも、それなら皆ずっと一緒にいられるよ、私もお姉様とお出かけしても大丈夫になるし、それに……」

「フラン」

突然自分の頭に乗せられた手に戸惑うフランドール。

495年も生きてきた彼女だが……

——誰かに撫でて貰うなんて初めてかも

「お前が本気で誰も壊したくないと願うなら、力を完璧に制御して、コントロールも身につけて、それで大切な人を守る様になれ」

照れ臭いのか視線を僅かに反らす岬影。

対するフランドールは呆気に取られた表情で。

「私の力は壊す力、誰かを守るなんて出来ないよ。

きつと一緒に壊しちゃう守りたい物ごと全部跡形も無く」

「だからこその特訓だろおが、お前の力が本物になれば何だって壊せるし……誰だって守れるさ、俺が保証する」

自身たつぷりに似合わない笑みを浮かべる岬影に、何だか悩んでい

るのが馬鹿らしくなってきたフランドール。

「私に何が出来るかは…まだ分からないけど

「そう…だね、よおし！！岬影、もう一回やる！！次はもっと弱く撃つからさ」

「あいよ、後一週間だ！！それまでに何がなんでも常時非殺傷の弾幕を撃てるようにするぞ」

「もし、もし出来ることなら守れるようになりたい、お姉様も、咲夜も、美鈴も、パチエも、こゑも、紅魔館の皆を…そして

「あのね岬影！！」

「ん？」

「ありがとう、私の友達になってくれて」

「そして…岬影を、私の大事な友達を守りたい。」

一週間と一日後…岬影が手にした文々。新聞の大見出しを飾る写真の中央には、ニヤニヤ顔を隠そうとして見事に失敗している紅魔館の主と…その隣で弾ける様な笑顔を浮かべるフランドール・スカーレットの姿がそこにあった。

絡人線形店――誕生祭と守る力（後書き）

自分の頭の中ではフラン、常時カリスマ全開モードですが何か？

絡人繰形店――厄神様と流し雛（前書き）

今回は絵師泣かせの方。

絡人線形店――厄神様と流し雛

ある日、いつもの様に店番をしていた岬影の元へ珍客が訪れた。

「貴方、厄いわね」

店に入ってきて五秒と待たずに告げられた第一声がこれだ。

――面倒事の予感しかしねえな

即座に判断した岬影、そしてこう言った予感は大抵当たる物である。しかし、相手が例え何者であろうと客である限り平等に扱うのがここ、絡人線形店の在り方だ。

補足すると代金を払おうともしない客以外にカテゴライズされる輩に関しては、どれだけ不真面目な対応をしても構わない。と言う事になっている。

「もう一度言うわ、貴方、厄いわね」

何時の間に近づいたのか？カウンターから身を乗り出し大真面目な顔で岬影を覗き込む少女。その間は僅か数センチなのだが少女は気付かない。

変わった服装の者が多い幻想郷の中でも群を抜いて派手な格好だ。見たことの無い型のロングドレス、濃い緑髪は顔の下で白い縁取りの赤いリボンに纏められており、同色のリボンが頭頂で結ばれた後足元まで垂らされている。

と言っても岬影は見た目で相手を判断することは無い。
判断材料はもっぱら内面であり、目の前の少女からは二種類の力を
感じ取る事ができた。

「ー神力と……これは…厄？」

となるとこの少女は……

「……厄神様か？」

すると少女は初めて自分の格好に気がついたようで、身を引き咳払いをする。

「名乗り忘れたわね私は鍵山かぎやま 雛ひな、察しの通り厄神よ、貴方は？」

対する岬影も右手を胸に添え。

「俺の名は岬影 連、ここ総合修理屋「絡人線形店」の店主をやつ
てる、厄神様がこの店に何のようなので？」

その言葉で思い出した様に雛は店の中を一瞥した後話し出す。

「私は厄を集め溜め込む者、久しぶりに山を降りて驚いたわ。
こんなところに大量の厄が集約されているなんて」

実は雛、これまでも妖怪の山を降りては人里へ行き厄を集めていた
のだが、人目を避ける為にこの道を使った事がなかったのだ。

今日、偶然通りがかった雛は驚愕した。

「――な、何なのよこの厄は!？」

厄は余程密度が高くならなければ目視する事は出来ない。

けれど厄を集める神たる雛の眼は岬影を覆い尽くさんばかりの厄をしつかりと確認していた。

どれくらいかと言うと。

「貴方、よく今まで生きていられたわね。」

正直これだけの厄を持っていて五体満足だなんて信じられない話よ」

「そりゃ一応不老不死だからな、何度か死にかけたがよ」

不老不死の者が死にかけるとは、厄の恐ろしさを物語っている。

とはいえ。

「でもまあ安心して頂戴、貴方の厄を私が全て集めてあげるから」

微笑みを湛える雛を見て岬影は少々思案し始めた。

「――厄神様か。」

幻想郷における厄神というのは、一般に流し雛が神格化した物と決まっている。

人間の厄を肩代わりし流水によってその身を清めるといふ流し雛。

我が身が神となった今でも人間の厄を集め続けるとは見上げた神靈である。

「そうか…：そうだなお願いしよう、宜しく雛様」

「ひ、雛様？」

初めての呼ばれ方に戸惑うに雛に岬影は。

「俺は神格の在る者には”様”を付けるんだ、嫌ならやめるが？」

「い、いえ別に嫌な訳ではないから」

厄神は厄を溜め込むという性質上、近付き難い空気…：…もとい厄を纏っている。

単に集めている雛自身には影響を及ぼさない厄だが、彼女に近寄る者は人間だろうと妖怪だろうと問答無用で不幸になる為非常に危険だ…：…”厄”は。

あくまで危険なのは厄であり雛本人ではない。

だが人間の眼には両者はセットに見えるらしく彼女が人目につかないルートで人里に行くのもそれが理由だ。

友人として付き合ってくれる妖怪はいても、厄神としての自分に敬意を示す存在と雛は会ったことがない。

ちよつと、というかなかなり嬉しかったりする。

ー何というか…：…むず痒いわね

しかしそれは決して不快感を感じさせる類の物ではなく。

「それでは、始めましょう」

「ああ、頼む」

どことなく心地良い、そんな物だ。

クルクル回ってあらかた厄を集めた雛は、また厄が集まった頃に来るわね、と言い残し帰っていった。

なぜか嬉しそうな顔をしていた理由は岬影には一生分かるまい。

そんな感じで絡人繰形店はその日の営業を終了した。

……というのが昨日の話であり。

「何でここにいるんだ？」

「何でって厄が集まった頃に来るって言ったじゃない」

今現在、岬影の隣にはちゃっかりカウンターに居座る鍵山 雛がいる。

「俺の記憶が正けりゃ昨日厄払いを済ませたばかりの筈なんだが」

「私だって一晩でこんなに厄を集めるとは思ってたわよ、貴

方って本当に厄いわね」

しれつと言い切る厄神様に思わず内心で溜息を吐く。

ちつともありがたくない話だ。

因みにその原因が岬影の能力にあることには誰も気づけない。

「ーまあ今日は誰も来そうにねえし別に良いか。

仮に来たところでこの店を訪れる連中は多少の厄ではビクともしないだろうから問題ない。

「でも大丈夫よ、私は何回でも何度でも厄を集めに来るから」

「そいつはどーも、お茶でも飲んでくか？ 雛様」

「頂くわ」

優雅に微笑む雛に背を向け、家事場へと向かう岬影であった。

その日以降、週に一度雛が岬影の元を訪れるようになり偶然出くわしたキサラと一悶着起こすのだが、それはまた別の話だ。

絡人繰形店――厄神様と流し雛（後書き）

岬影は案外”神”を大事にします。

絡人線形店――稗田家と封書（前書き）

Mr・シリアスが通りまーす!!

絡人繰形店――稗田家と封書

どうも最近、絡人繰形店の……というか岬影の悪評を広めている輩がいるらしい。

具体例を並べると。

曰く、店員に対してロクに給料も払わずに扱き使っている、だとか。曰く、四季のフラワーマスターと結託し人里を襲うつもり、だとか。曰く、『封力異変』の真の首謀者はあの修理屋の店主である、だとか。

根も葉もない……とは言い切れない辺りからして素人の仕業とは思えない、と言うのが幻想郷内でも古い歴史を誇る名家、稗田家の現当主である少女。

幻想郷の記憶にして九代目阿礼乙女、ひえだの稗田 あきゆう阿求の意見であった。

いつになく真剣な表情で語る阿求。

けれども岬影は何処に吹く風といった調子で。

「別にほっときゃ良いんじゃないかねえのか？」

岬影からして見れば一々気にする話ではない。

確かに連華に給料を払った事はないが金銭の管理は連華に任せているし、幽香が誰かと組むなどあり得ない。

――つーかあの異変の首謀者が俺ってどう考えたらそうなんだよ

「少しは危機感を持ってください、今はまだ噂程度で済んでいます

が今後ともその状態が続くとも限りません」

稗田家専属の陰陽師が岬影の元を訪れたのが約半刻前。

身体の弱い彼女は仮に護衛がいたとしても来るのが難しい為、岬影が稗田家の屋敷を訪ねたという訳だ。

「そもそも、これまで誰一人としてその様な悪評を流す者が居なかったと言つのに、噂は急速に広まっています。それこそ異常とも言える速さで」

「ーまあ大半の住民たちは真に受けていないみたいですが。」

稗田家には到底及ばないが200年も昔から営業している店だ、大抵は笑い飛ばしてそこで終わりである。

しかしそうでない者も少なからず居るのもまた事実。

後半の言葉を伏せたのはこのズボラな店主に危機感を抱かせる為、放っておくとこの件が火種となつて妙な対立が起きかねない。

「けどよ阿余……つと阿求、俺や連華が躍起になつて否定したところで余計に怪しまれるだけだと思つんだが」

岬影の意見は最もだ。

連華はまだしも滅多に人里へ顔を出さない岬影が行けば、火に油を注ぐ事となる。

無論阿求とてそんな事は百も承知、ここに岬影を呼び出したのは別の理由があるからだ。

「ええ、貴方がそういつた行動が苦手なのはよく分かっていますよ……寧ろ全く期待していません事態がややこしくなるだけです」

「ハッキリ言いやがったなこの野郎、いやまあ事実なんだがよ」

ズバズバと言つてのける小柄な少女に岬影はウンザリとした顔を隠そうともしない。

「ですから岬影、この件に関して貴方達は余計な真似をせずに私と慧音さんに任せて下さい」

どうやら何度転生してもこの毒舌に変わりはないらしい。

「阿余の奴は同じ血筋とは思えない程に大人しかったんだがな

となると、阿求は一体何の様で自分を呼び出したのだろう、これならわざわざここに来る必要は無い筈だ。

そんな岬影の視線を察したのか、徐に懐から一便の封書を取り出す阿求。

「一見単なる古い封書に見えるが、岬影の”物を見る眼”はそれが中国……当時の南宋から製紙技術が伝わって間もない時代の物だと告げている。」

「……こいつは……まさか

「予想は……ついていると思います」

普段ならば岬影の心を抉る言葉探しに余念が無い筈の阿求が声のト

ーンを落し口を閉じた。

この封書にはそれだけのモノが込められている。

沈黙…

やがて決心したかの様に阿求が口を開く。

「私の五代前…つまり四代目阿礼乙女である稗田ひえだの阿余あよより預かった封書です、この年、この月、この日の貴方に渡すようにと稗田家にて保管していました、当然未開封誰も封を解いてはいない」

そう言っつて差し出された封書を岬影はゆっくりとした動作で受け取り。

「……感謝する」

一言だけ述べた……他に伝えることは無い。

阿求もそれが分かっているからこそ、何も言わずに一礼し部屋を後にしたのだろう。

「阿余……」

稗田 阿余……それはかつて岬影と共に同じ夢を見た少女の名であった。

店に帰るなり連華に、誰かが来ても俺は留守だと答えるよう命じ自室に入る岬影。

手に持った封書はまるで傷んでない。

800年もこの状態で保存することが出来るとは流石稗田家だ。

――どーすつかねえ、この封書

どうするも何も読む以外に選択肢は無い筈だが…

岬影は中に書いてある文章を読むのが躊躇っていた。

その訳を知るのは今や岬影只一人。

もう一人は転生を続け、違う意味で生き続けている。

稗田家は何も莫大な戦力を有してなどいない。

だがあの家は幻想郷に無くてはならない存在だ。

正確に言つと百数十年単位で産まれる御阿礼の子が、なのだが。

彼等、そして彼女等は初代稗田家当主である稗田 阿礼の生まれ変わりにして稗田家に代々伝わる『幻想郷縁起』の編纂者だ。

転生の秘術によって幻想郷縁起に関する記憶を受け継ぎ、僅か三十年余りの人生の死期が迫る何年も前から準備を行い死後は次の肉体が用意されるまでの間を閻魔様の元で働く。

――何て酷い人生なのだろう

そう思った過去の自分を思い切り殴り殺してやりたい。

岬影の後悔はそこまで深かった。

だが……

――読むしかねえよな、あいつのためにも

意を決して、岬影は封書の封に手をかける……そして。

岬影が初めて幻想郷の大地を踏んだのは今から約800年前。
世が鎌倉と呼称されていた頃の話である。

もっともその当時全国を旅して回っていた岬影が、前々から顔を出すよう紫に言伝えられていたからなのだが。

なので岬影は適当に回って直ぐに旅立つつもりであった。

そんな時だ。

岬影が彼女……稗田 阿余と出会ったのは。

生まれつき身体が丈夫で無いのは他の御阿礼の子も同様だが、彼女は足を動かすことが出来ず河童の製作した移動補助具を常に使用していた。

そんな彼女の周りには何時も護衛の陰陽師の姿。

満足に屋敷を出ることも叶わぬその生活は正に籠の中の鳥。

だがその日。

幻想郷縁起執筆のため護衛と共に森を歩んでいた阿余の前に現れた妖怪は陰陽師の実力を遥かに超えていた。

当然のように食い荒らされる護衛達。

一人残された彼女に襲いかかった妖怪の牙は……

横槍に撃ち込まれた特大の霊弾によって本体ごと塵とかし、気がつく和阿余の傍には男の姿が。

男はただ一言。

――怪我はねえか？

この出会い以来、岬影と阿余の間には奇妙な信頼関係が生まれる事となる。

岬影は幻想郷を案内してくれる阿余をありがたく思い、阿余はやって来る妖怪を片っ端から薙ぎ倒す岬影を必要としていた。

思えば年頃の女性であった阿余が岬影に惚れるのに余り時間はかからなかったのは必然だったのだろう。

ある日、決心をした阿余は岬影にこう言う。

――岬影、貴方が好きです。

対する岬影は困った様に微笑むと。

――気持ちだけ、受け取っとくぜ。

俺にはもう誰も愛せない、愛しちゃいけないんだ

けれど阿余はそう簡単には引き下がらなかった。

「ならば私に残された十数年の人生を、共に過ごしてはくれませんか？」

驚いたのは岬影だ。

彼女の役割については聞いていたものの、寿命が常人の半分以下しかないとは聞いていない。

「お前と過ごすことは出来ねえがお前の夢を叶える事なら出来る、そんな人の人生を蝕む本の編纂なんか辞めちまえ、幻想郷の外を見たいんだ……」

岬影の言葉は最後まで続くことなく、阿余の平手打ちによって遮られた。

彼女にとって幻想郷縁起の編纂は生き甲斐だ、途中で投げ出すなどあつてはならない。

今思い出すとそれが最初で最後の意見の食い違い……もとい喧嘩であつたような気がする。

阿余は幻想郷縁起を編纂すると言って幻想郷に残り、阿余の人生を不幸だと決めつけた大馬鹿野郎は幻想郷を去りその後600年戻る事はなかった。

「は？」

封書の中身を見た岬影の第一声はやけに惚けた声であった、なぜなら……

――白紙が一枚だけ？……いやこれは

中に入っていたのは茶色の繊維質の荒い紙が一枚のみ、だが岬影はその内部に隠されたモノの正体に気がつき……絶句した。

「お久しぶりですね、岬影」

きめ細やかな薄紫色の髪、同色の瞳。

見間違えよりの無いその姿は……800年前とまるで変わっていない。

「……阿余？お前どうやって」

彼女は確かに生まれ変わった筈だ。

魂の断片を封入して未来に残すなど出来る訳が……

「ええ、まあ私とて苦労しましたよ当時の閻魔様と数十年間交渉に交渉を重ね、数分の時間を授かったのですから」

渡す時が指定されていたのはこのためか。

「……たったの数分か、お前には伝えたい言葉が沢山あったんだがな」

――なにを、なにを伝えればいい？謝罪の言葉か？感謝の言葉か？

一体、一体何を？！

表面上は冷静を取り繕っているが、阿余は笑みを浮かべると。

「ありがとう、岬影それとごめんなさい」

取り繕うのはもう、限界だった。

800年間溜め込んできた物が身体の中を駆け巡る。

「…何を言っていやがる、どうやってたらそんな言葉が出てくんだよ
！！ありがとう、ってのはこっちの台詞だ！！ごめんなさい、って
のも俺の台詞だろ！！」

――なのに何でだ？！

彼女の手を握ろうとした岬影の手が空を握る。

「私は本当は貴方と生きたかった、何処までも行って見たかった、
私は貴方を選べなかった、後悔してます心から」

――違う、俺が聞きたいのはそんな言葉じゃねえ

「結局、岬影と幻想郷縁起を天秤にかけてしまった」

――違う、俺が見たいのはそんな顔じゃねえ

「あの時、私が岬影を選んでさえいれば……」

「違う！――！」

気づけば言葉が飛び出していた。
まるで最初から決まっていたかのように口が動く。

「お前は正しい道を選んだんだ、お前の人生を勝手に不幸だと決めつけた俺の事なんか気にする必要は全くねえんだよ、頼むから後悔してるなんて言うな、そんな顔を見せないでくれ」

「……みさ、かげ」

岬影は人形、今の阿余は残留思念。

互いに涙を流す事はない。

だが、仮に涙を流せたとすればかれらはきつとこの部屋の床は濡れていた筈だ。

阿余の身体が半透明から更に薄くなって行く。

そんな中、おそらく次の言葉が最後になると悟った阿余は。

「岬影、やっぱり私は貴方を愛してます」

「俺もお前を最高の親友だと思っているぜ」

最後に見えた阿余の顔にあったのは、偽りの無いただ真っ直ぐな、真っ直ぐな笑みであった。

その後再び稗田家を訪れると、何が書いてあったのか？と阿求に詰

め寄せられた岬影だったが。

――教えたら六代は扱き使われそうだけ。

そう思い黙秘を貫き通した。

因みに忘れていてもいいが、例の悪評騒ぎは割と素早く解決した。

満月が近かった事もあり、白澤モードとなった慧音に隠し事を出来る奴など紫と黒峯ぐらいの者だ。

犯人は以前岬影の元にやってきた大天狗。

どうやらあの時の復讐とばかりに風評を操ったらしい。

結局、その大天狗は偶然（笑）出くわした風見・幽香の手によって山の木屑となった。

出汁に使われた事に対して少なからず腹を立てていたのだろう。

そういう訳で、今日も総合修理屋・絡人繰形店はいつもと違い平和であった。

絡人線形店――稗田家と封書（後書き）

だあああ恥ずかしい！！

何書いてんだおれはあああ！！！！

一応言つとくと、反省も後悔もその他諸々も全くしてねえ！！！！

だから多分またシリアスが入る。

生暖かい目で見てください。

絡人繰形店ーマスと毘沙門天(前書き)

MISSコミカルが帰って来ましたー!!

絡人繰形店ーマスと毘沙門天

とある晴れた日の絡人繰形店。

カウンターの上に、ドンツ！と鎮座するのは「くーらーぼっくす」なる保冷機能付きの箱。

中には今朝釣ったばかりのマスが詰めてあり、その数は二人で食べる事の出来る量を軽く超えている。

そんな訳で。

「やっぱここは塩焼きだろ」

「何言ってるのさ、この量なら慧音と連華も呼んで鍋に出来る、いやそうするべきだ」

「二人を呼ぶのは賛成だが……塩焼きにしよう」

「いや鍋だね、この季節のマス鍋は良い出汁が出るんだ」

「塩焼きだ!!」

「鍋だ!!」

早朝から今の今まで霧の湖に張り付いていた二人。

迷いの竹林の案内人、藤原 妹紅と店主、岬影はマスの調理法について論議……という名の言い争いをしていた。

それにしても、この二人の頭には両方作るといふ選択肢がないのだからか？

無駄な火花を散らす妹紅と岬影。

慧音は寺小屋が閉まるまで様子を見に来ないだろうし、連華に至っては明日の午前中は休業だ、と伝えているので今頃ガーデニングの勉強に熱を上げているだろう。

つまり二人の論争を止める者はいない。

すると放っておけばいつまでも止まりそうにない両者の間に割り込む声があった。

しかしそれは仲裁の言葉でもなんでもなく。

「ここですか?! 年端も行かぬ少女を無給で年中働かせている外道がいると言う店は!! さあ毘沙門天様の前に悔いを改めなさい!!」

むしろ新たな混迷への布石であり。

「ーいつの話をしてんだこいつ？」

岬影の呆れ顔も仕方がない物と言えよう。

とはいえ、言葉と共に放たれた弾幕を無視する訳にも行かない。

「無限「不可視の城壁」」

ツドドツツ!! と衝撃が走るものの岬影十八番の防御壁を破るには至らなかった……が。

「舐めるな!!」

舞い上がった埃の中から飛び出した少女、虎を連想させる黒と金の髪に密教風の衣装を着込み、自身の背丈以上の槍を構えるその姿からは熟達者の空気を感じとれる。

「へえ結構やるな」

呑気に相手の評価をしつつ右手を靈力で強化し槍を掴もうとする岬影。

そして……

「そこまでだよお二人さん、せっかく釣ってきたマスを吹き飛ばさねたら堪ったもんじゃない」

「心配したのはマスの方かよ」

「岬影なら吹き飛んでも問題ないだろ？」

槍と拳の一撃を受け止めたのは傍観していた妹紅だ。

その様子に妖怪少女の表情が変化する。

暫し妹紅の顔を見つめると。

「貴方は確か人里の守護者と一緒にした……」

「藤原 妹紅、妹紅でいいよ、毘沙門天の代理人さん？」

どうも二人は一応顔見知りらしい、とそんな事より岬影の耳には妹紅の言葉が引つかかる。

――毘沙門天？って事は

「お前さん、命蓮寺の者なのか？」

これに対し少女は何処か誇らしげな表情で。

「如何にも、私は毘沙門天様の弟子にして代理人を務める妖怪、寅丸^{まる}星^{しほ}だ、故に貴様のような私腹を肥やそうとする輩を見逃す訳にはいかない！！」

素晴らしいまでに誤解している上、彼女の頭の中で自分の悪人像が膨れ上がっている気がする。

――純粹つてのも考えものだな

そんな事を思いながら岬影は苦笑いを浮かべる。

何はともあれ、まずは誤解を解く作業から始める必要があるそうだ。

さて、話しても長くないが簡潔に結論のみを述べるとしよう。

星の説得は直ぐに済んだ。というか始めようとした矢先に連華が帰宅したので説得をするまでもなかったのだが。

そんなこんなで今現在。

「此の度は誠に申し訳ない、まさか貴方が連華の言っていた岬影殿だとは夢にも思わず…」

「えっと、星さんそんなに気にする必要はありませんよ、連華はこの程度の事で気を悪くする様な、そんな小さい器の持ち主ではないのです!!」

——気まずい

「ですよ?!」と言わんばかりの視線を向けられた岬影はどう反応すべきか思いあぐねていた。

確かに気を悪くしていないのは事実だが変に善人扱いされても困る。

すると思わぬ助け舟が出る。妹紅だ。

「ま、連華の言う通りってところもあるけど、早とちりをした点は反省するべきなんじゃないか?」

「そう言う事だな、別に実害があった訳でもねえし」

岬影が何を考えているのか大体把握している彼女の言葉にすかさず便乗する。

「……寛大な処置に感謝する、詫びと云っては何だがぜひ一度命蓮寺にお越し願いたいのですが」

星の顔に尊敬の念が浮かんでいたのは気のせいだと信じたい。

がこの展開は岬影的にも願ったり叶ったりだ。

人里の新勢力命蓮寺、新しい顧客が増える事に越した事はない。

そんな岬影の下心に気づく筈もない星は返答を待っている。

「ああ、俺の方からも頼み……」

カランカラン

岬影の返事を遮るように本日二度目のカウベルの音があった。

――誰だ？

岬影の視線の先にいたのは、クセのあるダークグレーのセミロングに深紅の瞳、丸い大きなネズミの耳とシツポ。

その手に持ったダウジングロッドが特徴の鼠妖怪。

毘沙門天の部下であるナズーリンだ。

「ここからご主人の槍の反応がしたんだが…… ああやっと見つけた」

実は彼女、人里から飛び出していく星の姿を見かけ情報収集の後、追いかけてきたのだ。

「この店の店主は貴方か？」

「確かに俺が店主の岬影だ、鼠妖怪ってことは寅丸の部下か？」

「おや、博識なんだな」

「まあそこら辺はちよいとな」

一般に毘沙門天の使いは、日本では寅、中国では鼠とされている。妖力の質からしてそう判断したのだが正解であつたらしい。

「私の推測が間違つていなければ、私のご主人が迷惑をかけた筈だ、一応謝罪をしておくよ優秀な方なんだが行動的なのが玉に瑕でね」

「な、ナズーリンなぜそれを」

「大体想像がつくよ、ご主人のことならね」

頂垂れる星を無視して進み出るナズーリン。

「多分ご主人も言ったと思うのだが、一度命蓮寺に来てはくれないか？この店とは良好な関係を築きたいと聖も願っている」

彼女の言う聖と言うのは、命蓮寺の開山者である魔法使い。
聖 白蓮びんせつの事であろう。

「さつきも返事の途中だったんだが、ぜひ行か……」

「はいはい、その話は後でいいから早くしないと新鮮なマスが駄目になつちゃうじゃないか」

またもや返事を遮られ見るからに不機嫌な表情の岬影。
だがこのままだと勝手に鍋を作られかねない。

なので。

「分かったよ飯にしよう、二人も食ってください?」

仏教では魚は禁食の筈だが、ここは幻想郷で二人は妖怪なのだし気にする必要もあるまい。

「良いのですか?」

「ああ構わねえよ、この量だ全員で食べても十分だろ」

伺うように尋ねた星に気にしないように言う。

「それじゃー私がとっておきのムニエルを作りますね!」

と言ったのは連華で。

「何言ってるのさ、マス鍋を作るに決まってるだろ」

と言ったのは妹紅で。

「ここは私が腕によりをかけて作らせていただくこう、マスの香草焼きを」

と言ったのが星で。

「分かってないねえ、この時期のマスなら刺身にして食べるのが一番よ」

と言ったのがナズーリンで。

「アホかお前らマス料理といえは塩焼きに決まってる!!」

最後に全く締めくくっていないのが岬影であった。

数秒の沈黙。

「ムニエルです!!」

「鍋だよ!!」

「香草焼きだ!!」

「刺身!!」

「塩焼きってんだろ!!」

この言い争いは寺小屋から慧音が駆けつけるまで続いたとか。岬影が命蓮寺を訪れるのはもう少し先の話となりそうである。

絡人線形店ーマスと毘沙門天（後書き）

明日は人口太陽です。

絡人線形店ーペットと黒歴史(前書き)

お空じゃないよお空だよ、え？区別がつかないって？

心の眼で見てくださいww

絡人繰形店―ペットと黒歴史

絡人繰形店の店主、岬影 連は基本的に客を選ぶような真似はしない。

お世辞にも人付き合いが上手いとは言えない岬影が、開店当初からブレる事のないこの方針を掲げているのには訳がある。

ぶっちゃけた話面倒臭いのだ。客を選び好みするのが。

本当にこいつは商人なのか？ と聞かれればそこまでだが岬影は誰も拒まない……いや、一部の客ではない客を猛烈に拒否するがあくまでも口頭でだ。

それに、受けた依頼は必ずやり遂げる辺りから割と仕事熱心である事も窺える。

冒頭に戻るが、岬影は客を選ぶような真似はしない。彼にとっては訪れる全てが客なのだ。

その証拠に普段から当然のようにツケで済ます某異変解決人や仕事の一つも持っていない某人狼に対してぶっきら棒な態度を装っても、物理的に追い出そうとはしない。

無論、店に対し敵意を抱く者は容赦なく潰すのだが……とまあ、語るとこんな形に落ち着く岬影は今。

「ははは！この店を私の地上征服の拠点として使ってあげる、だから岬影の兄ちゃんにはシヨーグンの任を授けるわ」

この？（チルノではない）の？（チルノではない）な発言を敵意表明と捉えるべきか考えていた。

ーどうすつかねえこの？（断じてチルノではない！！）

どうも向こうは岬影の顔を知っている様だが…どこで会ったのだろうかまるで覚えがない。

一度見たらそう簡単には忘れられそうにもない格好をしているにもだ。

長いボサボサの黒髪に緑の大きなリボン、同じく緑のミニスカートに白のブラウス。

鴉系統の妖怪らしく真つ黒な翼に、上から白いマントをかけており、そのマントの内側には見た事もない不思議な空間が映し出されている。

それだけでも十分特徴的だが、胸には大きな真紅の目。両足に装着された怪奇な物体、極めつけに右腕には多角柱の棒まで付いている。

一体何があれば忘れるのだろうか？

すると岬影のリアクションの薄さに感ずいたのか。

「あれ？兄ちゃん覚えてないのー？私だよ私、一緒に勇儀さんと弾幕ごっこしたじゃん」

「お前か！！！！」

ようやく思い出した。

以前萃香と勇儀に誘われ……否攪われて地底の宴会に参加させられた時に会った地獄鴉だ。

あの時は泥酔していたのとその他諸々で記憶が朧げだが。

——そおいや八咫爺さんの力を取り込んでるんだったか

つまりこの奇妙な両足と胸の瞳は太陽神（又はその使い）である八咫鳥の有する「核融合を操る程度の能力」の象徴。

昔一度だけ遭遇し何を血迷ったのか勝負を挑んで塵も残らない程に消し飛ばされた思い出がある。

まさか力尽きる寸前に守谷の二柱に力を預けるとは思ってもみなかったが。

「……で、確か…れいじ霊鳥路 うつほ空であつてるよな？」

「お空で良いよ、長いし呼びにくいもんね。

いやぁそれにしてもあの時の兄ちゃんはカツコ良かったよねー、」
今だー！俺ごと吹き飛ばせて「……」

バキンー！

岬影が持っていた鉛筆が真っ二つに折れた音だ。

「忘れる」

「うつにゆ？」

「今すぐー！ー迅速に！ーお前の頭の中から消しされー！ー」

酔った勢いとはいえあの様な台詞を吐いたのは「消し去りたい過去」……俗に言う黒歴史である。

このままではいけないと判断した岬影は話題を変えるべく会話を続行。

見るからに焦っていた。

「ん、んで？お空は何の様で来たんだ？」

空は何かを思い出した様頷くと。

「そうそう、私はさとり様に言われてここに来たの」

さとり……と言うと彼女の主である覚妖怪、古明地こめいじ さとりの事だろうか？

となると地霊殿からの依頼が舞い込んだのかもしれない。
前回（11〜13話参照）は失敗したが今回こそはパイプを作っておきたい岬影にとっては朗報である。

「なるほどな、なんて言われたんだ？」

空は暫くうんうん唸ると閃いたと言いたげな表情で。

「さとり様が言ってたんだよ……何て言ってたか忘れちゃったけど」

「何で肝心な事だけ抜け落ちてんだよお間の頭は……！」

覚える事と忘れる事が逆である気がする。

「このままじゃ埒が明かねえ、いつそこっちから地霊殿を訪ねるべきか？」

そう岬影が結論を出そうとするとバン！という音と共に、深紅の髪を両サイドでおさげにした猫耳妖怪少女。
地獄の輪禍。

お空と同じくさとのりのペットである火焰猫かえんびょう 燐りんが飛び込んできた。

彼女は暫く肩で息をすると。

「お空！どうしてあたいを待たずに行っちゃうのさ、一人で行っても言伝を忘れるって決まってるのに」

見事に的を得ていた。

対するお空は特に反省の色を見せる事もなく。

「ゴメンごめん、お燐を待ってるよりパパッと私一人で行った方が早いと思っただよ」

確かに早いが伝える言葉を忘れてしまえば本末転倒であろう。

燐は苦勞人特有の溜息を吐くとようやく岬影に気がついたらしい。

「あーゴメンよ岬影の兄さん、お空ってばいつもこうなのさ」

何となく彼女らの日頃が見えた気がする岬影は気を悪くする事もなく言葉を返す。

「ああ、大体想像が出来た、んでお前も地霊殿の主から伝言を頼まれているんだろ？」

「そういう事、にしても兄さんあの時とはまるで別人だね、凄かったよあれは「特攻隊長岬影連、いざ参る」ってさ、そのせいでお空がSAMURAIってのに嵌っちゃって……」

「良いから今すぐ忘れろおお！！！！！！」

人形の岬影は顔を赤くしたりはしないが、羞恥心はある。

という事で唯でさえ先程のお空の言葉で一杯一杯であった岬影の堪忍袋は。

「そーだ！！お燐はニンジャで兄ちゃんはトッコウタイチヨウで行けば良いじゃん！！」

お燐とお空のダブルパンチにより限界を迎え。

「お前らちよつくら表に出ようか？言っていない事と悪い事の区別の仕方を体に教えてやる！！！！」

絡人線形店の内部に絶叫が響き渡った。

そんな訳で、結局岬影等、一人と一匹と一羽が地霊殿に向けて飛び立ったのはそれから二刻も後の話であった。

絡人線形店ーペットと黒歴史(後書き)

次回こそ地霊殿!!

全国のちりフアンの皆さんをいっしょに期待!!

絡人線形店ーーステンドグラスと3rd eye（前書き）

さとり目線がメインです。

絡人繰形店ーーステンドグラスと3rd eye

絡人繰形店にて岬影達が騒いでいた丁度その頃……

「……遅いわね」

そう呟いたのはやや癖のある薄紫の髪に、半開きの目。フリルの多く付いたゆつくりとした服に身体にまとわりつくような第三の眼を持つ妖怪。幻想郷の地下世界、地霊殿の主、古明地^{こめいじ}さとりだ。

彼女のいる地霊殿広間の床には色取り取りのガラスの破片が散らばっており、天窓に使用されていたステンドグラスが破損したという事が窺える。

ー地上に何でも直せる兄ちゃんがいるんですよ!!

その言葉を受けて自身のペットである火焰猫 燐と霊鳥路 空を地上へ向かわせてからもう随分と経つ。

本来ならば戻って来ていて何等おかしくはない時間なのだが……

「何か厄介ごとにも巻き込まれたのかしら？」

自分のペットに限ってそれはない……とは言いつれもないし何より二人の事が気になる。

諸々の事情で出来ることなら地霊殿を留守にしたいもの、仕方がないと諦め、残したペット達に後の事を頼み、さとりは地底の市街地…通称「旧都」へと飛び立った。

暫く旧都を歩いてきたさとりだが、彼女の周りには驚く程に人通り……もとい妖怪通りが無い。

もつとも、この程度は日常茶飯事なので彼女は微塵も気にしてないが。

――さて、お隣達はまだ地上なのかしら？

見た所旧都で騒ぎが起きている様子もないので、適当に当たりをつけ地底と地上を結ぶ唯一の穴へと急ぐ……が数秒と経たぬうちに足を止めた。

「おや？さとりじゃないか、珍しいねアンタがああ屋敷から出てくるなんて」

――何か問題でもあったのかね

半開きの目線の先にいたのは、顔見知りの鬼、星熊 勇儀である。まあ、この旧都においてさとりに気兼ねなく話しかけてくる相手など片手で数えられる程だが。

「ああ勇儀さん、特に問題が起こった訳ではないのですが、使いに出したお隣とお空の帰りが遅いので……」

「心配して様子を見に来たと」

――心配性だねえ

「ニューアンスはあっていますが、あの二人ならそこまで心配する必要ありませんよ、私としては地上で事が上手く進んでいるか…少々不安なんです」

さとの言葉に勇儀は意外そうな声で。

「ん？あの二人を地上へ行かせたのかい？」

――となると行き先は博麗神社？

「いえ、実は地霊殿で事故がありまして、天窓のステンドグラスが……」

どういう訳か、二人を地上へ向かわせた理由を説明する事になってしまった。

――彼女も内容によっては手を貸してくれるようですし、多少の口スには眼を瞑りましょうか

早々に結論を出すと、さとは今回の経緯について語り始めた。

「……なるほどな、それで俺にそのステンドグラスを修理して欲しいよ」

「そつ！！兄さんなら朝飯前だと思ったのさ、全壊した居酒屋を数秒で元通りにできる兄さんなら、ね」

「ー参ったなあおい」

酔った勢いで黒歴史を築いたばかりか能力まで見せびらかしていたとは……

「凄かったよねえー、ポロツポロだった店が全部元通りになっちゃうんだもん」

「俺の記憶が正けりゃ責任の八割はお前にあつた筈だが？」

あははは、と楽しそうに笑う地獄鴉、霊鳥路 空…もといお空へ呆れた視線を向けるが本人ときたら。

「あれ？そうだったっけ？」

「ーこの鳥頭。」

なぜ居酒屋を吹き飛ばす寸前の言葉を覚えていて忘れるのだ？

「ま、まあ今は早く地霊殿に行こうよ、戻って兄さんの事をさとり様に紹介しないといけないしね」

不穏な空気を感じとつた燐が話題を逸らす。

「さとり様……か」

三人が歩みを進めているのは旧都。

幻想郷の地下奥深くに存在する忘れられた都だ。
主に地上で封印された妖怪や、自分の力を忌み嫌って自ら移り住んできた者、鬼達が住んでいる。

そして

どの住民も一癖も二癖もある者達だらけなこの都の頂点に立ち、妖怪達の精神的楔でもあるのが、古明地 さとり。今回の依頼主だ。

で

「お！！見つけた見つけた、大通りで待ってりゃくると踏んでたんだが予想的中だね」

肉体的楔と言っべきなのが、大柄な身体に見事な一本角の鬼、星熊 勇儀なのだが。

彼女の姿に気がついた岬影は面倒臭そうな声で。

「勇儀：悪いが急いでんだよ、話なら後にしてくれ」

「なんだ？まだあの宴会の事を根にもってんのかい？」

「当たり前だ！！」

元を辿れば勇儀が岬影を宴会に引っ張って行かなかったらあんな事にはならなかったのだ。黒歴史とか黒歴史とか黒歴史とか。

だというのに勇儀はまるで反省の色を見せず。

「私は久しぶりに全力でヤレて楽しかったよ、それはそうと一刻程前にさとりと会ってね、二人の帰りが遅いと心配してたから早く行った方が良い」

「あーそう言えばどの位で帰るとか言っていなかったかも」

「あたしも直ぐにお空を追いかけちゃったしなあ」

「……お前ら」

主思いなのは結構だがこれで良いのだろうか？

「んじゃこれ以上待たせねえように急ぐとするか、知らせてくれてありがとうよ」

「このぐらい構わないよ、それよりまた今度飲もうじゃないか」

やっぱり反省していなかった勇儀に岬影は。

「……検討しておく」

「ー但しお前が酌をした酒は死んでも呑まねえがな、死なねえけどそう心の中で補足し、再び地霊殿への道を急いだ。」

地霊殿の自室にて紅茶を啜りながら読書に勤しむさとの頭には、本の内容など全く入っていなかった。

――勇儀さんは……なぜあの様な事を

考え込む彼女の脳裏で再生されているのは先程の勇儀が去り際に残した言葉。

事情を話すと、どうも勇儀は件の修理屋とは面識があるらしく楽しそうに絡人繰形店・店主、岬影 連について語ってくれた。

ついでに知らせといてやるから地霊殿で待ってなよ、と言われ礼をし去ろうとしたさとりへ彼女は。

「ま、アンタもきっと岬影とは仲良くなれるさ」

咄嗟に心を読もうとしたが既に勇儀の姿はさとの視界から消えていた。

一体何が言いたかったのだろうか？

「心を読む程度の能力」を有し、その力で人間はおろか妖怪や怨霊にまで恐れられるこの自分に。

――まあ実際に会えば悩む必要もなくなるわ

そう納得をつけると、見計らったかの様に扉が開きペットの犬が来客を知らせに来る。

丁度良い。

勇儀があそこまで言う人物とはどれ程の者なのか？

自分の三つの眼で確かめよう。

「……何をしているのかしら、貴方達？」

思わず、といった口調でさどりの口から言葉が漏れる。

すると自身のペットである燐と空は声を揃えて。

「競争です、どっちが先に兄ちゃん（さん）をさとり様に紹介するかを賭けた」「

大真面目な顔で答えてきた。

その隣では勇儀が言っていた通りの服装に、何故か軽く焦げた黒髪の男が頭に手を当て。

「そんなおでも良い事のために弾幕まで使ってたのかよ」

「ーそんなおでも良い事のために弾幕まで使ってたのかよ

何かの間違えかと思った。

なんとか表情を崩さずに済んださとりは。

「うちのペットが迷惑をかけたようね、聞いているとは思っけど私
がここ、地霊殿の主、古明地 さとりよ」

対する岬影も焼けた髪を再生させると。

「そつだないぶ迷惑をかけられたぜ、俺は修理屋の岬影 連宜し
くな」

「ーそつだないぶ迷惑をかけられたぜ

「どつ言つ事？」

「あ？どうかしたのか？」

「ーどうかしたのか？」

間違いない、今まで一度もなかった事だがこの男は……

「心の声と実際の声が完全に一致しているなんてね、貴方一体何者
よ」

つまり思った事をそのまま言葉にしているのだ。この男……いや岬
影は。

「何者って言われてもな、俺は単なる修理屋だ、お燐とお空から話
は聞いている依頼はステンドグラスの修復であつてるよな？」

「ええそうよ、早急にお願いするわ。
それにしても貴方、本当に興味深いわね心が一切ブレないなんて、
普通私に話しかけられると大抵は心を無にしようとして不安定にな
るものよ」

もつとも心を無にしようとしている時点でそれは最早、無とは呼べ
ないのだが。

「はは、そりゃそうだろうな。

心を読まれるなんつー気味の悪い体験なんぞしたがる奴の気がしれ
ねえよ」

一瞬面食らったさとり。

威勢をふっているわけでも、嘘をついている訳でもない。

本心から言っている。

「本人を前にしてよく言ってくれるじゃない、それで商売人が務ま
るのかしら？」

皮肉混じり言ってみるが、岬影は平喘とした表情で。

「本人の前だから、だろ？」

どうせバレんなら最初から思った通りにいやあ良いんだよ」

何となく、何となくだが勇儀の言っていた意味が分かった気がした。

――本当に面白い。

知らず知らずの内に笑みが浮かんでくる。

「ステンドグラスの修理が終わったら、私の部屋に来て頂戴。心を読む必要がない相手と話すなんて久しぶりなもの、色々聞いてみたいわ」

「んーまあ良いだろう行かせて貰うぞ……ぶっちゃけ面倒いんだが地霊殿とのパイプの代価と思えば安いもんだ」

通常であれば激怒してもおかしくない対応だが、さとりはさほど不快には思わない、心を読んで知るよりは面と向かって言われた方がスッキリする。

「そうね、貴方の仕事ぶりによつては今後も頼りにさせてもらうかもしれないわ」

「なら頑張るしかねえな」

余りにも露骨なやる気の出し方に、今度こそさとの口から笑い声が吹き出した。

因みにその後、お空の心を読んださとりが岬影に先日の宴会の話を知り、直後地霊殿の天井を突き破って飛んで行く地獄鴉の姿が旧都にて目撃されたとかされなかったか。

絡人線形店ーーステンドグラスと3rd eye（後書き）

お空がお空の星になりました、地底に空はないけれどww

え？面白くないって？

分かってんだよコンチクショオオオオオ！！！！

絡人線形店――宵闇と幻想入り（前書き）

今回は自分の東方仲間が考えたオリキャラ が幻想入りします、これ以上オリキャラを出す事には抵抗があったのですが、原作キャラとの絡みもあるのでまあいいかなあと。

投稿時間が遅いのは二人で打ち合わせをしていたからです、明日はいつも通り……のハズだ！！

そして後書きにて重大なお知らせが！！

絡人線形店――宵闇と幻想入り

神隠し。

神域である山や森で、人が行方不明になったり、街や里からなんの前触れも無く失踪することを、神の仕業としてとらえた概念。

因みにこの神隠しの「神」とは神奈備、神籬、磐境などに鎮座する抽象的ないわゆる古神道の神だけでなく、天狗に代表される民間信仰としての山の神や鬼・狐・河童などの山や原野に関わる妖怪の類などもある。

また、子供があつてしまう伝承も多いことから、子供を亡くした雨女という妖怪の仕業とも伝えられており、各地に神隠しを行う妖怪の存在が伝えられている。

……とまあ、「外の世界」で言う処の神隠しについて語るとこんなところだろうか。

もつとも、本物の神隠しを知る者の視点から見れば思わず噴き出す様な思量が足りない考察なのだが。

神隠しの真実とは、幻想郷を守護する二つの大結界。

即ち幻想郷内に、外の世界で忘れられ幻想となった生き物や道具を引き込む「幻と現実の境界」、そして論理的に思いを通さない壁として機能する「博麗大結界」の存在によって引き起こされるもの。

外界において周りの人間から忘れられた者や、結界の緩みに誘い込まれた者が、幻想郷へ流れ着く。

外の世界からすれば、あたかも蒸発したかのように映るだろうが実際は幻想郷へと行き着いている。

これが神隠しの真実だ。

そしてその「外界から幻想郷へやって来た人間」を幻想郷では略して外来人と呼称しているのだが。

これは、そんな奇妙な現象に巻き込まれた外来人が、これまた奇妙な店のドアを叩き……そこから始まるやっぱり奇妙な物語の、その序章である。

少年は走っていた。

――なんで

暗く黒い山の中を。

――なんでボクが。

何かに追われるように……というか追われているのだが。

「なんでボクがこんな目にあってんのー?!」

「あはははー!! 待て待てえ!!」

肩まで伸ばされた黒髪ストレート、スラリとした体型に綺麗に整った指先もあいまって少女に見えなくもない少年。

濃紺のセーターに青のジーンズを着込んでおり、彼が幻想郷の住民ではない事を教えてくれる。

そんな少年の後ろを飛んで追うのは、金髪のショートボブに深紅の瞳を持った妖怪幼女だ。

はたから見れば微笑ましいかもしれないが、本人達は……少年は大真面目である。

「ーどうしてこんな山の中にいるんだ? ボクは…ボクは確か……」

見知らぬ山の中。

突然そこにいたと思えば「貴方は食べていい人類?」だ、逃げない方がどうかしている。

「ー確か…あの時……ダメだ思い出せない」

「ほらほらーもっと早く走らないと…追いついちゃうよ?」

ゾワッ!!

背中から噴き出す嫌な汗がセーターに吸い込まれて行く。後ろを見るとほんの数mの位置に妖怪幼女が迫っていた。

振り上げられる鋭い爪を持った腕。

ク・ワ・レ・ル

脚を必死に動かすがどう考えても避けられるタイミングではない。

ーあつ、し、死……死ん………あれ？

だがおかしい、いつ迄経っても痛みが襲ってこない、自分の脚はまだ動いている。

そればかりか金髪少女の姿もない。

「………今のは」

何が起こったのかは全く分からないがとりあえず生きている。

次に何がやって来るか分からないこの状況、少年は人を探すために再び歩き出した。

「………逃げられた」

ポツンと一言を零したのは、白黒の洋服に赤い頭に結ばれたリボンが特徴である宵闇の妖怪、ルーミアだ。

久しぶりに見つけた外来人”で”遊んでいた彼女なのだが……

目の前にある砕けた大きな岩石。

あの黒髪の少年が消え、代わりに現れたのがコレだ。

シン、と耳を澄ませば夜の森に削ぐわなない足音が南西の方角から聞こえてくる。

どうやらそう遠くない所にいるらしい。

それを確認したルーミアは嬉しそうに笑うと。

見た目相応のあどけない表情を消し去り。

「能力持ちの外来人……か、面白いじゃない、本当の意味で楽しめそうだし」

獲物を狩る者の顔で…そう、呟いた。

バンバン!!

深夜の絡人線形店のドアを叩く音があった。

出来ることなら無視して眠っていたい岬影だが、連華は最近命蓮寺の墓地に居候している小傘を訪ねているし、無視した程度で諦める

ような輩は最初からこんな事はしない。

――また咲夜の奴か？

彼女の営業時間を無視した来店はこれが始めてではない。

まあ彼女の主が主なのだし、仕方がないと言えなくもないのだが。

すると、そんな岬影の心に悪戯心が芽生えた。

――ちつくら脅かしてやるか

といつても岬影がやるうとしているのは、単に二階の自室の窓から飛び降りるだけのこと。

丁度真下が店の入り口となっている為、ドアを叩いている者からすれば突然後ろに降りてこられる形となる。

――ま、あいつが慌てる所なんざこの程度じゃ見られえだろおがな窓枠に手をかけて飛び降りた岬影。

五メートル程の落差は一瞬で過ぎていく。

だがそこで岬影は気がついた。

「……………誰だ、お前？」

「わー！、わ、わ、わ、わ、わ、ど、何処から」

見た所、霊夢や魔理沙と同じ年程度の少年だ。

但し、着ている服は岬影が霖之助と共に供養する外来人のそれに酷似している。

「単純に二階から飛び降りただけだが？」

「え、何ですか？」

客を脅かす為、とは口が裂けても言えない。

「ん、まあなんだ、夜中に押しかけて来た馬鹿野郎の顔を見に来たんだよ」

「す、スミマセン」

申し訳なさそうに頭を下げていた少年だったが、暫らくすると思いつ出したように。

「あ、あの！！ボク追われてるんです、金髪の小さい女の子に、信じられないかもしれな……」

「あーまたあいつか、いいぞ少年、そこまで聞きゃ大体の予想はつく、聞きたい事は山ほどあんだろおが今は休んだ方が良さだろう」

ここに外来人がやって来たことは過去にも何度かあった。

幻想郷内の人間と妖怪のバランスに影響を及ぼさない外来人は妖怪達のよいエサとなるパターンが多く、一歩間違えていればこの少年も同じ運命を辿っていただろう。

――明日にでも霊夢のところに連れて行くか

岬影は見つけた外来人を極力、博麗神社へ送り届けている。

別に見殺しにしても良いのだが、最初の外来人を外界に返すために努力した以上他の外来人も平等に扱うのが筋だ。

「ありがとうございます、では御言葉に甘えて」

「へえ、中々肝が据わってるじゃねえか、普通なら色々聞き出すとするもんなんだがな」

少年は照れ臭そうに苦笑いすると。

「ああ、その、なんて言うか、こんな場所なら何でもありかなあって、今聞いても頭に入りそうにもないですし」

「はは、そりゃ言ってる、んじゃさっさと入りな、ここは絡人繰形店、俺は店主の岬影 連だ」

見かけによらず、順応力は高いようだ。

岬影が名乗ると、少年は自分が自己紹介をしていない事に気づき。

「ええっとボクの名前は……「無限」不可視の城壁」……っ
え?!」

遮るように宣言された岬影のスペルカードが少年に叩き込まれようとしていた弾幕を防ぐ。

「……邪魔だよ、岬影」

「はっ！！、悪いな宵闇の、こいつは俺の客って事になってんだ、
回れ右して帰ってくれ」

何時の間にか接近していたルーミア。

岬影に感ずかれずにここまで近づいただけでも、彼女の力の鱗片は
垣間見える。

「早いとこ店に入れ、ウツカリ巻き込みましたで死にたくねえだろ」

岬影は少年を店の中に押し込むと。

ルーミアと向き合い。

「なんならここで朝まで俺と殺りあうか？」

「小賢しい、あんな面白い奴を放って置ける訳がない」

ルーミアからは小妖怪レベルの妖力しか感じられないが、そんなも
のは当てにならない。

「あいつは……」能力持ち”よ、私が黙っていても、そのうちスキ
マ妖怪が出てくる、ああ、この時期ならあの”人間”が来るのか」

「……能力持ち、ね。」

お前が言うなら間違いねえんだろが、その辺りは俺が悩むべき所
じゃねえな、つかお前と殺るのは疲れるし、黙って帰ってはくれ
ねえのか？」

しかしルーミアは威圧的な笑みを浮かべ。

「冗談、偶には暇潰しの相手になってもらわないとね!!」

「まったく、面倒臭えな!!」

直後、周囲一体が闇に覆われ、その闇は朝まで消える事なくそこに在り続けた。

「だ、大丈夫ですか、岬影さん」

「割と無理っぽいな……あの野郎途中からリボンを取りやがって、黒峯の旦那が止めに来なかったら一生朝日が拝めなくなるところだったぜ」

結局、黒峯が仲裁に入るまで戦う羽目になった岬影、体は直ぐに再生するが精神的疲れは岬影にはどうしようもできない。

「そおいや、まだ名前を聞いてなかったな」

名乗る途中でルーミアが割り込んで来たせいで、少年の名前を聞きそびれていた。

少年は若干緊張した様子で。

「あ、はい、ボクは紅林くればやし 大虎おおとらです、名乗り遅れてすみません」

「……偽名か？」

「何故に?!」

「……いやまあだつてなあ

「凄まじいまでに名前負けしてたからな」

「……言わないで下さい、この世から消えたくなるんで」

「……沈黙が痛い。」

そんな訳で、大虎にこの世界の概要を説明し二人が博麗神社に向かったのは、太陽が真上に登ってからであった。

絡人繰形店――宵闇と幻想入り（後書き）

切り方が妙ですが一応三部作のつもりなので、この辺りで切るのが妥当かと。

そして待ちに待った（俺が）重大なお知らせ。

夜光 沙羽さんの執筆する東方MX 文々。ニュースとうちの絡人繰形店が後書きにてクロスする事となりました。

文々。ニュース……現実のニュースの内容と東方キャラがコラボ？！我が道にテンプレなどいらぬ！！という方は是非。

<http://nk.syosetu.com/n3384x/>

それではクロス開始！！

幻想郷に「てれび」という映像を映し出す奇妙な箱が広まり早数ヶ月。

現在では河童技術研究所放送部の面々により各チャンネルが充実したものとなっており、多くのレギュラー番組が熾烈な視聴率争いを繰り広げている。

一例をあげると。

紅魔館――「レミアアのパーフェクトカリスマ教室」

白玉楼――「剣道の極意……もとい大食いの極意」

永遠亭――「家庭で出来る治療の基礎基本」

地霊殿――「正しいペットの躾け方」

命蓮寺――「妖怪と遊ぼう」

人里――「慧音先生は見た!!」

地獄――「閻魔様に人生相談」

守矢神社――「信仰とは何か」

今日はその中でトップを爆進する人気番組、妖怪の山――「文々。ニュース」の内容によって起きた悲劇の物語について話そう。

「連……!という事よこれは……!」

そう叫んでいるのは、清く正しい(笑)射命丸 文だ。

結界に行動を制限された彼女の前には、一ミリも微笑んではない笑顔の岬影の姿がある。

絡人線形店――就職と能力（前書き）

幻想入りシリーズ第二話。

因みに次回で一応出番終了、もしかするとレギュラー化するかもし
れませんが、そこは皆さんの反応次第と言つことに。

絡人線形店――就職と能力

「無理ね」

「ああ、不可能ですね」

「やっぱ、駄目だよなあ」

「……えっと、ボクにも分かるように説明してくれませんか？」

博麗神社に着き、猫でもないのにコタツで丸くなっていた霊夢を引きづりだし、予想通り顔を出した黒峯に岬影が事情を説明した所、即答であった。

――まあ当たり前、だな。

一人だけ話に着いて来れていない大虎へ霊夢は眠たげな視線を向ける。

「どういう意味かって言うと、アンタを外界、つまり元の場所に戻す訳にはいかないって事よ」

「な、何故なんですか？」

動揺を隠せない大虎に対し、八雲 紫・藍、博麗 霊夢に次いで幻想郷の結界管理に携わる仁狼院の主、黒峯が答える。

「幻想の力、それを有する貴方を外界へ放置してしまえば、結界の歪の原因と成り得るからです」

「要約すると、能力持ちのお前を外の世界にほっぽらかしにすると、この場所に、幻想郷にとって不都合な事態になるって事だな」
分かり難い黒峯の説明を岬影が補足する。

その言葉を受けた大虎は、両手に持った大きさの異なる小石を持ち上げ。

「そんな事を言われても……僕に出来るのは……」

意識を小石に集中させ、イメージする。

右手の小石と左手の小石、それが存在する”点”を……

――入れ替える!!

「……これぐらいの事ですよ」

左右が入れ替わった小石を見つめながら呟く大虎。

「結構便利じゃない、強くなれば移動の手間が省けて楽になるし」

「その能力のおかげで宵闇の奴から逃げ切れた訳だしな」

何とも霊夢らしい発想だ、と思いつつも意見には同意する岬影。

「ああ、「点と点を入れ替える程度の能力」でしたか、いつぞやの月人と類似する箇所が見られますが……まあ関係は無いでしょう、肝心なのはこの少年の今後について、ですね」

「一度人里に連れてって慧音に会わせたら？ 手に職無しで放っておく訳にもいかないでしょ」

「それはそうとして、大虎、お前外の身内に伝えたい事とかあんじやねえのか？」

岬影が一応気を使うと、大虎は何処か寂しげに笑い。

「良いんですよ、ボクは孤児ですから。

外の世界にだってボクの心配をする様な人はいませんし」

「へえ、それなら楽で助かるわ、結界を越えさせると後始末が面倒なのよね」

「ーはあ、こいつは全く

いや、霊夢が言っているのは事実なのだが。けれど大虎は一瞬の間を置き。

「それは……迷惑をかけずに済んで良かったです」

どうも物事を客観的に見る霊夢の言葉が身に染みたらしい。とことん変わった奴だ。

「それじゃ俺は店に帰るが…達者でな」

「色々ありがとうございますございました岬影さん、いずれ挨拶に伺いますから…！」

「期待しないで待ってるぜ」

と言っても、少くぐらい変わってなければ幻想郷に適應できまい。そう思いながら、岬影は博麗神社を後にした。

岬影が出て行つた博麗神社にて……

通常の外来人でここに永住を決める者は、農作業を手伝つたり、手先の器用な者は、呉服屋で働いたり、何かしらの職を見つけるといふ話を聞かされた大虎。

「けどボクは体力がある訳でも無いですし、手先もそこまで器用じゃありませんよ?」

「んなもん見りゃ分かるわ」

何故に。

「けど、アンタには能力があるでしょ?それを鍛えて何か自分に出来る事を探せばいい、為せば成るって言うじゃない」

「ああ、博麗の言う通り、なんなら自分から一つ働き口を斡旋しますか?」

「良いんですか?!」

驚く大虎に黒峯は無表情を崩さぬままに。

「ああ、貴方の能力が役に立つ仕事ですし、あちら側も人手不足の様なので」

「黒峯……それって」

黒峯の思惑に気がついたらしい霊夢。

「為せば成る、ですよね？」

「……それもそうね、面白そうだし」

どうやら結論が出たらしい。

黒峯と霊夢が立ち上がり、慌てて大虎も後に続く。

「ああ、では善は急げと言いますし、行きますかかれはやし枯林」

「え、いやボクは紅林で……」

「私もお茶を補充しなくちゃならないし、行くわよおおほら大洞」

「いや、だから大虎です」

紅林 大虎の苦難は続く。

「あ、そう言えば一つ言い忘れてたけど」

「何です、霊夢さん？」

視線をそちらへ傾けた大虎に霊夢は、声色一つ変えずに平喘といつも通りに。

「アンタには、人間を辞めて貰うから」

「はい？」

そう、宣言した。

紅林 大虎の苦難は……やっぱり続く。

絡人線形店――就職と能力（後書き）

大虎君は名前ネタ路線で行きます！！

絡人線形店――新入りとネーミングセンス（前書き）

昨日更新出来なかった……

幻想入りシリーズ最終話、ってかこれがやりたかった。それだけの
お話。

絡人繰形店―新入りとネーミングセンス

大虎を博麗神社に任せて早数週間、珍しく面倒事に巻き込まれる事もなく過ごしていた岬影が件の外来人の事など大体忘れていたその日。

滅多にお目に掛かれない二人組が絡人繰形店に来店した。

いや、別にこの二人が一緒にいる事も両者が別々にやって来る事は珍しくも何ともない。

ただし……

「相変わらず閑古鳥が元気に鳴いてるねえこの店は」

「大きなお世話だ小町、客は少ないが依頼はきちんと来ているから問題ねえ」

ぶつきらぼうに告げた岬影を軽くスルーしてケラケラ笑う赤髪ツインテールの死神、小野塚 小町と。

「ふむ、店の外装、内装は整っていますし内部の掃除も怠ってはいない様ですね、後は……」

「にしても今日は二人揃ってサボりですかってイッテエエツツ！」

「この馬鹿店主の対応さえ良ければ、及第点をつけるのですが」

「アンタも懲りないねえ連之字」

今し方岬影の頭上へ叩き付けた悔悟の棒を片手にヤレヤレと言わんばかりの溜息を吐く幻想郷の閻魔様、四季 映姫・ヤマザナドウが二人でやって来る事は非常に珍しい。

「まあ、冗談はさて置き今日は何の御用でここへ？是非曲直庁で物品の破損でもあつたんですか？」

それなら通信用の護符で呼び出してくれば此方から出向いたのだが。

そう思う岬影に映姫は悔悟棒を懐にしまいつつ。

「いえ、今回は私達の私用です、仮にそうだとしても是非曲直庁にそのような余裕はありませんし」

どうも地獄の財政難は解決されていないらしい。

「アタイの舟もボロいまんまだし、ま、仕方がないと言えばそれまででんだけどねえ」

事実とは言えまともに仕事をしない部下の物言いに。

「逆を言えば、その舟を使い続けられる程に貴方が仕事を疎かにしているとも言えますが、小町よくよく考えてみれば貴方が着いて来る必要も無い筈です。」

新しい舟が欲しいのでしょうか？ならば一人でも多くの霊を渡すべく三途の川へ戻りなさい、大体貴方の精進が不足しているから舟の新調へ回す事にならないのですよ？

そう、貴方は少し……いえ、まったくもって自分自身に甘過ぎる」

店内で公開説教を開始した閻魔様に岬影はなんとも哀愁の漂う声で。

「説教なら店の外で好きなかれどうぞ、それと結局なんの用なので？わざわざ俺の前で説教を見せに来た訳でもないのでしょうかに」

対する映姫も本来の目的から遠ざかっている現状に軽く咳払いする
と。

「実はですね、貴方に会いたい者がいまして、私達はその引率と言った所です」

「はは、アンタもきつと驚くよ岬影」

いや、そんな事を言われても、だ。

「俺の目には二人分の姿しか見えねえぞ？」

ついでに店の周りの気配を探るも収穫は無かった。

けれど二人はあらかじめ打ち合わせをしていたかの様に一枚の札を取り出し。

「時間になりました、一旦仕事を切り上げて直ちに能力の使用を急ぎなさい」

「焦らず、練習通りにやるんだよ。」

アンタならこの程度の距離何とでもなるさ……！」

映姫が持っているのが通信用の護符だと言つのは分かった、となる
と小町の方の札は一体……

と、岬影が見ているうちに札に妖力が流れ込む、しかしこれは。

——小町の力……ではない？

「それじゃ、こっちの合図で行くよ、参・式・壱、そい!!」

その瞬間、光が……札が消えた。

と言つか、札のあった場所には一人の少年が立っていた。

長い黒髪、同色の瞳、その細い首から上は前に見た時と変化はない
が……

「なるほど……な、それがお前の選んだ道ってことか、因みに後悔
は？」

「まったく微塵も、本当はもっと早く挨拶に伺いたかったんですけど
ど、色々と忙しかったんですよ、色々と」

是非曲直庁における下級職員が身に纏う制服。

少々サイズがずれているのか？袖から拳の半分しか出ていない手に
切れ味の無い大鎌を握る元外来人。

「では、改めて外来人もとい是非曲直庁職員雑用係、死神の紅林
大虎です、よろしく願いますね」

「おう、ってか雑用かよ、旦那の紹介ならもつとそこそこの地位に

つけたんじゃねえのか？」

何故？という視線を向ける大虎に。

「旦那以外にそんな事を思い付く奴に心当たりはねえしな」

「あははは、けどボクとしてもこういう仕事からこなしていく方が性に合うと言いますか……」

「つまり、目立つのが嫌だったのさ、地道に頑張りたいんですって言うてね」

「ちよっ！！先輩?!」

慌てる大虎を見るからに楽しそうな顔でからかう小町、仲がよろしい様でなによりである。

そんな彼らに……否、小町に映姫は。

「小町、余り悠長にしている暇はありませんよ？是非曲直庁は完全実力制ですからね、下手をすれば船頭の職を追われる可能性も……」

「大いにありうるな」

変なところで息の合う映姫と岬影。

「またまたー、そんな事がある訳……ある訳ないですよね？」

小町は笑い飛ばそうとしたらしいが、一ミリも笑ってはいない映姫の顔に後半から切実感が滲み出ている。

「そうならない事を祈っていますよ、ですが仮にこのまま進めば」
そこで言葉を切り、片手をヒラヒラと振る。

要は、働かざる者さようなら、と言う意味であつたりした。

「えーと、先輩？大丈夫ですか、顔色がメチャクチャ悪いんですけど？！」

「いいんだ大虎ほつといてやれ、彼奴には良い薬になんだろ」

これで少しは働く気になったでしょう、と映姫は岬影と大虎の方へと向き直り。

「それでは、我々は引き上げるとします。

これ以上は営業の妨げるになるやもしれませんが、お客が来るかどうかは別として」

「最後の一言は余計です、ではまたのご来店をお待ちしておりますね、金があるかどうかは別として」

何とも言えない皮肉の応酬だが、大虎は普段から厳格という言葉に服を着させたような自分の上司が割と砕けた会話をしている事に驚いていた。

驚いて、そして

「行きますよ、小町、クレオ」

思い切りずっこけた。

それはもう盛大に。

「クレオ？」

何だそれ？ と首を傾げる岬影に大虎は。

「いやあの岬影さん忘れて下さい！！四季様も言わないって約束してくれじゃないですかぁー！！！」

「おや？何の話ですか？」

――確信犯だこの人！！

「クレオってのはねえ……」

見事にしらばつくれる映姫の代わりに小町が説明し始めた。

「苗字から二文字、名前から一文字、そんでクレオさ」

「それや分かるんだが、何故にクレオ？」

「ヒントはアタイの名前さね」

岬影は考える。

名前？小野塚 小町……小町……小野 小町……世界三大美女……
クレオパ……

そして吹き出した。

「はっははは!!何だよその行き着きかた!!小町お前、いくらなんでもネーミングセンスが無さ過ぎじゃねえのか?」

久方ぶりに心から爆笑中の岬影に。

「いやあの岬影さん……」

遠慮がちに大虎が切り出し。

「名前の発案者は映姫様だよ、連之字」

小町がトドメをさした。

「あの一……四季様?」

今にも体から黒い何かが噴き出そうな閻魔様に岬影は恐る恐る尋ね。

「……何ですか?岬影、別に私は怒っていませんよ、自分のネーミングセンスを笑われたぐらいでは全く怒りません、怒ってないんですって」

とは口では言っているものの、悔悟棒に印された罪の数は秒読みで増えてゆく、多分大半が私怨。

言い残す事は?と笑顔で聞いた映姫に岬影は一言。

「ナイスネーミング!!!ってイッテエエツツ!!!」

見事な放物線を描き、岬影の体が宙を舞った。

後日、あの時は感情的になり過ぎました、と人一倍責任感の強い映姫が店の手伝いを申し出、映姫の気配を察した客達は誰一人として絡人線形店に近づかなかった。

絡人線形店――新入りとネーミングセンス（後書き）

クレオ君退場のお知らせ。

明日からは平常運転に戻ります。

絡人線形店――唐傘お化けと悩み事（前書き）

今回は連華が主役の二本立て！！

明日から平常運転とか言った矢先に何やってんだ俺？！

絡人繰形店――唐傘お化けと悩み事

大きな紫色の唐傘お化けに水色と赤のオッドアイが特徴の少女、付喪神・多々良 小傘は悩んでいた。

それこそ人生最大の悩みと言うに相応しい内容でだ。

現に、相談があるの、と言って絡人繰形店から引つ張ってきた親友の連華も真剣な表情でこちらを見つめている。

そして……

「……どうやったら、もつと人間を驚かせるのかなあ？」

「まだ諦めてなかったんだ小傘ちゃん、後悩んでる顔も可愛い!!」

「まあ―真面目に考えてよ連華!!、これは”しかつもんだい”なんだよ?」

ひらがなに聞こえた気がするがそんな事はない、無いんだってば。

本来、唐傘お化けである小傘は人を驚かし、それで腹を満たすタイプの妖怪だ。

しかし外の世界ならいざ知らず、ここは幻想郷。

文字通り幻想が生きるこの場所において、今更ただ驚かした程度でビククリしてくれる親切な人間などいない。

そればかりか。

「最近は驚かそうとしても全然上手くいかないし、八百屋を驚かしたら野菜をくれたし、魚屋に行ったらお魚をくれたし、寺小屋に行ったら子供達に懐かれるし、呉服屋に行ったら服を直してくれるし」

バン！！と机に手を叩きつけ。

「あそこの人間たちは私を何だと思ってるの？！私は妖怪なんだよ？！小さい女の子みたいな扱いをするなんて……」

全くもう、とぼやく小傘に連華は柔らかい笑みを浮かべ。

「んーでも可愛さは正義だしね、きっと人里の人達も一生懸命な小傘ちゃんに何かしてあげたいんだよ」

妹をなだめる姉の様な口調で語りかける連華。
前半の言葉さえ無ければ……いや言うまい。

「だったら素直に驚いてくれればいいのよ」

「いやでも可愛いし」

そう、それなのだ。

物陰から自慢の傘をさして飛び出た時の人間達の反応が。

初対面だと。

「おやおや、可愛いお嬢ちゃんだね」

顔見知りになると。

「おお、小傘ちゃん！！丁度よかった今日はいい野菜がたくさん取れたからね、これ持って行きな」

だめだ、これでは駄目なのだ。

こんな「人間を驚かす程度の能力（笑）」に甘んじている場合ではない。

……私は

「顔を見ただけでも驚かれるような、そんな妖怪になりたいの！！」

そう言う小傘の姿が岬影に認めて貰おうと努力する自分と重なって

……

――力になってあげられるかな？

いや、ならなくては。

こんなに一生懸命な友人の為にも。

連華は机の上の小傘の手を取ると。

「あのね、小傘ちゃん。

それなら一人いい相談相手がいるんだけど……」

「……それで私のところへ来たという訳なのね？」

「はい！！幽香さんなら何かポイントを知っているんじゃないかと思ひまして」

「連華あ、やっぱり帰ろうよ。何か機嫌も悪そうだし」

ところ変わってここは太陽の畑。

その一角に位置する、大妖怪・風見 幽香の住居だ。

小傘の、顔を見ただけでも驚かれる様な妖怪、からピンときてやって来たらしい。

幽香は内心で溜息を吐くと。

「明らかに人選ミスよ連華、それとそこの貴方、小傘と言ったわね内緒話をするならもう少し小さな声でしなさい」

ビクツツ！！となっている小傘を無視した連華は。

「でも、人里のお花屋さんに行くと皆幽香さんの顔を見ただけで驚くじゃないですか」

どうやら、岬影とは一度店員の指導についてジックリと語り合う必要がある。

そもそも、彼女のあれは驚かれる……と言つより寧ろ恐れられていると言つた方が正しい。

しかし、流石の幽香も真顔でこう言われると邪気が抜けてしまう。

と言つより真面目に相對するのが面倒になつてきた。

と言つ訳で。

「私よりも、ご自慢の店主に相談した方が話は早いわよ、何だかんだで良い案を思いつく筈だし」

厄介事はまとめて岬影に押し付けようとしたのだが……

「いえ、今回は連様の力に頼らず私達の力で解決したいんです。

ね、小傘ちゃん？」

そう言い切つた連華に小傘は頷くと。

「そうよ！岬影には”ぱわーあつぷ”した私の最初の犠牲者になつてもらふんだから……！」

やたらと張り切る二人に幽香は今度こそ溜息を吐き。

「……どんな心境の変化なのかしらね、この子が岬影を頼ろうとしな
いなんて

「……仕方ないわね少しだけレクチャーしてあげるわ、その後は自
力でどうにかしなさい」

成長を続ける一輪の花の友に助力するのであった。

絡人線形店――唐傘お化けと悩み事（後書き）

うちの幽香にはお母さん属性がオプションでついていますがオンかオフかは相手による。……というか連華にだけ。

それでは恒例？の文々。ニュースとのクロス！！

えーき「こんにちわ視聴者の皆さん、では今日も早速地獄――『閻魔様に人生相談』を開始したいと思います、相談役のえーきです」

れん「同じく相談役のれんだ、ってか何で俺まで呼ばれたんです？小町にやらせりゃいいでしょうに」

えーき「この作品の主人公が出なかつたら意味がないで……」

れん「ちよっストップ！！そこから先は言わせねー！！」

えーき「いいじゃないですか後書きなんですし」

れん「最低限のキャラは保って下さい！！」

えーき「では最初の相談です」

れん「聞けよ俺の必死のフォーロー！！」

えーき「ペンネーム、クリーム林さんからの相談です。『実は僕の上司、普段はとっても良い人なんですけど変なあだ名をつけられちゃって、どうにかならないでしょうか?』」

れん「どっかで聞いた様な話ですね、しかもごく最近俺の店で、どうするんです?」

えーき「どうにもなりません、さっさと気に入って下さい」

れん「一方的すぎんでしょ?!相談に乗るどころか一瞬で切り捨てましたよね!!」

えーき「それでは今日の相談はここまで、相談役の機嫌が悪いので早めに終了とさせていただきます」

れん「どんな独裁番組なんですかこれ!!それとそこはせめて具合が悪いと言って……」

えーき「また次回お会いしましょう!!」

れん「やりたい放題だなアンタってイツテエエツツ!!」

えーき、って打つ度に「A級戦犯」に変換されて笑が止まらんww

絡人線形店――紅茶と苦勞（前書き）

年明けに帰ってきた大馬鹿野郎です。

現実リアルという呪縛から開放されて漸くここに戻ってくる事が出来てホッとしています。

まあまたボチボチと更新していきたいと思いますので、宜しければ移動時間の暇潰しなどにお使い下さい。

絡人繰形店――紅茶と苦勞

絡人繰形店二階、連華の自室にて。

「それじゃ幽香さんからアドバイスも貰えた事だし、そろそろ実行に移すべきだね小傘ちゃん」

「……あれってアドバイス、だったのかなあ？」

店主の岬影が来店したフランドール・スカーレットに首根っこ掴まれて紅魔館へと引きずられて行き早数刻。

連華が心から敬愛する四季のフลาวーマスターこと風見・幽香の助言を受けた二人の付喪神は『多々良・小傘改造計画』目指せ恐怖の唐傘お化け!!（わあこわい）』を最終段階へと進めようとしていた……いたのだが。

「……どうせ私なんか、誰にも怖がられない駄目妖怪なんだよお」

「こ、小傘ちゃん気を確かに!!」

幽香の的確過ぎた助言は元より危うかった小傘のアイデンティティを根幹から粉碎していた。

そもそもサディストな面を持つ彼女に助言を求めた時点でこうなる事は予測できそうなものだが……

「幽香さんは……ほら、少しモノを率直に言い過ぎるだけと言っか、思ったことがそのまま口から出ているだけなんだよ!!」

それを連華に求めるのは少々酷な話である。

やはり人選ミスだったのか？と今更ながらに自覚した連華が慌ててフロアに入るも。

「それ……言ってる事は間違っていないって意味じゃない」

「はう！！」

火に油どころかニトログリセリンを注ぐ結果となってしまう。

（幽香さん……なんでまたあんな言い方を……）

連華はただ、風見 幽香の発言の真意を掴めず悩むばかりであった。

その頃件の大妖怪、風見 幽香は小屋を後にした連華達が飛び去るのを見届け、静寂を取り戻した部屋の中で紅茶でも注ごうかと”二人分”のカップを取り出し湯を沸かし始めた。

彼女は扉の付近を一瞥し、何も無い空間へと自然な調子で語りかける。

「随分と早いお出ましね岬影、そんなにあの子の事が心配なのかしら？」

「別に、今回のこれは単なる興味本位だぞ？」

そう答え、分解中の身体を再構築した岬影は空いている椅子へと腰掛ける。

幽香もそれ対しては何も言わず岬影を見つめると。

「……親馬鹿」

「お前だけには言われたく無い台詞だな、それ」

間髪入れずにそう返した岬影だが、風見の大妖はそれを鼻で笑う。

一見、本当に興味の無さそうな顔を取り繕っているが幽香は知っているのだ、岬影が彼女等の…あの二人の付喪神の様子を見ていた事など。

「ふふ、娘の事が心配でコッソリ後をつける親のどの辺りが親馬鹿ではないと言えるのかしら、貴方も素直じゃないのね」

その言葉に一瞬苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる岬影だが、彼とて彼女とのやりとりに関しては相当手馴れていると自負しているのだ。

なので。

「そう言うお前もあいつ等に頼られて満更でもない顔してニヤついてた癖よおおお?!」

その頭に突き刺さった日傘はその証拠であると言えなくも無かったりする。

「……いつから身体の末端に視覚まで備えられるようになったのよ」

「あー大体100年ちょい前ぐらいだった気がするな」

もつとも、岬影の言うニヤついていたと言う幽香の表情の変化に気付く事が出来る存在はごく少数なのだが。

しかし、幽香にとっては岬影にソレを見られてしまった事自体が許せない訳であつて。

「それで、わざわざあの子達をストーキングしていた貴方が、こんな所で油を売っている理由は？」

「ストーキング言つな」

「でも事実でしょう？」

「現実と事実は似て非なるものだ」

「そうよね、現実には常に非情なもの、その歪んだ性癖には竹林の医者も匙を投げだすに違いないわ」

……面倒臭えなコンちくしょう。

彼女との間に……と言うか幻想郷に住まう少女等の過半数との間に会話が成立しないのは毎度の事ではあるのだが。

彼女達がスペルカード同様に好む『言葉遊び』、岬影は嫌いだ。回りくどいのは自分の性に合わないらしい。

どちらかと言えば苦手なのだが似たような物である。

「まあーあの後も暫く様子を見てたんだが、特に問題も無さそうだし今頃連華の奴が妙案を出してる頃だろ、あいつはアレでかなり頭が切れるそこにお前のヒントが加われれば一発だ」

「当然よ、貴方が出る幕なんてどこにもないって事、それなら店の中で大人しくしていれば良かったじゃない」

確かにその意見も筋が通っているが。

「いやまあそうなんだが、よ」

岬影はどこか遠い眼で。

「今までに連華が張り切り過ぎて頑張るとなんだかんだで俺が苦勞する羽目になるパターンが多かったんでな」

すると幽香自身も身に覚えがあるのか？普段の彼女らしくない苦笑を浮かべる。

「確かに、あの子私が後ろで様子を見てると直ぐにガーデニングの工程に現れるもの、せっかく綺麗な花の刺繍の入れ方を伝授していたのに私が注意しなければ指ごと刺繍の一部になってたわよ」

全くもつ、と呟く幽香に全くだ、と頷く岬影。

共通の悩みで多少暖まった場で。

「つーか何で俺らこんな所帯染みた会話してんだ？年季の入った夫婦じゃあるめえしよ」

ピシッ！！と空気が凍った。

「…………紅茶、淹れてくるわ」

「お、おう」

見事なまでに竜頭蛇尾な返事をした岬影だが、“無”を通り越して“武”表情と化した幽香の顔を見れば無理もない。

彼女としては普段からそのネタで弄んでも無反応の癖に、さらりと切り出した岬影に腹が立った…………のか立っていないのかよく分からずにいたのだが。

何はともあれ、紅茶である。

「淹れてきたわよ、まあ緑茶派の貴方の舌に合うかは分からないけれど」

「俺が緑茶派だと知った上で紅茶を淹れてくる辺りがお前らしいよな、折角なんで頂くが」

こうは言ったが別に岬影は紅茶が嫌いな訳ではない、どちらが好きかと問われれば緑茶と答えるが紅茶には紅茶の良さがある。

把手を掴み先ずは一口。

「…………ん？」

違和感を感じたのかティーカップから口を離れた岬影、釣られるように幽香の視線もそちらへ向けられる。

「紅茶葉……変えたのか？」

「ええ、まああの子の薦めでちょっとね、お気に召さなかった？」

「いや、今までの奴より俺の好みだぞ……連華の野郎狙ってやりやがったな」

この光景を想像しながら紅茶葉を買う連華の姿、を想像すると少しばかり笑ってしまう。

どうもそれは幽香も同様であつたらしい。

「あの子らしいわねえ、これは中々本当に」

「それもそうだな、で幽香」

「……何かしら」

「何でまた俺らはこんな所帯染みた会話し（ry」

バキ！！ドカ！！ガツシャーーン！！

結局、岬影は上記の通り苦勞する事となった。

「だ、大丈夫かなあ、上手くいくわよね連華」

「できるできる絶対できる、平気だよ小傘ちゃんコレはいける！」

「……連華、声が大きい人間にばれちゃう」

「ゴメンなさい」

こんな漫ざぎ……会話をしている二人は今、命蓮寺の裏に位置する墓地へとやって来ていた。

何故に墓地？と聞かれれば、これまでの調査結果に幽香の言葉を照らし合わせた結果である。

「これなら皆驚くこと間違いなし、って言うのはあくまで私の持論だけこの方法が最善なのは間違いないからね」

そう言っつて連華は小傘へと自信満々の笑みを向ける。

けれど、人によっては（妖怪だけど）その笑みから安心感を貰えたりするのだ。

「……ま、信じるよ連華も一緒に考えてくれたんだもん、私も頑張らなくちゃ」

「そうだね、お？早速一人目のターゲットが接近中」

「ふふふ、此处で修行していつの日か岬影にリベンジよ」

それがいつの日になるかは分からないけれど、このなんだかんだで頼れる友人と共に、やれるだけやってみようと志を新たにすする付喪神、多々良・小傘であった。

それから数分後、墓地中に届きかねない元気な声が墓参りのオツちやんの腰を引っこ抜いた。

うらめしや〜

それから数週間後、謎のキョンシーに墓場から追い出された小傘が連華に泣きつき、結局岬影が苦労する事になるのだがそれは東方神霊廟にて。

絡人線形店――紅茶と苦勞（後書き）

神靈廟の小傘がズルい、可愛過ぎて倒せんわ！！

因みにフランが持ってた岬影はフェイクです中から岬影ゆっくりが出て来て「NDK？NDK？」を連発してきます。

条件反射でキゅとしてどカーン！！ですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1952v/>

東方 絡人線形店 只今営業中

2012年1月1日03時46分発行